

佛國ポジチヴィズム教頭ピエールラフィット著



日新叢書
支那文明論全

并支那西洋關係概論

東京 八尾書店發行

A GENERAL VIEW OF CHINESE CIVILIZATION
AND OF
THE RELATIONS OF THE WEST WITH CHINA.
PIERRE LAFFITTE.
DIRECTOR OF POSITIVISM.

緒言

千八百五十九年及び千八百六十年に於て、余は人。間。一。般。の。歴。史。に。つ。き。數。回。の。講。義。を。な。せ。り。就。中。三。回。の。講。義。は。孔。子。及。び。支。那。文。明。な。り。き。余。が。今。梓。に。上。せ。ん。と。す。る。も。の。之。な。り。

數回の講義中特に之を出版する余の主なる目的は、西洋と他の諸國との關係を調和せんか爲め、合理的及び倫理的政略を起すの必要を、我が上流社會の心と情に喚起せんと欲するにあり。此等の關係は次第に鄙賤なる貿易主義若くは狹隘なる改宗主義に支配せらるゝに至りしか、能く其主義を吟味すれば到底政事上又は貿易上の目的を遂ぐるの口實たるに過ぎず。余は又望む、茲に感化せんと欲する所の境遇の十分なる哲學的研究に基つ

ける此政治的概念の標本は、生活及び世界の較、簡單なる現象を研究するに要する所の注意及び耐忍と、少くも同一の度を以て社會的現象を研究するの必要を、識者に十分證したらんを。加之其範圍内に全地球を包含する所の政略の組織は、啻に其者自身か樞要の題目なるのみならず、又直接間接に西洋の再體制といへる切要の問題に關係せり、何となれば人間の常態を誘發するに適せる眞正の教は、實に始めより地球上の事物全體を包括すへき政略を構造し得ることを示すべきを以てなり。是れ實驗哲學が實際なす所にして、其意各國の識者の心を連合せんとするにあれば、遠からずして此教の價値を認め得る人々に發見せられん。

然れども進歩せる人民にて形成せらるゝ團體か、世界の他の部分に對して正當の政略を採用し得ん前、自ら其内を顧みて一變化をなさゝるへからず、而して此變化が起りたる時は、西洋の内政に於て更に健全なる反動を生すへし。

此變化は耶。蘇。教。國。なる總念を捨て、西。國。即ち泰。西。なる總念を採るにあり。斯の如き交換は事實の法式的表象に外ならざるを以て、深慮あるの士人は盡く之を賛成せん、唯僅少なる狂信者のみ反對すべきなり。

西。國。なる語は主要なる五國民、即ち中央に佛人、南に伊多利及び西班牙人、北に英吉利及び日耳曼人の團體を稱するものにして、オーストリアが指示せる如く、ヨーロッパの時代より同一

の利害及び責任に依りて連合せらるゝ人民なりとす。
 泰西なる語は耶蘇教國と云ふよりも一層合理的なり。第一に、此名稱は魯西亞及び東洋の耶蘇教信者を含蓄せず、此等の人民は嚴格に此團體に屬するものと想像すへからず。他の利益は、此著明なる團體を形制せる所の全來歴を十分に表するにあり。耶蘇教なる語は唯此來歴中の一種を示すに過ぎず、并は勿論注意するに足るべき緊要事なりと雖も、實は其中にて最も效力少かりしものなり。西國の形成は第一羅馬人の征服に起り、シヤールマンの政略加特力の勢力封建の影響及び前五世紀の革新的發達に依りて完成せられたり。故に此語は總へて吾人の祖先に對して正當の事をなし得るの利益を有すと雖も、耶蘇教國なる語は唯

其一を重んじて他の一層緊要なるものを無視するものなり。然れども其意義の正當なる外に、西國を以て耶蘇教國に代ふる事は、政事家の意見及び竟には人民の意見に於て一大變化を生じ、彼等をして眞に市民的の觀念を發せしむるを得ん。シールサル及ヒトラヂャンの時より耶蘇教といへる岩層の下に埋没せる市民的立脚點は、ヘンリー四世及びヒリセリウなる兩雄の時に掘出せられたりと雖も、其始めて十分に出現せしは西洋がシヤールマン以來に誇張し得べき最大政事家フレデリック二世の時なりき。今日フレデリックの如き天才を要すといふにあらず、形勢の明瞭なるや、眞の政事家たるものは何人と雖も一見して知るを得へし。假令フレデリックは、大獨宰官なる純粹の市民的立脚點に立ち

なから、能く統治するを得たりとするも、斯る英雄にありて當時
 僅に出来得へき事なりしか、此事や今日にありては全く切要と
 なれり、再言すれば、今日政事家の職務は全く神道的偏執を去り
 て政をなすにあり、爾來神道的考慮は、専ら一私人の生活内への
 み限らざるへからず、實に佛國に於ては自由信仰の宣告ありし
 か爲め、法律の現状恰も斯の如し、若し有名なる法律家の語の如
 く、法律は無宗旨なりとせば、吾人は更に云ふを得ん、佛蘭西に於
 て國家は宗教を有せざるなりと。故に政事家にありても亦人民
 にありても、此形勢に平均して其觀念及び情操を置かざるへか
 らず。

耶蘇教國を西國とする此交換は、衆人が合同し得る唯一の普通

なる土地を指定するを以て、西洋の内狀に必須なるのみならず、
 對外の政略に於ても是に譲らざるの効果を有すへし。本國に於
 て全く腐朽したるの組成を、妄に東洋に輸入するを目的とする
 事、之より西洋にとりて出来得へからざる所とならん。普通宗教
 となり得へき概念は、舊來の組成以外に求めざるへからず、地球
 上他の人民を深く誤解せしむへき此耶蘇教的觀念は、之に於て
 か彼等を正當に理會するの障礙とならざるに至らん、吾人は將
 來に於て却步的又は革命的癡見に誤られず、能く合理的に彼等
 を判斷するを得なん。

以上の概説は、西洋に於ける上流社會、即ち社會問題を解するに
 適せる人士に依りて、今や容れられ得へきものたり、而して此題

目に關する世間の流説は、或は歷史上無比の度に迄も時勢の必要以下にありと云ふも、敢て過言にはあらざるへし。

余は天主教が組織したる嘆賞すべき宣教を、卑劣なる貿易主義より出づる時には奸黠なる時には暴戾なる壓制と反照して、宗教的精神の優點を明示せんと勉めたり。

余は敢て望む、真正なる宗教的精神特に加特力教徒は、其援助を合理的倫理的政略に借さんを、蓋し此政略は私利を營まんか爲めに公力即ち兵を使用するの弊害を責め、人道の名に依りて、西洋以外に現出する所の文明に對し、適宜の尊敬を要求せんとするものなり、苟も宗教の名を有せんものは、其信條の基礎の何たるを問はず、其宣教の準備又は保護として力を使用するの不善

なるを諤々として絶叫すへし。此點に於ては支那に於ける天主教徒の高潔なる宣教を模範とすへし。

吾人は最後に望む、西洋の健全なる輿論は早晩西國海軍と稱する公力を創立し、以て有用なる貿易を護衛するの外に、後進人民に對する強國の壓制を防禦せんを、此壓制は元來貪饑の心より起るものなれば、愆情次第に制御し難き傾向あるを以て、後來益其威を逞くするに至らん。

余が今出版する著述に於て余は實。驗。哲。學。の原理に依りて感動せられたるのみならず、又支那文明に關するオーガスト・コムトの明論に依りて刺衝せられたり、氏は云へり、

多く社會的なる特種の勢力は、支那文明をして他に見るへか

らさる高度に迄拜物教を啓發せり。他の場合に於けるよりも特に善く法式的にせられ、茲に拜物教は神道を制し、職業の世襲なるにも係らず、人類の三分一をして族制の煩累を免れしめたり、云々。

人間一般の歴史を講ずるに當りて、余が支那文明及び其最も卓越なる代表者たる孔子を論究したるは、蓋し斯る感動のありしを以てなり。

余は敢て望む、斯る著述は、合理的倫理的政略に依りて全地球上の事務を總轄し得んものは、唯獨り實驗的宗教にありとするの斷定を、世上に擴布するの一助とならんことを。

一千八百六十一年六月十五日

ピエール、ラフフィット誌す

支那文明論

并支那と西洋の關係概論

目録

第一篇 支那文明の根底及び之を變

更したる元素の抽象的評價

支那文明の法式的研究の必要なること	一
拜物教と神道の差別	一一
支那文明の心理的基礎	二二
睿智的倫理的結果	三三
支那に於ける家族の通性	四四
支那社會の通性	四五
老子の哲學	五四
佛教	五九
加特力教	六二

第二篇 支那文明發達の説……………六三

支那文明を支配せる二力即ち天子及び儒者……………六四

支那進化の経過……………七二

支那文明の第一期……………七八

支那文明の第二期……………八八

支那文明の現状……………一〇八

第三篇 孔子及び支那文明に於ける彼の影響……………一三四

支那の睿智的進化及び孔子出現の境遇……………一三四

孔子の事業及び略傳……………一四二

孔子の徒即ち儒者……………一六四

西洋及び其外國との關係……………一七七

西洋支那交通の歴史及び現状……………一八四

支那と西洋の關係を調和すべき原理……………一九七

支那文明論 并支那西洋關係概論

佛國 フォイト 著

第一篇 支那文明の根底及之を變更したる元素の抽象的評價

諸君吾人は今日支那文明の全野を測量するの途に上らんとす。研究其者よりするも亦社會學の問題に對する關係よりするも吾人は斯の如き研究の緊要なるを認むるを以て三回の講義を之に充てん。

地の極東に於て、一の注意するに足るべき開化あり吾人は之に對して如何なる評語をも下し得へけん然れども此開化たるや十分の活力を有し其發達駸々として歇むことなく日に西洋と益々密接しつゝあり。开は他にあらず世人の爲めに誤解せらるゝ彼の如く甚き支那の開化なりとす。哲學上より之を観るも之を研究せんこと甚だ緊要なるべし何となれば之れか觀察の勞を取れる人にして其材料の十分なるに



も係はらず其之に對する意向の出來ん限り公平なる時にありてすらも殆ど皆其呈する所の異觀を理會し得されはなり。他の點より之を觀るも此研究は合理的政略の基礎を西洋に與ふるものとして大に有用のことなるへし。

天主教徒か布教的大派遣をなせし以來支那文明は數多の有用なる著述の題目とはなれり。此以前に於けるや彼のマコーボロの說話の如きは唯荒唐無稽の語なりと認められたり。蓋し吾人か始めて得たる支那の實識は結局天主教徒の賜に歸せざるを得ず而して此時より鋭意熱心に此題目の闡攻に従事することゝはなりぬまかも斯く研究せる開化に對して誠實なる同情を以てせしなり。乍去夥多の機敏なる説と趣味ある特別觀察のありしにも係はらず此開化の法式的評價は猶補充すべき缺點として残れること茲に之を斷言するを得ん。是れ蓋し怪むに足らざるなり何となればオーガスト・コムトか發明せる靈智進化の絶對的法則を知得せる後にあらされは斯る評價は決して

て出來得へからざることなればなり。此發明以前に於ては觀察者か人心の過去來歴を講ずるに當りて真正なる比對的見解内に自身を置き純然其偏向心を脱却すること能はざりき。從來支那を研究せんと企てたる人々の智は皆神學若くは形而上學若くは純精科學に依りて制せられたるものなり。以上三態の心は一として明瞭完全に支那文明を評價するに適せず。神學的精神にありては此斷定自ら明白なりとす。吾人か茲に講せんとする所のものは神學を以て根底とせざるの開化なり自然固有の神學的發達をなさざる所の人民なり神學の如き思想法は此開化か業既に一定の形體を成せるの後僅に外國より輸入せられたるに過ぎず。故に支那文明に熱心なりける天主教徒輩の如きは唯其細目を詳にせしのみ之より以上の事に至りては一として理會するを得ざりき。彼等は全體として之を解し又は其特性を解し得ざるを以て支那學者に歸するに學者其者の心には全く疎遠なる一種の概念を以てするに至

れり。

形而上學的。精神。にありては、其不適當なること更に前者に倍せり。元來形而上學なるものは、漸次に融化する神學の變體なり、故に斯る勢力に制せらるゝの心にして、神學よりも形而上學とは猶一層緣故なき所の開化をは、焉んぞ能く確實に又全體として判断するを得んや。此事の全く出來得へからざるは、深く支那の智識に通したるアベル・レムサトの如き有名なる人と雖も、老子の哲學を誤ちて、支那古代の思想即ち開化の起點の代表なりと云ひしにても知らるへし。扱此甚た形而上なる老子の哲學は、吾人か後に之を論する如く、單に支那開化を攪擾するの元素なりとす、然らざるも唯幾分か之を變更したるの元素たるに過ぎず、多分外國傳來のものなるへし。是れ有名なる識者にして、十分に文學上の智識を有する場合に於てすらも、世の流行説といへる一大旋渦の力には、容易に抵抗し得ざるの著例なり。アベル・レムサト氏か其論を著したる當時たるや、哲學上の舞臺は、今や全く燃ゆ盡くせるも、

頃刻の光明を以て赫々たりし形而上學の一派にて充たされしなり。氏は知らず識らず斯る流潮に驅られて、深く自ら研究せる支那をして、一層世人の心を惹かしめんものと、其藐乎たる搖籃に乗りて、當時歐洲の學者か心酔せる形而上學の推論的翺翔をは、此舞臺にて演したるにそある。

科學も亦神學及び形而上學に均く、此開化に對して真正の説明を呈出するに適せず、然れども猶科學及び支那文明兩者の精神に於て、互に調和するの點少しとせず。开は要するに、兩者共に物質の自然活動を認識するに存せり。左れど科學は斯る問題を解釋せんに、未だ十分に其纏綿せる形而上學の束帶を脱する能はず、又十分普通なる概括説を出し得るの點に達せず、加之西洋科學の抽象的特性は、着實なれども而かも形而下なる支那精神を理會するの障礙となりなき。故に人智を司る法則の發見こそ、此大問題の法式的研究に必須のものなりき。此發明をなしたる人は誰ぞ、オーガスト・コムト是れなり。蓋し支那文明説

は、真正なる歴史哲學の原理を適用するもの、中、困難にして而かも特色を有するの一例なりとす。

今此探究をなすに先きたち、余は第一に拜物教と神道の主要なる差異を説明し、神道は、原本的なる拜物教より不易的なる實驗哲學に達する進化の經過的段階に外ならざることを示さるへからず。

各社會の進化に於けるや、彼の神道的状態に固着する所の不安定に妨碍せられずして、能く繼續團結し得る完全の常態は唯二様あるのみ、一は人理及び諸社交の原起點たる拜物的状態にして、一は其最後の大團圓たる實驗哲學的状態なり。

拜物教と神道の主要なる差別を手短に述べたる後、神道は、單に經過なりとの至要なる問題を特論せん。

睿智上より云へば、拜物教は、物體を以て、管に活動するのみにあらず、然れども又生けるものと思料するにあり、物體が呈出する種々の活動法は、之を刺激する、感觸及び欲望に歸するものなりと想像するにあり、約

拜物教は原本的
態なり

言すれば、宇宙を人間に同化するにあり。斯の如き思想法に於ては、唯一の過實的誤謬あり、亦亦簡單なるものにして、争ふへからざる真理に基づけり。物質の實際に活動するは真理なり。科學は次第に此真理を應用しつゝあり、實驗哲學は之を疑外に置きたり。然れども物質通有の活動以外に、唯或る種の物體にのみ屬する特別の活動法あり、生即ち之れなり。萬物皆活動せり、然れども皆生あるには非るなり。是に關して拜物教が侵せる唯一の誤謬は、唯或る物體にのみ屬する所の活動法を、萬物にも存せりと看做すにあり。萬物を以て、管に天賦自然の活動力を有せりとすのみならず、之れ争ふへからざる事實、又生あるものと思料せる點にこそ、創始には免れ難き過實的思想、其誤謬は存するなれ。

吾人實は斷言するを得ん、人心は實際其最始の立脚點として、以上の如き臆説を要するを。抑、吾人の睿智が依りて以て動作する所の、基本的法則は何そや。吾人が最も疎遠なる所の現象を、最も親近なる所の

ものに同化せんとするの法則是れなり。即ち語を變へて之れを云へば、人心の主要なる傾向は人間か知得せる諸細目を概括して最も簡單なる臆説を作らんとするにあり。此美妙なる太初哲學の法則は唯吾人人間の睿智か一大普通の事實を認めたるに過ぎず。扱吾人か最も善く熟知して着手の第一とすべき所のものは人間なり。吾人は吾人自身を自識せり、吾人の行爲は特別の感觸特別の動機憤怒親切愛情等の爲めに喚起せらるゝを認識せり。故に人間か生物其者よりも甚た激烈なる動作を爲す所の外物即ち奔流暴風其他物質中に特別強猛なる活動の存するを證する所の彼の浩大なる氣象學的現象を観るに當りてや、彼等は固り想像せん、斯の如き活動を現す所の物體は人間の行爲を決定するものに等しき感情及び意象を有するや必せりと。左れば拜物教は、人智發達の順序に於て實際避くべからざるの一段階にして、人心の原本的意向及び以て始むべき總念即ち智識より生ずる必然の成果なり。

拜物教の普通及び
功用

拜物教の最終段は、天體禮拜なり。此天然自然なる拜物教の影響を受け、且つ都合善き天地の境遇に助けられ、一の社會か水艸を逐ふの域を脱して定住の段階に達し、若干の人をして天體を觀察し、全力を擧げて純粹なる思辨的事業に従事せしめ得るの方法、十分に整頓せるの時機に至るや、茲に自然普通なる拜物教の巔に於て、彼の蒼穹の遠體に歸するに命令權を以てする所の、一層法式的なる拜物教は誘起せらるゝなり、而して注意ある觀察者は直に證明せん、天體は實に至大至強の勢力を以て、吾人人間を支配するを。要するに拜物教は人心必然の起點にして、天體信仰は、其最終なる而かも最も法式的なる元素なりとす。拜物教か人心になしたる功用は如何ん。人間か必ず踏まざるべからざる一段階、何となれば吾人の稟性及び境遇の原本的狀態よりして、自然に發出し得べき唯一の理論なればなり、たるの外、整頓發達せる形、而下觀察即ち現體觀察の組織は、其賜なりとす。實に拜物教は各現象を以て、之を呈する所の現體の意志より起れりと考ふるものなれば、此現

體たるや欲望情操及び道性を有し、爲めに観察者に對するの關係をして、深く親密ならしむるに至る。故に此等各現體の形像は観察者をして、簡は全く自動性なし、彼等に對して一二の效果ある關係を有せざるなりと認むること能はざらしむる所の明確強烈なる力を以て現はれ来る。観察せらるゝ現體と観察者との間に存する此親密なる愛憎喜怒哀の關係は、必ず一層精確なる形像と一層活潑なる象表を生ずるや、更に疑ふへからず。左れば拜物教は形而下觀察、即ち自己専有の力ある現體の觀察を組織し、隨て後來抽象的考慮即ち現像觀察の基礎となるへき形而下形像を供給す。斯の如く拜物教は、都て吾人か各種の思辨の材料を蒐集し、各個人及び各種族の發達に於て主要なる役目を務むるなり。

神道——就中多神教は、其最著なる形式——は、必然なる僧侶の媒介を経て、抽象的觀察より起るものとす。余は簡單に此緊要なる問題を釋かん。人心が種々の物體に普通なる性質を確知し、之を別途に考慮するの時

期に達するや、前に説明したる萬物を人間に同化するの原本的傾向あるか爲めに、其屬する所の物體を離れて此等の性質を表示するの必要を生じ、竟に人心を驅りて、此等各現象の管理及び造成を特別の生類に歸するに至らしむ。例へば、吾人か、個々の樹木の總念を出て、一層抽象的なる森林の總念に遷るや、吾人は森林の神、即ち森林の萬木に普通なる全現象を支配する、一の生類を按出し來らん。

多神教即ち物體とは殊別なるも、猶物體か呈出する諸現象を起す所の生類の創造は、抽象的觀察より起れり、而して現象を現體に歸せずして、之を表示せんか爲めに、鬼神を想像する論理術の一旦應用せらるゝや、此術——無量の發達をなし得る此術は、能く抽象を整齊して、其作用の無限に繰返さるゝことを容すものとす。

然れども神を創造して抽象を整齊することは、最も困難なる靈智的方法にして、決して凡俗の心より發する能はず、常に思辨に従事する特別の種族、即ち僧侶の事業に屬せり、而して其一度起れる以上は、其眞の傾

向たるや僧侶の發達を催促するにあり。
 斯の如く拜物教の後、茲に僧侶の媒介を経て多神教即ち神道は來るなり。多神教は其起原を抽象に受けなから進んで此心理的作用を鞏固にし、益之を擴張す。
 今詳に人理の此第二の特著なる段階を考ふる時は、吾人は直に多神教の免るへからざる不安定に比して、拜物教の深遠なる心理的整合を感せずんばならず。
 夫れ拜物教は唯現體觀察にのみ限るを以て、遠く正路を離れて彷徨するの餘地を有せず。然らば如何なる原因より人心の錯迷は生し得るや。蓋し抽象の組織、即ち現象を起す所の物體を離れて、其現象を考量するより生ずるものとす。其結果たるや、現象は其何たるを問はず、實際に存在しつゝある所の境遇に異なる無窮の境遇に於て、之を概念するを得ん。譬へば、吾人若し運動をなしつゝある實體にのみ注意を凝らすとして、運動なる現象を特別に研究せんには、形而下觀察の會て吾

人に示さるる無数の場合に於ける運動を想像するに至らん、吾人は其生けると死せるとを問はず、總て萬物の天性として、水上又は空氣中の運動を概念するを得ん、吾人は毫も時間に關せずして、即ち無限の速度を有するものとして、之を概念するを得へけん。要するに、現象の抽象的研究は、吾人をして出來得へき無限の場合を概念せしめ、之に反して形而下觀察は、唯現實の場合のみを吾人に示すに止まる。

故に多神教に屬する抽象の組織は、人智を引きて活潑なるも不安定なる位地に置き、以て之をして常に遠く迷路に誘はれ易からしむるも、拜物教は然らず、抽象か想像すへからしむる出來得へきの場合を避けて、唯現體の觀察と實際の考慮にのみ限れるを以て、人心の度は前者に比して不活潑なるを免れずと雖も、其高度の整合を有して正鵠を誤らざるの完全なるは、其特色なりとす。

拜物教は自然に合成的なり、何となれば其現象に對するや、更に之を特立視せずして、常に相互の倚頼に注意すればなり。然れども法式的の

ものにはあらず。法式的考慮は、之に先きたつの抽象なかるへからず。拜物教的段階は、人性の種々主要なる部分の特質的發達を容すものならず。例へば、拜物教は、大科學の發達を容さず、詳言すれば、其連續的なると比擬的なるとを問はず、現象の諸順序を司る眞法則の發見を目的とする純正科學の發達を容さざるなり。吾人は、現象を分離して孤立的に觀察するにあらずれば、之を管理する所の天則を發見し能はず。故に眞正なる科學の進歩は、必ず之に先きたつ所の抽象の設立を含蓄するものにして、是れ拜物教的の程度に於て發達すること能はざる、人性の一大相貌なりとす。左すれば、拜物教は、合成的状態にして、永く自ら整合連續し得へしと雖も、人性の諸元素を各自に養成することを進ませず、又、眞正に法式的にせらるゝを容さざるなり。實驗哲學は、獨り此二條件を満足す、實驗哲學は、合成的なり、然れども一方に於て深く抽象的なると同時に、又法式的にして、人性各種の特能を實踐的に養成せる後、更に之を調和す。

神道は單に經過的
にして不安定なり

然れば、神學は、原本なる拜物教と不易なる實驗哲學、即ち合成的と法式的の中間に、其位地を占むるものにして、人力の發達に必要な砥石となせむといふへし、何となれば、實驗哲學は、人力の發達したる後にあらずれば、之を整理すること能はされはなり。故に人性各元力の特別なる進化を管理するは、神學の任務なりと念はざるを得ず、然れども神學は、此等の心力を整理すること能はざるを以て、自然其不安定たるを免れず、是を以て神道は、人心太初の状態と最後の状態間に存する、多少迅速なる一經過たるに過ぎざるものとす。

此主要なる命題は、希臘羅馬及び封建なる三大經過に關して、オーガスト・トコムの證明する所とはなれり。第十四世紀に始まりつる西洋に於ける革命的變化の運行たるや、其終局に近づくに隨ひて、益々無政府状態を呈したるを觀れば、之を經過と呼はんよりは、寧ろ極機といふべきものゝ如し。此三大經過は、各其特色を以て人性の一大相貌を主宰したりき、即ち希臘は、睿智、羅馬は、活動、封建は、感情を管理せり。

余を以て之を觀れば、以上の觀念は神政即ち神道政治其者にも及ばざるへらす。神道の各段階は多少安定なる経過と認むべきなり。吾人は概言するを得ん、神道は多少革命的にして、過眼の形象に外なること能はざるものなりと、何となれば、神道は抽象を組織し得るも、之を整理すること能はされはなり。

夫れ抽象的觀念を創造して、之を代表するに神其意志勿論多少專制的なるもの(を)を以てするは、實に神學的精神なり。斯く抽象を構成するの能力には更に限界なきを以て、其結果たるや人心は正路を失ひて、種々無限に彷徨すへし、而して之を防止するものは、唯生活實際の必要あるのみ。左れば神道は常に方向を誤り易き心理的狀態にして、曾て十分の整理を受けたることなく、其起りたる組織の一體に、却りて常に紛擾を來たすものとす。蓋し抽象を整理し得るもの唯一あり、森羅萬象は一定不變なる連續及び比擬の法則に従ふものと認むる、科學的精神是なり。

斯の如く神道の各段階は、其如何なる種類たるを問はず、必ず不安定なるものなり。今神道政治—神道的段階の太初の形式—に注目せんに、吾人は此命題の直接なる證據を發見すへし。

神道政治の特性たるや、人民の等級を生じ、此等の諸等級を調和するに、僧徒の勢力を以てするにあり。等級政治は恰も模型的に多種の職業を起し、以て分業を堅實にし、以て餘地を吾人が活動の或る重要な發達に與へん。然れども僧侶に依れる諸等級の調和は、十分に功果あるものならず。吾人は實に世俗の僻見に正反對して、神政は十分なる政府を組織せざるなり、十分なる統一力なき政治なりと云ふを得へし。

夫れ眞正なる神道政治、并は常に多神教を根底とせざるへからず、に於ては、彼の猶太及び法王政治に於けるか如く、曾て法師の一團結を凝集することなく、常に諸神に對する特別の僧侶あり。是れ實に必須のことにして、若し然らざる時は、其政治の壓制、實に想像すへからざるの極度に達すへし。然れども僧侶を組成するの諸元素は、最上權を有する

一個の法師を圍みて群集せざるを以て、僧侶は十分に統御せられざるなり。僧侶は衣食住の規則を制定す、分業を堅實にす、財産の世襲に宗教的神聖を附與す、然れども十分なる諸等級の團結を組成するを得ず。是を以て斯の如き政治は、其内部の構造に於て安定を缺けり。故に統轄力の過強なるを以て、神政の主要なる關點とする普通の僻説は、事實の正反對なり。又其外形につきて之を觀るに、神道政治は抵抗力に乏し、若し武士の起れるか爲めに、此抵抗力十分に發達するに至れば、神政其者が却りて驚嚇せらるへし。乃ち兵士は僧侶を制して之を服従するに足るへけれど、又以て單純なる武斷政治を行ひ得る程には至らず、羅馬文明の例に於けるか如し。其結果たるや例へは古波耳斯亞の如く、雜種政治を生すへし、尋常皮相の説は、之を以て神政の眞標本なりとすれど、實は腐敗せる其一種に過ぎざるなり。

神政は効力に乏し

今諸種の神道に附屬する所の不利を算せざるも、社會の神政的段階其者に於て二箇の主要なる關點あり、曰く、其統轄力の過弱なること及び

外界の妨礙に對する反動の過小なること是れなり。故に神政は、永久の連續に耐えざる一種の經過的狀態たるに外なる能はず。

此命題は、我か地球上に起れる社會の千態萬狀を概測するに、一層の精確を附與するを以て、歴史上眞に緊要なるものなり。加之從來普通にもあり、又普通にあり得へき唯二箇の宗教、即ち拜物教及び實驗學の兩者間に、益、親密なる關係を確立するを以て、高き社會的價值を有せり。夫れ拜物教は、自然に普及せる唯一の宗教なり。拜物教は諸睿智か其最始の企圖をなしたる心理的狀態にして、總て社會的組織の段階に於ける起點なりとす。否、然るのみにあらず、一神教の段階に進歩せる開化中にありてすらも、形而下即ち實地の理心は、猶拜物教的に連續し來れり。萬物を支配するには唯一の神ありと信する所の人すらも、今日或る種の現象を説明して、以て觀察しつゝある現体の多少明瞭なる意志より起れりとせり。徹頭徹尾拜物教的なる此形而下の理心は、諸睿智を制する普通一般の理心なり。觀察の次序を正して之を整

理する所の抽象的理心は、古來より唯變更的作用を有するに過ぎず。然れば社會進歩の諸段階に於て、衆人は皆其心現状態の基礎として、拜物教を守りたりと斷言するを得へし。

實驗哲學は拜物教
を混化合併す

拜物教は既に前にも云へるか如く、形而下即ち實地的理心の基礎なるを以て社會の諸状態に於ける眞に普通の宗教なれば、安定は其主要なる特性なること、又之に反して抽象を輸入するも、而かも之を整理せざる神道の惡徳は、其不安定にあるを示すこと、甚た緊要なりしなり。此重大なる命題は、吾人をして能く拜物教自然に普通なる宗教及び實驗哲學(法式的に普通なる宗教)の關係は如何なるものなるを要するや、又將來漸く如何に成り行くべきかを理會せしむへし。加之、實驗哲學は、獨り其特有の方法を以て、拜物教に對して正當のことを爲すものどす、即ち之を啓發し、竟に之を一體にす。故に吾人が測量の始に當りて、神道全體を其眞正の位地に置かんか爲めに、即ち人理の兩基本的階段間に存する經過的插處(同狂言)なるを示さんか爲めに、勞を取れること斯の

如くなりしも、眞に價値なしとせざるなり。

前世紀の末より、神道が次第に人智上の勢力を失ふに隨ひて、學者も自ら其眼を拜物教に注ぐの傾向あり。此傾向は明に拜物的詩歌の發達に依りて示さる、而して萬有神教の過實的突飛すらも、亦以て學者か自然に拜物教に歸依するの、不分明なれども確實なる徵候となすに足れり。故に實驗哲學は、正當に之を處し、之に適宜の組織を與へ、以て衆多の理心の需要を迎へ、同時に進みて學者一般の意向を整理す。

支那文明は拜物教
的なり

今や吾人は支那文明を研究するの必要を理會すべき位地に達せり。此文明の神髓までも、拜物教的にして、眞に嘆美すべき着實盛大なる力を以て發達し來れり。故に歴史上より之を觀れば、其研究たるや高き價値を有するものにして、政事上及び道德上よりするも、亦甚た緊要なりとす、何となれば支那と西洋との關係、否實に地球上他の諸國と西洋との關係は、無政府的釀害的の不道德を以て汚染せらるればなり。人力を制して以て政事上に道德の權力を定立すべき宗教は、宜く斯の如

き開化をして理會せしむべきなり。蓋し此點に於て世界の事を管理するには、實驗哲學の恰當なるを證せん、否、其獨り専ら恰當なるを知らん。諸君、余は希望す、吾人か今爲さんとする簡單なる講究に依りて、諸君の心に印せらるゝの斷定は、まさに斯の如きものならんを。

余は先づ支那文明全體の概論より説き起さん、最初に其主要なる元素然る後に其形而下の發達。

次に睿智及び道德の點より觀るに、此開化の最高表様たる、其原本的精神の精華たる、其名は大帝國民の深き尊信を命ずる所の人、即ち孔子の價值を吟味せん。

第三即ち最後に、支那と西洋の關係は、歴史上如何なるものなりしか、而して此關係は到底如何なるを要するかを探究せん。敬天に依りて法式的にせられたる拜物教は、支那文明の心理的基礎なり。是れ此浩大なる文明の眞精神を理會し得るに先きたちて、成るべく明瞭なる光線中表示せざるべからざる。一主要命題なりとす。凡

そ各社會は其何たるを問はず、拜物教より始むるを常とすること、吾人か既に説明したる所なり。支那に於ては此段階眞に能く法式に適ひ、爲めに發育の浩大なる整合と勢力とを具有し、彼の大國民の社會的進化の基礎となるに至れり。他の國に於ては拜物教は數多の疑ふべからざる痕跡を留めたり、支那に於ては能く其地歩を保ちて、繼續發達せり。

此偉大なる帝國內に建設せらるゝ、無數の祠堂祭壇を觀るに、實に山河星辰天地に奉れるものなるを知る。死者の靈魂を拜禮することも亦甚た發達せり、是れ何人も知れるか如く、毫も未來を信せざる人民に組織せられたるなり。扱死者の靈魂とは如何なるものぞ、吾人人間の合死的遺骸より發出せる禮拜物たるに外ならず、而して此人民の所見に隨へば、彼等活人と同様なる一種の活動を保持するものなり。神學及び形而上學か唱ふる所の死なる觀念は、拜物教徒の腦裏に存在せざるなり。彼等の眼より觀れば、死也は一の活動法を他に變更したるもの

に外ならず。故に西洋神學信者が自ら保證する如く、後の世界即ち地獄極樂の觀念を全く有せざる一國民に依りて、死に對するの輕蔑心は彼の如く著るしく表示せらるゝなり。此皮相上の矛盾は神學其事實なるを容すも猶之を説明する能はず。支那に於ける拜物教は、敬天の禮に依りて、一の制度とはなれり、而して此制度の濫觴を推すに、遠く該帝國文明の眞源に遡れり。天は實に最上の勢力を有する、禮拜物なり、其作用は、以て他の萬物の活動を整理するに足るべき強大なる現體たり。然れども其支配力は、唯最上なるのみ、絶對的には、あらざるなり、是れ注意すべき最要點なりとす。神道特に一神教的段階に於けるや、神異の力は、絶對的にして專制的意志を有せり、然れども拜物教に於ては然らず、其意志は最上權力を有すも雖も、猶自己の法則と特種の存在とを有する他の自然的意志と交接關係せり。蓋し現在の場合に於て、他の萬物の活動を整理管轄する最上權を有するの現體は、天是れなり。此大總念に基づきて支那の

敬天の式

可觀的天を禮拜するは支那人が實際なす所なり支那學者は耶穌教の神を稱して天主と云ふ蓋し支那西洋兩者の概念の異なる所は天なる現體と天より特別なる現體とにあるの明證なりと云ふへし。

哲學家及び立法者は、其處理すべき文明を治めんか爲めに、其立脚の地を取れり。此等の立法者か、此法式的なる天の概念に達したる思想の連鎖は、吾人自ら之を想像するを得ん。天は一目瞭然たる諸天體の共有座なり。此等の諸天體は強烈疑ふへからざるの活動を有せり。天體中最強なる太陽の進行に依りて、人生か始終支配せらるゝは確實なることにして、社會的進歩の數多の段階に於けるや、太陽は最上なる禮拜物となるに至れり。然れども天體にして若し斯く浩大なる活動を有せん歟、其共有座なる天は勿論諸現體中の最も勢力あるものならざるへからず。此點につきてレムサトは氏曰へり、哲學者も亦支那人に同じ、吾人か目撃する可觀的なる天を禮拜すと考ふへからずと。何を以て斯く考ふへからずとする歟。开は古往今來曾て視るへからざる主觀的現體を禮拜するより、較合理的にはあらざる歟。此現體は、吾人人間の生存に最も影響する所の現體の座を成すものとして、吾人に對し甚だ強き勢力を有せざる歟。然らば彼

等か天を禮拜して其活動を最上なりと考ふるは、直接の觀察にて事實なりと認むるにも係はらず、怪訝すべきものなる歟。蓋し他の數多の場合に於て驚くべき睿智を示す所の人間をして、全く拜物教を理會し能はざらしむるものは、神道の形而上的狀態に依りて創造せられたる性癖、假定的なる物質活道説に依りて涵養せらるゝ癖性なりとす、但拜物教の唯一の誤謬あるや、生と活動とを十分に區別せざるにあるを以て、必竟神道よりも一層科學に近しいといふ可し。天に次ける支那第二の禮拜物は地なり。支那拜物教の此第二の法式的元素に山河禮拜の屬すること、猶天の禮拜に日月星辰の禮拜の屬するか如し。地は其載する所の諸現體の活動を制する、強烈活潑の現體たり。故に太古之を禮拜するは自然の事にして、始めは其生けるものなるや、又は單に活動するやを區別せず、又區別するを得ざりき、何となれば當時人間か按出し得べき唯一の蓋然的考説は、活動を以て、恰も彼等自身の活

動に於けるか如く、特別なる意向の連合結果なりとなすに在るへければなり。

敬地も亦諸文明の始めに於て見る所なり。吾人に傳來せる希臘神學の斷片中明に其痕跡を發見す、曰く「人間の母なる萬有の母なる此地、此普通の母」也。

國語は此太初の禮拜を追想すべき夥多の詞を保存す。茲に又一の徳性こそわれ、开は主として拜物教的にして、廣く實際に普及し、地を神聖とする此慣習の結果なり、即ち吾人か郷土に對するの愛情にして、吾人をして深く吾人の住居する國土を慕はしめ、一種纏綿の愛着に依りて吾人を之に結ぶ。是れ疑もなく拜物教的感情にして、吾人の之に惹かるゝや善し、何となれば適宜に之を誘導する時は、高き徳力のみか智力の本源ともなるへければなり。吾人か或る土地場所遺跡等に感ずる愛情、彼等を以て吾人自身と同様なる意象及び感情を有するものと認めんとする傾向、此等は拜物教的意向にして、實に地を以て活動物(箇は

形而上學者か反對の幻想を有するに係はらず甚だ明瞭なる事實なりとなすのみならず又吾人自身と道德上の關係を有する所の情操及び意志を以て働くの生物なりと認むる性癖か深くも吾人に感染せるの明證といふへし。此を以て支那人中に行はるゝ敬地の禮は郷土に對する深き愛情を以て制限せらる余は茲に斷言するを得ん天に對する拜物教的概念は特り支那人にのみ限らざるを敬地も均しく西洋の國語中に誤つへからざる痕跡を留めたり。

斯の如く支那に於て天地を禮拜し以て拜物教を一の制度となせる例證は甚だ夥多にして今之を擧げんとするに却りて其撰拔に苦む程なり。例へば北京に於ける郊外九箇の祭壇中天を祭るの壇地を祭るの壇年を禱るの壇旭日を祭るの壇月を祭るの壇等あり。

吾人支那に於て到る所天地を祭るの壇を發見す。是れ國典即ち官教の基礎とす。他の典禮も亦認許せらるゝと雖も公に制定せる國教は是なり。此他星辰山河等を祭るの壇あり。左れば拜物教的禮拜は國

支那に於ける拜物の法式的にせらるる

國典

家に依りて規律的に組織せられたる官典なり。禮の定むる所に隨ひて毎年某時特に夏冬の兩至及び春秋の二分を期し天子百官を従へて天地等を祭るの儀を行ふ。冬至には天子親ら大犧牲を天に供ふ其儀非常に嚴肅なり。天子親ら耒耜を取るは特に此大典に要する穀を得んか爲めにして禮記にも天子親ら南郊に耕すは天に奉る供物の爲めなり其穀を収むるは之を供へんか爲めなりと云へり。各地方に特別なる殿堂の外各省各州及び各縣の都府には法令上左の祠を要す。地を祭るの壇、風を祭るの壇、雲を祭るの壇、雷を祭るの壇、山河を祭るの壇、神農を祭るの壇、文學を祭るの壇、支那を治めたる諸代の天子を祭るの祠、北斗を祭るの祠、都府を圍包防禦する溝池を祭るの祠、疫鬼を祭るの祠、國に大功ある諸名臣を祭るの祠、聖賢を祭るの堂、忠孝正義廉節の士を祭るの堂、義女節婦を祭るの堂

支那の官教たるや蓋し斯の如し。然れども國典にて神聖とするもの

の外道士及び佛徒に屬する無數の堂宇伽藍あり。然れば支那文明の心理的基礎たるや、拜天敬地に依りて、法式的にせる拜物教なること、明ならん。

此命題たるや最も緊要にして、可及的分明に表示するを要するものなれば、猶之を瞭然たらしむべき二三の間接的考説を茲に掲記せんこと、決して無用なりと云ふへからず。彼の郷土に對する愛情、即ち主として拜物教的なる感情の如何に深く支那人間に發達せるやは、余が既に諸君に告げたる所なり。然れども支那人は之に加ふるに更に前者に譲らざる拜物教的の氣稟、即ち自然に對する、深き愛情を有せり。此性癖は諸形の神學的精神、特に一神教と痛く反對せるものにて、拜物教が此國民中に保持し來れる原本的勢力に能く適合したるの事實とす。此點に於けるの證や多し、余は唯ダルクワージーサンデニー氏より數行を借り來らん、氏は最も面白く且つ明瞭に此事實を寫出せり、曰く、吾人は花を好む、支那人は之に戀着す。吾人が花園に喜ぶ所は、眺望

の變化色の豊富、百花の變化、若くは妍美にあり。支那人に在りては各艸各樹皆眞實なる崇拜物たり、神秘なる戀愛の題目たり、其詩思の過半は之に依りて發揚せらる。其小説に於ける其歴史に於ける其日常生活の意趣に於けるすらも、吾人は此單純熱心なる愛情の例を見ざるはなし。謹格なる宰相も、其庭園の芍薬及び菊花を賞せんか爲めに、閣僚互に相招飲す。之を文學に徴するに、此愛や時に消魂の一種に達するもの、如し、是れ吾々泰西人の風習か、理會するを容さざる所に、して、艸木の生長を觀察、實覺せんと試みつゝあるに際し、思はずも其風姿に恍惚たるにそある。

ダルクワージーサンデニー氏の此言たるや争ふへからず。アペルレムサト氏が反譯せる面白き倫理小説『イウキアオリ』(The Two Cousins)を閲するに、花に對し自然に對する此愛は、日常普通の性行として知らす、文章に現はれたり。又斯く拜物教的精神を保續するより起る所の幸福親愛なる人物の例を此書に見るへし。實に外界に對する此愛は、深く

支那人の心を和くるの影響を有すること、更に疑ふべきにあらず。西洋に於ても神道の衰微すると共に、此倫理的氣稟は次第に増進しつゝあり。神道的精神は之を妨害せり、然れども消滅せしむる能はざらん。最後に一言すべきは、敬天拜地を以て法式的になしたる此拜物教の勢力は、世人の熟知する如く日の吉凶を卜する支那人の慣習に存することとなり、蓋し此種の吉凶説は吾人間にも猶其痕跡を存せり。

然らば此長き解説を節約して、吾人は左の命題を定置するを得ん、曰く
支。那。文。明。の。心。理。的。基。礎。は。敬。天。を。以。て。法。式。的。に。せ。る。拜。物。教。に。あ。り。て。存。す。但。天。の。意。志。は。強。大。不。變。に。し。て。總。へ。て。他。の。現。體。を。支。配。す。る。も。の。と。す。

今や進んで斯の如き基礎を根底とする開化の睿智的及び倫理的成果を講究せん。

拜物教に偏向する必然の結果は、形而下的觀察の大に發達するに在り、故に現體の觀察に於ける非常の鋭敏、嚴正及び精微は生ずるなれ。

此等の特性は總へて其科學的著述に現る、而して其載する所は主として現體の記述に係り、西洋の書に於けるか如き抽象的理論を解かざるなり。觀察の此精神は又其植物及び花の圖畫に現れ、眞に逼るを以て著し。此文明普通の精神よりして必然に起る所の第二の特色は、支那學者の系統に於て神譚の缺乏する是れなり。神道の行はるゝ總へての人民にありては、立法者且つ又哲學者と雖も多少神異的媒介を利用するを見る、是れ故意に出づるにあらずして、多くは彼等を支配する社會的環象の影響を受けて、自然に然るものとす。支那人に在りては更に斯の如き事なし、而して公正なる觀察者は、假令現象を追ふて其眞源に遡ること能はざりしといへ、皆心に感したる所の一事實なり。孔子孟子及び其徒弟は、神道の人民に彼か如く普通なる彼の神異的勢力に其資を取らざりき。彼等は鬼神の如き專制的勢力を不問に掛けり、彼等は現體を觀察し、其進化の境遇を並列し、他の目視すべき現體の影響を以て之を説明す。

然れども、抽象の法式的に成立せざる此心理的狀態は、支那文明に於て二箇の缺點を生じたり、即ち眞正の科學と高尚なる美術は自ら此開化中に發達する能はざるなり、是れ余が諸君の注意を促さるへからざるの事實とす。

科學は必ず抽象的ならざるへからず。科學の精神たるや、其之を呈する所の物體以外に、幾何學的物理的化學的生物学的なる種々特別の現象に關する法則を發見するにあり。眞正なる科學——獨り純精なる法則發見に適する所の純精なる科學は、必ず抽象に依らざるへからず。美術に於ける亦之に同じ。高尚なる美術は支那文明の知らざる所なり、何となれば卓越偉大の美術は理想に基くものなればなり。蓋し理想也は盡く抽象を要す、抽象に依りて以て現體の性質を特別に考察し、之を取捨増減するを得へし。理想は決して形而下的觀察より生し得るものならず、何となれば斯の如き觀察は實體なる狹隘の區域を脱すること能はざればなり。眞正に理想的なるも猶あり得へき所の模範

を概念せんこと、唯抽象に依るの一途あるのみ。故に雄渾なる科學及び美術の創造は、一も此開化より湧出する能はざるなり。夥多の觀察者は此奇異なる現象に驚けり、然れども其事實の説明は概括説なきか爲めに其力に及ばざりき。

故に支那に於ける文學著述の特色は現實なり、彼は人生天眞の寫實を以て著るしき風俗小説及び戯曲に富めり、然れども『ホームズ』及び『ダンテ』の如き雄渾なる理想的著述は從來會て彼等の間に存在せざりき。彼等が科學上の發達は全く幼稚なり、彼等が有する所の科學は、彼の常に實驗的精神の最始の自然進化より起る所のものを除き、大抵は印度人、回々教徒及び耶穌教徒より傳來せり。

然れば支那文明の心理的根源よりして、必然に起る所の痼疾こそ、偉大なる科學的及び美術的發達の出來得へからざることにとある。倫理上より之を觀るに、支那に於ける拜物教の永存は、宿命及び秩序の情操を啓發せり、是れ服従に傾く所の性癖に符合するものと云ふへし。

蓋し此服従は絶対的にあらず然れども比較的のものにして、酷な科學的從順の精神に近似せり。
 現體の觀察は必ず服従及び秩序の總念を啓發す、特に天體の場合に於けるか如く、其常規の進行を確知したる程度に達したる時は、最も然りとす、之に反して神學的抽象は進歩の總念を成立す、然れども此總念たるや始めには整頓せられざるものなり。最も勢力ある禮拜物の規律ある意志は、外界の秩序を以て表せらる、人間は自ら此秩序に服従す、然れども此服従たるや——諸道德の基礎なる此服従たるや決して絶対的のものならず、何となれば對立的現體は唯限りあるの力を有すればなり。今此點に關して拜物教と神道とを比較せば、吾人は一層明瞭に之を理會するを得ん。
 支那に於ては、君民共に、絶対的自由意志を有する神の模範たるもの、勢力——數多の關係上、道德を紊亂する勢力を経験せざりき。
 神德の模範とは其實如何ん、蓋し自ら欲する所に隨ひて爲し得るの自由なり。

十全の權力を有する現體は唯放縱なる氣隨のみを有し得ん。純精なる専心誠意は智慧の如く常に多少の服従を含蓄せり。

吾人の諸神に於けるや、猶蠅の頑童に於けるか如し、彼等は遊戯の爲めに吾人を殺す。沙翁のリーヤ王

十全の權力を有する現體は義務を課し得ん、然れども此等の義務たるや、彼にありては單に一時の機嫌のみ、彼れ一身の意志の外、別に理由の據るべきなし。斯の如き模範は結局君民兩者に對して多少道德を腐敗せしむべき影響を與へたり。乃ち君主に對しては專制の此模範を學ばしむべき刺激をなせり。最上權は意志の作用に制限なきにあるを以て、勿論人の最上幸福は意象の無制限より成立たざるへからず。細心の觀察者は、神政に於て神聖の生類なりと認むる所の彼の君主にありて、其十全萬能の位地を占むるか爲め、深き專横の發達せるを認めざる歟。

然れども此影響は、又自ら同様の作用に依りて、臣民間にも現るゝなり。

即ち彼等は其幸福の模範として、活潑にして秩序ある服従を目的とせず、彼等をして最も十分に其意象を實行し得べき位地を望ましむるに至らん。若し又一轉して他の方向を取らん歟、神道は臣民間に一種軟弱無氣力なる柔順を啓發せん、何となれば其柔順たるや、絶對的のものにして、唯優者より來るものなるを以て、他の專横に従ふにあればなり。此柔順たるや、一方にありては其獨立心をして深き無政府調を帯はしめ、遂には叛逆の姿を装ふに至る。斯く神道に固着せる弊害を出來ん限り糾正したるは、蓋し諸派の僧侶の智力に在りしなり。支那は斯の如き模範の倫理的不便を免れたり、并は全く其宗教の基礎たる實在(即ち現體)の神にあらすして禮拜物なるを以てなり、再言すれば其力は至大なるも、猶絶對的ならざる、實物なるを以てなり、而して此力は又吾人か天体の運行に於て見るか如く、整理せられたるものたり。拜物教の此永存より生ずる幸福なる影響は之を證するを得へし。支那人に於ける眞に實驗的なる服従は、神道より生ずる卑屈又は恃亂に

至らす。是れ世人か最も氣附かざるもの、一なれば、或は此開化を制する拜物教の影響中、最も必要なるもの、一ならん歟。

大抵の觀察者は支那人民を以て暴虐なる壓制を受くるものとなし、其政治を回々教徒の末路に比したるか、并は甚しき誤謬なり、彼等に在りては、其深き服従は眞に着實なる獨立心と相伴結せり。支那の哲學者は常に主張せり、帝王は天の命に依りて支配するものなり、此命や取消さるゝを得へしと、而して此天命の取消は明に惡政府の永續に依りて示さる、支那の全歴史即ち諸代の交迭は十分に此理論の空式ならざるを證せり。

齊の宣王曾て孟子に問へり、湯は桀を放ち、武王は紂を伐つと、果して諸れありや。孟子對へて曰く、傳に於て之れあり。王の曰く、臣其君を弑す可ならん乎。對へて曰く、仁を賊ふ者之を賊と謂ふ、義を賊ふ者之を殘と曰ふ、殘賊の人之を一夫と曰ふ、一夫の紂を誅するを聞く、未だ君を弑するを聞かざるなり。

西洋の革命的精神は、眞の尊敬より起る所の有意的服従を、絶對的服従と錯迷し易し。夫れ人間の品位見識の模範たるや、彼の博士等か考ふる如く、力の外更に他に從ふものなきの謂ひにあらざるなり。吾人は云ふを得ん、支那人は自然に眞智の模範に接近せりと、何となれば眞智は其活動的なると思辨的なると又は倫理的なるとを問はず、善く整頓せる活力の前置的條件として服従に存することを、彼等は感し且つ理會すればなり。是に關して彼の先天的に眞如を構造せんと欲する所の兒戯的形而上學と眞如に從ふて眞如を再生するを専務とする所の科學的進化の成果を比較すべし。拜物教の永存か此大國民に及ぼしたる倫理的影響にして、人の覺知すると能はざりしもの先づ斯の如し。支那文明の心理的基礎か、睿智及び感情に及ぼしたる影響を考察したるを以て、吾人は今や家族及び社會に對する其作用の概要を講究せざるべからず。

總て社會の主要元素なる家族は、拜物教時代に設立固定せらるゝもの

なり。然れども吾人か今なさんとする所のものは、支那に於ける拜物教の制度及び永存か家族の組織に如何なる影響をなしたるや、如何なる特色を之に印したるやを視察するにあり。墳墓(ツゴ)が妙しくも云ひつる如く彼の嘆美すべき人類の特許の制及び陰鬼祖先等の禮拜は拜物教の賜なり。夫れ毫も未來の生活を信用せざる文字あるの人民間に、此祖先禮拜か斯く深くも啓發せるは、天主教徒の最も怪む所なりき、彼等か全く之を解釋すべき案を發見し得ざりける形非實理的現象なりき。神學的形而上的精神の永存するが爲めに識者すらも殆ど解し能はざる所の此緊要なる總念は、吾人今少時を費して之を論せざるべからず。拜物教は自然に幽靈を創造す、是れ神道、特に多神教の盛時に存する所の主要なる總念にして、羅馬文明の社會的智慧は之を維持するの如何に價値ありしやを知りし所なり。拜物教徒にありては、萬物は管に自然に活動するのみならず、又意志欲

情及び感應を有するものとす。故に死の彼に於けるや、神道家に於けるか如く、不活動の状態に移るの謂ひにあらす。一の活動状より他の活動状に移るの経過なり。吾人が親愛せし人の死骸は、神道家に於けるか如く恐怖すべき物にあらす。否、少くも忌避すべき物にあらざるなり。唯他様の生活をなす活體なり、死骸は猶其意向及び感情を有せり、猶世事に於て利害を感じつゝあり。斯く論じ來らば、人間の遺骸に對する敬愛は、思想の拜物的段階に於ける必然の結果なること、直に明白となるに至らん。此死骸は猶諸君が敬愛せる所の人なり、神道家の假定するか如く、彼は生を失はざるなり。彼は唯生活の他の形狀を取りしのみ、彼が最初の生活中に諸君が彼に對して抱きし敬愛は、今猶諸君が致すべきものたり。地は其外觀上不動なるにも係はらず、拜物教徒は之を以て敬愛するものとせり、然らば諸君が諸君と同様に活動しつゝありと見たる彼の體、諸君と同一なる快活を以て活動せる彼の體にありては、何を以て同一ならざるべき歟、吾人は地よりも一層敬愛すべ

後世即ち地獄極樂の不信仰

の理あるを知れり。

故に墳墓及び死者禮拜の制は、人理の拜物的段階より起る所の必然の結果なりとす。

諸君よ、此太初の理論よりして如何に未來の生活に對する不信仰の生ぜしやを、諸君は又諒解せしならん。拜物教徒にとりては、此世界の外他に、世界はあらざるなり。此娑婆に於てのみ、二様の生存法はあり得るなり、一は運動を有し、一は運動を有せざるの生存法。兩者共に感情愛憐あり、兩者共に、世事に利害を感じるものなり。第二の生存法に於けるや、其狀恰も吾人を圍繞する無機體の如し、但其場合に於ては、吾人が先きに親愛せし所の者に對して特別の愛情を表せざるへからず。然らば死者禮拜は未來の不信仰と自然の關聯をなすものなり。神道家の心に形非實理なりと見ゆし所のものも、却りて全く天地自然の事なり。加之西洋に於て未來なる信仰の次第に消え行くに従ひ、墳墓の拜は益々盛んなるを見る、神學的精神の一國を支配すればする程、墳墓の

典禮はそれだけ怠慢に附せらるゝなり、人間の遺骸に對する忌嫌心はそれだけ甚しくなるなり。此點に關し巴理は誣ふへからざるの證を供給す。嗚呼此自主自由の都府、是れ墳墓の制度日を逐ふて隆起しつゝあるの都府にあらざる歟。

以上述ぶるか如く、死者崇拜は支那家族の主要なる元素とはなれり、而して其特色は祖先の崇拜にあり。吾人は完全なる人家に於て常に祖先の位牌を安置するの場所を見る。支那尋常の家は各其祭壇を備へ、是れ祖先に時々供物を奉る神聖の場にして、冠婚喪祭の如き家内一切の大事を申告する所なり。左れば此嘆美すべき浩大なる制度よりして、長者に對するの尊敬孝行等は支那に於て非常の發達をなせり。此祖先禮拜、此陰鬼尊敬は深く彼等今日の行爲に浸入し、棺槨を重んずるの慣習隨ひて起れり。支那人か其棺槨を造るに非常の注意をなすは、決して日常必須の物具に譲らざるなり、棺槨は彼等か最高の敬重を表するの具たり。死者に對する此概念の結果として、吾人は支那人か人

體切斷を恐怖するの甚きを見る、斷頭は刑罰の恐るべきものなり。

此感情の奇異なる痕跡は彼等の小説中にも見ゆ。

然れば祖先禮拜、長者尊敬及び父母孝養は、支那文明の心理的基礎か其家族に啓發したる普通の特性にして、其風儀は西洋人の敬重なる嘆美（無法なる輕蔑の代りに）を博するに足るべきものなり。

吾人は今や支那社會全体に對する拜物的精神の影響を講究せん。支那社會の最も著しき相貌は、等級の組織及び等級的精神の缺乏なりとす。支那に於ては常に印度の如き等級なきのみならず、世襲的貴族すらもあらざるなり。帝室と雖も其實王統と云ふべきものにあらざり、假令帝室は社會の尊重にて表せらるゝか如く、無比の例外あるも、猶吾人の問題全體には更に影響せざるなり。

帝王の官能は世襲なり、然れども絶對的に然るにあらす。皇帝は皇族中より位を繼ぐべき最も價值あるものを選択す、而して撰に當るの人は多くは長子にあらざるなり、是れ等級的精神に全く相違せるの事實

とす。斯の如く最上權の必須なる世襲的性質は、其最も簡單なる形なり、而して毫も等級の精神より出てしものにあらず。皇帝は天命に依りて支配するものと概念せらるゝを以て、實に社會の擾亂に對するのみならず、天地の變災に對しても責任を負はざるへからず、而して異變若りに臻るは、帝位を他族に傳ふべき斷然たる兆候と認定せらる。然れば支那人民の如く、全く等級的勢力及び精神を感せざるの國民は、曾て他にあるなしと云ふを得ん。拜物教の等級政治を作るに適せざるは、蓋し論外なり。實在の現体を崇拜する所の拜物教は、神異的實在より自然に發達する所の彼の絶對的神聖を給與し、能はざるなり。神道は之に反し專制的に官能の自然的世襲を制約し、以て自然に等級を生ずるものとす。多神教時期に於ては、高等の人は神其者の子孫なりと云はれ得べき事實より等級政法を生ぜり。人心の此状態に關し、吾人は「ホームズ」に於て好例證を見る。一神教は其一層法式的なる精神に應じて、此上流社會の神聖に猶一層絶對的なる性質と高度の凝収を附

與す。左れば神に對するの外は責任なく且つ任意的に作業する所の君主の模範は起るなれ、蓋し一神教の影響に依りて、泰西の王權は此模範に向ひて近づきつゝありき、然れども此傾向は幸にも、一方に於ては軍人的精神に依り、一方に於ては工業及び科學の漸進化に依りて抗爭せられき。神道の僧侶が社會に於て勢力を収得維持する時は、等級常に其完全なる組織に達す、是れ等級を生ずる神道的精神の自然傾向を明證するの事實といふべし。

支那の大文明か、何を以て等級を知らざりしかの理由、蓋し斯の如し。此點に關して支那が從來ありたる所と、泰西が今將にあらんとしつゝ、する所と、相對照するを得ん、其酷似するや固り云ふを待たざるなり。今や泰西は科學的精神及び工業的活力の複衝動に依りて、次第に等級を除かんとするの傾向あり。從來革命的精神は此一般傾向の實に唯一の法式的機關なりき、而して其成果たるや無政府に導くべき過劇の絶對的形狀を裝はんとせり。夫れ等級は公私の社會的官能か、世襲た

らんとする自然の傾向を、絶對的に神聖ならしめんとする保存す。此傾向にして若し比對的ならずして、絶對的の崇敬を受けん歟、其結果たるや之を理論上より云はんには、實功も其正當なる認識を受けざるに至らん。然れども假令西洋文明は次第に此絶對的崇敬即ち等級精神を去りつゝあるも、其依りて以て起る所の重要真正なる偏癖を注意せざる如きことをせざるへし。唯實驗哲學的精神のみ自然の傾向に適宜の股分を與へ、以て絶對的神聖に代ふるに、比對的尊崇を以てするを得へし。开は兎も角、等級精神の廢滅に向へる西洋の運動は、自然等級の曾て現出せざりける支那に向つて、吾人を接近せしめつゝあるなり。支那人間等級の缺乏は、彼等に強き獨立心を與へ、隨ひて至大なる箇人的活力及び企圖を與へたり。此を以て此人民には強烈未聞の勉勵力あり、オーガスト・コムトは彼等を認めて、人類中特に活潑なる種族なりと云ふに至れり。故に又彼等間には深く箇人的財産を重んずるの風あり、是れ其文明の根底とする基礎の一をなせり。土地は最上權に屬

すと云へる理論的總念は支那に繁榮せず。個人的財産は至要なる道徳の本源なりとは、其哲學者が深く信する所なり。孟子曰く、是故に明君は民の産を制して、必ず仰きては以て父母に事ふるに足り、俯しては以て妻子を畜ふに足り、樂歲には終身飽き、凶年には死亡を免れしめ、然る後驅りて而して善に之かしむ。故に民の之に従ふや、輕し、今や……此れ惟死を救ふて而して、瞻らざらんことを恐る、奚んを禮義を治むるに暇あらん。原文に奚んそ平等及び自由主義に
孟子にな
ければ畢す

支那に於ても無論他の社會的組織に於けるか如く避くへからざるの障害ありしに相違なければ、個人的財産即ち相續權の自由の尊重せられたるは、吾人が斷定し得る所なり、是れ等級の缺乏と、少くも主義上にては討論するを得へき勢力にのみ服従するに慣れたる心に自然なる獨立思想との必然なる結果なり。

吾人は今此社會の政府の模範は如何なるものなるかを視ん。諸社會に絶對的に必要なる政府は之を神聖ならしむる所の理論より其特色を受くるものとす。蓋し從來は一の理論と雖も其避くへからざる缺點あるか爲めに諸の人間社會に起りたる支配權(即ち政府)の組織を成す所の諸元素を盡く表象し能はざりしや、茲に云ふを要せず。支那に於ては政府の模型を家族に取れり。總て他の社會に於けるか如く、家族は此社會の主要なる基礎たるのみならず、其政府は家族の模型に鑄造せられたり。箇は各文明の必須なる伴隨物たるや云ふを俟たず。然れども政府の模型として、家族的模型の概要を取ること、猶宗族政治的段階に於るかときは、獨り拜物教的人民に屬するものとす。支那學者の既に依れば、天子とは其實如何なるものなるや。彼は萬民の父母なり。父母的性質は彼の神髓なり。神道の社會の政府の模型は家族に取らずして上帝に取れり。支那の模型は神道の模型に比して争ふへからざる倫理的利益を有せり。神道の概念に従へば、政府は幾分か

討論の範圍外なる權力を有す、此權力は其精神に於て多少任意的のもとの概念せらる。神は此權力を其施行上特別なる條件に附することあらん、然れども此等の條件たるや、其根底常に任意的なるものゝ如し。事實に於ては此皮相的專制も必ず之に對する社會學的現象に依りて制限せらる。佛國の諸王か其自身の意志を以て裁決の究竟手段となしたる時にも、猶彼等か踰越し能はざるの限界、實に彼等か夢にも之を破るを欲せざる限界ありしは事實なりき。去り乍ら彼等の權力は元來絶對的なりと概念せらるゝを以て、時に其歩を誤りて專制の弊に陥るなき能はず、是れ一大社會的家族の父として自ら任する所の人によりては、決してなき所なり、彼等は父の子に對するか如く行はさるへからざるは、其義務あり。此總念は支那文明進行に於て、始終至善なる影響を與へたり。實に支那天子中、明君賢主の模範とすべきもの少からざりしなり。

此概念よりして、茲に一種の最も幸福なる性癖は生ずるなり、即ち其由

來は如何なるものにもせよ、其武斷的なる時すらも、工業的生活の發達を促進せんとする政府の性癖なり、此傾向たるや能く此開化の精神に符合するものとはいへ、此場合に於て政權の作用が破壊せずして凝固するの點のみ、稍異なる所あり。是れ其父母の性質あるが爲めに斯くはなすなり。支那政府が人民の平和的産業的嗜好を獎勵せんとするの傾向は、蓋し斯の如く説明するを得へし。

要するに、以上の困難なる絶對的評價よりして、支那文明の心理的基礎は、敬天によりて法式的にせる拜物教にあることを推測すへし。故に社會の主要元素として、孝道、父力及び祖先崇拜を以て組織せらるゝの家族は起れり。故に又純粹なる平和的政治に進まんとする原本的傾向及び政權の概念は、父權の模型に鑄造せらるゝ等級絶無の人民は生したり。

支那文明を變形せしめたる諸元素。老子の哲學。——佛教。——
—加特力教。

支那文明に影響せ
る三元素

支那文明の普通なる精神を評論し、之より起る所の主なる成果を追跡したるを以て、吾人は今や之を變形せんとしたる元素を略論せん。

支那社會は實に其發達の進路に於て、他の社會に觸接せり、而して此等の社會は其軍國的及び神道の段階に於て、多少進歩したるものなりしを以て、其觸接や之に反應して多少之を變形したるの外なきなり。支那人は決して世人が普通に考ふるか如く、外人に對する憎惡の感情甚しからざるなり。彼等は常に西洋人に對して戒心を有せり、是れ全く正當なるとなり。之に關して何人たりとも其愚を笑ふものあらざるへし、何となれば彼等は從來西洋人を認めて、只管利慾に眼なき野蠻人に見做すの外あらざりしを以てなり。然れども支那人は西洋人よりも彼等に對して浩大なる利益を與へたる人民と交際せり、而して此實際より其開化に最も緊要なる變形的影響をなしたる二元素、即ち老子の哲學及び佛教は來りし。西洋人も亦加特力教、特に天主教徒の大派遣に依りて、第三の變形的元素を輸入したり、然れども其影響は到底前

二者に一等を譲らざるを得ず。全體より云へば外國の神道の源泉より引き來りし此變形的元素の影響は支那人に取りて有用なるよりも寧ろ煩勞なりしなり。佛教及び加特力教より借り來れる科學的總念は無論有用なる一結果なりしと雖も其効驗は固り第二流に屬して支那文明の本原的精神に唯些少の影響をなしたるに過ぎず而して一方に於ては之に伴へる道德上及び睿智上の弊害實に甚く之に關する支那學者の語に曰く若し暴慢なる神學的精神を起したる此惡疫の侵し來らさりせば實に國の大幸なりしならんにと。开は兎もあれ吾人か今爲さんとする所のものは歴史上此三變形的元素の存在を確定して其影響の如何なるものなりしやを概測せんとするにあり。

支那文明の第一の變形的元素は老子の哲學にして其徒弟は廣く支那に蕃延し之を呼んで道士と云ふ。

老子は紀元前六百四年(孔子の前五十四年)碧江に近き楚國に生る。蓋

し支那文明の一大中心萌芽の生せしは碧江及び黄河の間と黄河の北とに在り。

吾人は先づ老子の哲學は如何なるものなるやを視ん。

老子の哲學は至大なる一原理即ち道よりして森羅萬象を演繹し抽象的性質を以て之を説明する所の形而上學なり故に他の諸形而上學と同く單に文字の結合に終ること恰も眞正なる科學的説明に似たり。斯の如き總念は例へば新布拉多學者の總念に於けるか如く毫も純粹なる價值を有せざるなり而して余か之を擧げたるは唯歴史的完全の爲めにして其如何なるものなるやを示さんと欲するのみ。老子曰く物あり混成し天地に先きたちて生ず寂として聲なく塵として形なし獨立して改まらず周行して殆らず以て天下の母とすへし吾其名を知らず之を字して道といふ道は萬物の神體なり始なく終なし天地は終あり然れど此道はなし宇宙の開闢前より不易にして無名なれども而かも常に存せり道は聖人か之に附與し得へき唯一の名なり

聖人は又之を精と云ふ、在る所なく在らざる所なきを以てなり、聖人は之を眞と云ふ、其毫も虚ならざるを以てなり、又之を靈と曰ふ、創造せられたる物と區別せんか爲めなり、此體や眞に一なり、其能く天地を保つも、耳目に依りて徴すへきの性なし、其質を云へは純粹なり、其生したる秩序より云へは道なり、人に與へ又自ら有する所の力より云へは性なり、其無邊無終なる作用より云へは精なり、云々。(アベルレムサト氏の遺稿、東洋歴史及び文學。)

吾人は茲に爛熳たる形而上學的系統、即ち不定なる任意的抽象より出づる概論の系式を見る。形而上學は常に思想の神道的模型を以て始め、之をして次第に益々抽象的ならしむ、故に終には其諸論説の基礎として、唯不定なる力の總念を保つのみなりとす。是れ實に人間の理心か病に罹れるの段階にして、全く科學的基礎を離れたる抽象の弊害を示すものなり、睿智上又社會上毫も裨益なき心理的狀態なり。此哲學の特點は過去の輕蔑にして、痛く支那文明の精神に反りたるも

のなり。老子は孔子と違ひ、曾て古人を説きたることなし。

老子の哲學の第二の特色は、其形而上的抽象的なるにあり、是れ亦支那文明の形而下的精神に反對なり。

老子は何處より來れるや。彼が根源の外國にあるや明なり。恐くは彼の哲學は印度輸入のものならん、蓋し之を證すへき直接の紀錄的根據はあらず。アベルレムサト氏も始めは其出處の外國なるを主張せり。然れども氏は其説を捨て、後には其支那文明の太初の基礎即ち起點たるの説を取れり。此總念は甚た不道理なるものにして、人智作用の原則を誤解したることを表白せり。斯の如き形而上の抽象を以て始めとなさんこと、人智にとりて到底出來得へからざるの事なり。然れども此總念の戻理は老子其者の分析に依りて一層明瞭ならん。其毫も支那的ならざるや、其文明の二箇の主要なる特性、即ち過去、尊崇及び形而下的精神を認識せざりし程なり。又此教義の之を圍繞する境遇に適せざるや、其徒弟は直に墮落して、長生不死の藥を製すと揚言

する欺騙者魔術師となるに至れり。アベル・レムサト氏にして若し形而上學に耽溺せざりしならんには氏の如き鋭敏嚴格なる人にして、豈に此著しき反對に氣附かざることあらんや。此有名なる支那學者が著述しつゝありし當時は、今は信用なき形而上學が、其一時の光明を放ちて輝きつゝありき。氏は思はずも老子の教義を以て、支那文明の根柢なりとするに至りしも、當時西洋の學者の喝采中に佛蘭西の博士等か、稱道せる形而上學に類したるを以てなり。要するに老子は印度學の刺戟に依りて、抽象及び抽象的理論を輸入せんと企てたり。此企圖其者に於ては、固より嘉みすべきものなれども、之に對するの科學的基礎なき純粹の形而上學的性質なりしを以て、竟に失敗を來せり、故に「アレキサンドリヤ」派の思想に於ける醜陋なる心理的現象に等しき任意的惑迷に墮落せり。老子の徒弟は不適當なる環象中にありて此等の抽象的彷徨をなし、直に魔術家及び欺騙者の一派と成り果て、社會上及び心理上より觀るも、到底些の價值なき神學に依りて、人性の最も鄙陋な

る方面に向つて、控訴を試みるに至れり。左れば道士なるもの其數多く、往々支那人の依頼を受くと雖も、一般に輕視せらる。彼の奸惡なる庸醫等か、死に對する恐怖心を喚起して、一時公衆を惑はしたる時、西洋に在りても、同一の觀を呈することあり。道士は佛徒より少なしと雖も、廣く支那に散布し、多くの堂宇を有せり。

此敎は曾て革命的なる秦始皇帝の保護を受けたり、是れ道士か過去、即ち先例を蔑視するに依らずんば、あらず。

支那文明の第一の變形的元素即ち深く拜物敎的なる人民中に附屬的神道分子を加入したる一元素は、以上記するか如し。

支那文明に影響せる第二の元素は佛敎なり、或は老子の道學に優るへきも、猶紛雜的影響をなしたるに過ぎず。

佛道の支那に入りしは、紀元前六十五年にして遠く漢代にあり、廣く國內に普及し、天子の之を誘掖したるもの少しとせず。支那人は皆流行的に之か影響を受くと雖も、其力甚た薄弱なり、支那文明の眞正なる傾

向を表する所の上流社會にありては一般に輕蔑せらる。佛徒は加特力教に全く同き所の宗教を組織せり。教義の類似は結果の類似を生ぜり、而して兩者間に相互の交通なかりしや確實なり。彼等は完成せる寺院的の生活祈願式遺物等を有せり。

佛教は其誤導せられたる思辨的傾向と共に、神道的精神を支那に輸入して、甚たしき不利益を來したり、而して佛教は加特力教の如く、内部の教主的調和なきを以て、此等の錯迷は實に極度に達せり、蓋し此調和は其教義に固着せる不利益を糾正するの功用少しとせず。

然れども此攪擾的要素は案外に非常の錯亂を起さざりき。佛教が支那に入りし時は、拜物教深く社會に浸潤し、人民をして十分に宗祖天地の禮拜に粘着せしめたるを以て、僅に廣濶なる文明の基礎に影響したるに過ぎず。天子は佛徒なりと雖も、猶親ら國の典禮を行ひ、決して宗廟の祭儀を廢せざるなり。例へば天主教徒が適當にも賞讃する所の康熙帝は佛教信徒なりしか、宗廟社稷の典禮は必ず親ら之を行へり。

學者及び天子は自ら支那文明の真正なる立脚點に立ちて、正當に佛教の價值を評定せり。例へば唐の武宗帝(紀元八百四十六年に死す)は佛教の傳播を制限するの必要に關して左の文を弔せり。(アベグロシエ

一第五帙第五十一頁)

三。代。に。佛。ある。を。聞。か。す。漢。魏。に。至。り。て。始。め。て。支。那。に。傳。は。り。偶。像。を。輸入。せ。り。今。や。至。る。所。僧。尼。あ。ら。さ。る。は。なく。工。人。は。不。幸。に。も。彼。等。の。爲。に。偶。像。を。作。る。に。従。事。せ。り。男。に。し。て。業。を。營。ひ。な。く。女。に。し。て。織。る。な。く。は。國。中。必。す。之。か。爲。め。に。苦。む。の。あ。ら。ん。と。は。古。人。の。戒。め。た。る。所。な。り。然。る。に。方。今。無。數。の。僧。尼。は。他。の。汗。に。て。衣。食。し。無。數。の。工。人。を。役。し。無。限。の。財。を。費。し。莊。大。なる。殿。堂。を。四。方。に。建。築。す。其。結。果。實。に。料。る。へ。か。ら。さ。る。もの。あ。ら。ん。

と。是れ夥多の寺院を廢滅する法案の緒言にして、實に至言なりといふへし。

佛教も亦多少天文數理の知識を輸入せすとせず、是れ其老子の徒弟に

特色の關する所にして、至要の區別なりとす。吾人は斯の如き社會に於て、如何に等級政治の全く存在せざるやを示せり、實に支那に於ては最上權世襲の必須なるにも係はらず、皇族階級すらもあらざるなり、其結果は嘆美すへき獨立及び服從の結合を來せり、而して此從順たるや多く父母的なる支配に對する孝行的のものにて、主權の神學的概念より生し易き、彼の絶對的從順と傳制的支配とは絶わて見ざる所なり。吾人か前篇の講義に於て、爲し遂けたる此文明の抽象的概算より生する正味の成績は、要するに斯の如きものとす、今や進んで其形而下的進化の理論に入らん。

吾人か説明したる所の要素は、支那社會にありて實際の事實として、又一種特別の境遇に於て發達したり。此形而下的進化の主なる相貌こそ、今吾人か講究せんとする所のものにて、吾人は之より吾人の究竟結果として、支那今日の法式的概念を演繹せん。

社會の二原力

然れども余か其進化説を述ふるに先きたり、余は二箇の特別なる原力

につき簡單なる分析となさるへからず、蓋し社會的發達の進行に於て最も關係ある其交互の結合及び反動は、余か今日諸君の注意を促さんと欲するものなり。

此二原力とは、第一皇族にして其首領なる一個人(即ち天子を云ふ)を以て代表するを得へし、第二特別の階級(余は學者社會と呼ぶを得んか)にして孔子以後にあらされは十分に組織せられさりし、其萌芽は遠く其以前に存在せしものなり。此二力は支那文明の漸進を支配し、彼等自身も亦之と共に發達したり。

皇帝

吾人は先づ第一の原力を考察せん。此原力は支那文明の結合を來すの方便をなすものにして、社會一般の方向か凝集し來る所の一箇人即ち皇帝なり。皇帝は常に一の特別なる家族に屬せり、故に世襲は此社會的機關の最上官能にとりての基礎なり、蓋し此例外は其便益茲に多くの説明を要するものを考ふる時は固り至當の事なりとす。然れども此世襲は神道政治の絶對的世襲と其種類を異にす。皇帝は其儲嗣

優る所なり。然れども今日の實際より迷ひ出て、全く無用なる寺院の生活に一生を空費せしめんとする任意的神道精神の弊害を比較せば、功罪相償はざるは固り論を俟たざるなり。

支那文明最後の變形的元素、即ち加特力教に至りては、唯第二流の影響をなしたるに過ぎずと雖も、天主教徒の大宣教以來多少有用なる科學的總念を輸入したり。然れども余は再言す、其影響實に微々たるものにして、單に記憶に留めんか爲め、茲に第三の變形的元素として掲げたるなり。

吾人は今支那文明の抽象的考察を終へたり、而して斯く得たる眞に困難なりける觀測は、其形而下的研究の基礎とならん。吾人は次篇に於て、太初より今日に至る支那社會の形而下的發達の理論を講せん。

第二篇 支那文明發達の説

諸君、吾人は前講義に於て支那文明の抽象的評價を試みたり、再言すれば、其主要なる觀相の如何なるものなるやを確定せり、支那國民の諸階級と、其永遠なる進化歴史の諸時代とに普通なる觀相を考察したり。

吾人は此開化の心理的基礎の、敬天に依りて法式的にせられたる拜物教に在ることを見き、然る後吾人は如何なる元素に依りて、此文明の影響せられしかを示せり、蓋し开は支那に對する外國の社會の反動より來れる元素なりき。

此原本的基礎よりして、吾人は然る後に、家族及社會の主要なる觀相を演繹せり。

吾人は、孝道及び祖宗崇拜を基礎とする所の家族か、此社會の依りて以て凝固する根底なることを論せり、此事につきては、他の諸社會も亦實に然りと雖も、支那に於ては政府其者すらも、家族的模型に於て鑄造せられ、神靈的模型に出てさるの度に達したり、是れ支那政府の主要なる

特色の關する所にして、至要の區別なりとす。吾人は斯の如き社會に於て、如何に等級政治の全く存在せざるやを示せり、實に支那に於ては最上權世襲の必須なるにも係はらず、皇族階級すらもあらざるなり、其結果は嘆美すへき獨立及び服從の結合を來せり、而して此從順たるや多く父母的なる支配に對する孝行的のものにて、主權の神學的概念より生し易き、彼の絶對的從順と傳制的支配とは絶わて見ざる所なり。吾人か前篇の講義に於て、爲し遂けたる此文明の抽象的概算より生する正味の成績は、要するに斯の如きものとす、今や進んで其形而下的進化の理論に入らん。

吾人か説明したる所の要素は、支那社會にありて實際の事實として、又一種特別の境遇に於て發達したり。此形而下的進化の主なる相貌こそ、今吾人か講究せんとする所のものにて、吾人は之より吾人の究竟結果として、支那今日の法式的概念を演繹せん。

社會の二原力

然れども余か其進化説を述ふるに先きたち、余は二箇の特別なる原力

につき簡單なる分析となさるへからず、蓋し社會的發達の進行に於て最も關係ある其交互の結合及び反動は、余か今日諸君の注意を促さんと欲するものなり。

此二原力とは、第一皇族にして其首領なる一個人(即ち天子を云ふを以て代表するを得へし、第二特別の階級(余は學者社會と呼ぶを得んか)にして孔子以後にあらされは十分に組織せられさりしも、其萌芽は遠く其以前に存在せしものなり。此二力は支那文明の漸進を支配し、彼等自身も亦之と共に發達したり。

皇帝

吾人は先づ第一の原力を考察せん。此原力は支那文明の結合を來すの方便をなすものにして、社會一般の方向か凝集し來る所の一箇人即ち皇帝なり。皇帝は常に一の特別なる家族に屬せり、故に世襲は此社會的機關の最上官能にとりての基礎なり、蓋し此例外は其便益茲に多くの説明を要するものを考ふる時は固り至當の事なりとす。然れども此世襲は神道政治の絶對的世襲と其種類を異にす。皇帝は其儲嗣

を撰立するを得、而して之を撰ふや、嘗に皇后より出づるの皇子よりするのみならず、又支那法律が彼に許す所の正當なる妃嬪より出てたる皇子の中より、故に皇位は通例數多なる皇子の中實に最も英邁なる人の手に落つべきなり。神政的世襲は之に反して絶対的なり、即ち長子は必ず父の位を襲ふ、然るに支那に於ては事情の許さん限り、世襲及び撰拔の自然の利益を結合せんとするの法を取り、以て世襲をして自ら國安の要求に適合せしめぬ。此第一の原力の存在は支那の全歴史に於て疑ふべからざるの事實たり、即ち太古より今日に至るまで一の特別なる家族に屬する一人の皇帝ありて支那を治め、皇子の中よりして儲嗣を撰拔せり（皇子より儲嗣を撰ひしは虞舜に始まる）。支那の諸帝を支配せる衝動中、特別なる二種の官能に對する所の最も有用なるもの二あり、一は軍國的衝動（即ち元素にして一は平和的産業的行政的、元素即ち親父的衝動なり）。此二種の衝動は、皇帝の出身又は境遇の如何に係はらず、深く其心を制するものなり。吾人は先づ軍國

的要素を講せん。此元素は固り缺くべからざるものなり。一の開化にして他の開化に觸接しつゝ發達せんには、必ず自ら防くべき力を有せざるべからず、而して一方に於ては又争鬪を制し内訌を鎮めんか爲め、即ち國安を保つ必要よりして、此軍國的元素は啓發せり。此目的にとりては他に異なりて特に皇帝の手中に權力の凝集せざるべからず、又凝集するや明けし。故に支那皇帝は常に多少軍國的性質を備へたり。此元素や、吾人が視る如く、支那が常に支配せらるゝ所の單主政治的權力の組織には主要なるものとす。

然れども此軍國的性質と相並ひ、位地の必要に逼られて、開化其者の天眞より湧出する所の平和的産業的管理的性向を見る。支那政府の模範は、隨意に作爲するの神にあらずして、家族にあることは余が既に説明したる所なり。故に支那の諺にある如く、皇帝は常に民の父母なりと概念せらる、即ち皇帝は實に家主たるもの、熱望と義務とを表するものにして、恩威寛嚴並ひ行はざるべからざるものと概念せらる、是

れ吾人が既に示したる如く、發達の拜物的段階に於ける文明の永存に歸する事實なりとす。

單主政治的權力の内部組織に存する此二元素の効用は、必ず常に同一のものならず、軍國的衝動の主となる時もあれば、又平和的産業的行政的要素か先きたつ時もあり、然れども支那文明一般の傾向は要するに次第に産業的平和的性質に偏倚したりき。

然れども支那帝家の連鎖中、其最始の帝家は何處より來りしや。家族相集りて一社會を團結するは常に勢力ある一箇人、即ち一層精確に云へば勢力ある一家族の事業なるや明なり。社會的問題は境遇、即ち一般の事情の成果なり、然れども問題の解釋は孟浪なる人道學者か如何に言はうども常に一個人の官能に屬せり。支那人民が成來せりと稱する原本的百姓、即ち太初の百個の家族、人民を百姓と呼ぶは或は此古話に依ならん歟を結合せるは必ずや或る一個人ならざるへからず、而して之を團結せんか爲めに彼は其自然の拜物教に一種古風なる拜天

帝力の作用

の法式を加へたるや必せり。斯く百姓を結合して此文明の第一群を創始したる人は、自然其自身の家族を社會的構造の第一位に置きて以て最始の帝家を作らざるを得ず、之を連鎖の第一環とす。

帝力の由來及び組成は斯の如し、吾人は次に此帝力の作用如何を講究せん。

第一。帝力は、一致、安定、及び、秩序に缺くへからざるの元素なりき。結合及び秩序の能く維持せられたる所以のものは、蓋し此凝結と世襲ありしか爲めなり。唯此方便に依りてのみ社會は實に創立せられたるなり、何となれば總へての熱望は盡く之を代表し、之を團結する所の一心に向ひて凝集し來るへければなり。第二に、帝力は、軍國的性質のものなるを以て、同時に、全社會の擴張と防禦との機關となれり。外寇を攘ふの義務及び勢力と開化作用の結合に依りて周圍の人民を吸引するの責任は、自然帝力に歸すへし、而して之か爲めに支那文明の藩園と永續とは起りたり。

最後に附言すへきは帝力か、内部の進歩を助けしことなり。有名なる支那の諸帝は常に諸先帝の努力に依りて準備せられたる進歩を贊助固定したりき、進歩の各段を認識して之を着實的に調和したりき。斯の如く支那に於ける帝力は結合及び一致の必要なる元素にして、比對的文明にとりて進歩の元素と造りしなり。吾人は今此文明に最も功力ある所の第二の原力即ち學者社會を講せん。

吾人は曩者等級組織は支那文明の性質よりして嫌ふ所なるを示せり、而して此事實は眞に至要なりとす。然れども此文明は必然にも賢明なる行政的なる學者社會を生じ、皇帝の指揮下にありて、自然に社會的官能を司るに至れり。資本の蓄積は直接の智育に手段及び閒暇を與へ、以て特別なる一社會を生ずるは避くべからざる自然の勢なり。此社會は神道的精神の支那に缺乏するか爲め、等級に組織せられざりしなり。此社會は勿論勢力を有するに相違なけれど、單に識者社會とし

て存するものにて、支那の行政は自然其負擔する所となれり。

支那文明の發端より存する所の此社會は、始終益勤勉なる人民の生長と共に生長したりしか、其眞の學者社會となりて法式的組織を有するに至りしは、全く孔子及び其學派の衝動に依れり。(支那古代の行政組織は孔子以前にありては將相百官、都て人民中の識者より出てたるものにて、特別なる社會より來らざりき、彼等は一の定規を有せず、之を圍みて蟬集し來るべき旌旗たるの成立的教義を有せざりき。此社會か其大博士とし其組織者と認めしは孔子なり。余は此偉大なる哲學者か創立せる大學派を研究せんか爲め、次篇の講義の過半を費すへし。支那文明の全體に於て學者社會は如何なる功用をなせし歟。

學者は進歩の常機關なりしなり、何となれば彼の等級政治の傾向として常に課せんとする所の嚴格なる制限を免れて、自由に産業的科學的社會的活動の進行を追ふとを得たればなり。支那諸朝か各次に更迭代謝する中に存立しつゝ、學者は又眞正なる社會的繼續の官能なりき。

學者は又自然に帝力を制限し、其軍國的元素を減却し、以て平和的産業的要素を啓發したり。學者は親父的特性を皇帝に啓發し、親父的君主の理論的模型を鑄造し、遍々なるも然かも領々として斯の如き模型を實成せんと勉めたり。學者は又輿論を表するの官能にして、往々避くへからざる帝力の過度を制し、以て最上權に影響するの力を組織せり。支那文明の進化に於て重要なる功用をなしたる所の二原力、即ち天子及び學者は以上論するか如し。

吾人は此開化の基礎を抽象的に評價し、然る後其依りて以て支配せられたる力を講究したるを以て、今や此偉大なる社會學的現象の理論を試み得へき稜を握りたり、蓋し其細目を記述せる數多の趣味ある著述の世に著れしにも係はらず、此開化全體の何者たるやは從來未だ理會せられざる所なり。

余は支那開化の假定的不動に關する世間普通の誤謬を説破せざるべからず、西洋の無學か殆ど確定したるの所見に従へば、支那人民は太古

支那開化は進歩的なり

に於て若干度の文明に達し、爾來曾て進歩する所なしと、此概念は實に不可思議なるものにして、之を信するの人は示現に質すことすらもなさるなり、何となれば彼等は、一二の示現なしに、廣布せる開化の自然出現を容せばなり、實に虛妄なる觀念ならずや、彼等は實に説明し能はざるなり、如何なる不可思議の事情に依りて斯く高尙の發達をなせる社會的狀態か、突然耶蘇前二千年の昔に現出し、然る後全く進まずして停止したるやを。或る博識なる記者にして多少有名なるものと雖も、此開化に可及的古き年代を與へんか爲めに、此概念を贊成せり、彼等は支那學者か信する所の太古の黄金時代といへる空夢を其儘に承認せり。支那學者は必然絶對的の所見を抱くか爲めに、彼等の開化の理想的模範を過去に求むるの外なきなり、進化の各歩は彼等に取りて一步黄金なる古代に近づき歸るなり。是れ連續を破らすして必要なる改進をなさんと欲する絶對的精神の思想にて、世上到る所に遭遇するの論理法とす、但科學的精神のみ其比對性質あるか爲めに獨り之に代る

を得へし、支那開化の發端に置かれたる此黄金時代の空夢は立派なる記者か、餘り眞面目に受け取りたるものにて、爲めに西洋無學の荒唐なる僻説に整合を與へたり。然れども此説たるや全く理に戻れり、支那文明も亦他の開化に均しく、非常なる粗野の段階より進めり、彼等の祖先が茅茨を家とし、果實艸葉を食とせし事は、其口碑に傳ふる所にして、更に他の社會の起源に異なる所なし。然れば支那文明は總へて他の開化の如く、全く低き所の段階より起り、長く徐なる啓發によりて浩大なる社會的版圖的廣袤に達せしなり。

然れども此文明を總括して其全體を視察せんには、余か今説破したる無稽の説に多少の皮相的讚美を與へ得べき一大特質を發見せん。開化は他にあらず、支那文明は單に其原本的體制の萌芽の發達なることなり。然れども余か出來ん限り明瞭に描出せんと欲する此一大相貌は、眞正なる哲學者か尊重嘆美すべきものにして、西洋の無政府か想像する如く劣等なるの兆候にあらざるなり。

其發達は秩序的有機的なり

西洋文明史か歴々吾人に呈し來るの多少急劇なる多少龐雜なる變化を受けずして、始終常に同一の性質を保ちつゝ、上下數千年に亘る開化の發達は、實に一大美觀にして、唯常道を行く所の社會のみ之を實驗するを得ん。神道の段階より發する所の西洋文明は、假令交互の關係ありとするも、到底異なる社會的狀態の系統を見るのみ、希臘羅馬及び加特力的封建の進化、一として之に先きたつ所の開化に負かざるはな、實に唯之を慨嘆し得るのみ。第十四世紀に始まりたる革命的發達は、多く此不善なる心理的狀態をして益不善ならしめたり、劇變の連鎖相續いて起れり、吾人は唯事實を視る、實際之を連結する所の實蹟に至りては、吾人は全く之を見る能はざるなり。西洋學者は其概括説を按出せり、彼等は疾病の模範を以て健康の模範と誤認せり、而して彼等は此奇怪なる概念を標準として他の文明を測量したり。支那に於ては勿論、毫も西洋の如き變化なし、始終同一の開化なり、敬天的文明なり、斷えずの増大を致せど、然かも常に同一の性質を保存せり、人民は其祖先

を敬愛し愚にも之を罵嘲し之を誤解するを以て得意とせざるの文明なり。支那か吾人に呈するの觀は實に人意を慰むるに足るものあり。吾人は茲に眞の有機的發達を見る斷えざるの進歩は會て連續を拒絶することなし連續こそ萬社會の最上特質なれ。

吾人若し支那に於て懸々たる進化の連續を見たりとするも是れ決して革命なきの謂ひにはあらざるなり蓋し革命とは唯朝の更迭を云ふものにて開化其者の性質の變化にはあらず。支那の長き歴史に於ては實に夥多の内亂ありたり然れども开は何の爲めに起りしそ支配的要素なる社會の中心力なる帝位を占むる所の家を時々變更するの必要あるに依れり。帝力の位地の至高なるや自然に學者の論議及び協同より生ずる所の制限あるにも係はらず若干の星霜を經れば時に國家の最上官能を委ねられたる十分賢明ならざる人の理心及び徳義を亂るべき強き傾向あり左れば内訌は已を得ざる帝室更迭の結果なり。叔斯の如き更迭は決して輕小の事にあらず其實全國民の團結を維持

し總へて其命脈に最も關係ある基本的官能の交替問題なり故に劇烈なる變動は之に伴はん然れども文明の原本的性質には更に變化を生せず。开は社會的構造に於て官能を遂けたる所の一機關を除却するの事たり之に類する方法は常事として人體にも起れり之に伴ふの病理學的擾亂はあれども直に經過し去るなり。斯の如き革命は社會的連續を拒絶せず。西洋普通の進歩の概念は其不徳義なると共に荒唐不經なり疾病を悲ますして却りて之を拍手す法則又は制限なきの生長を以て眞正なる常態と認む。無政府的精神に依りて遲鈍にせられたる睿智か一大文明の有機的常規的發達を認めて劣弱の兆候なりとなすに至りしは蓋し此悲むべき病理學的性癖を以て説明すへし彼の無政府的精神は自ら最も保守的なりと考ふる所の人にすらも其魔術を逞くせり。

支那文明を十分信據すへき史に徴するに耶蘇前二千五百年より今日に跨れり。二五〇〇なる數字を過重視すへきにあらずと雖も特に社

會學的探究にして事の古代に係る時は數字を用ふること常に論理上
 有用なりとす、彼等は錯迷的孟浪の傾向を制するの媒とならん、然れど
 も社會的進化の其始めに於て如何に遲緩なるやを考ふる時は、其科學
 機能は古代に於けるよりも寧ろ近代に於けるを大なりとす。然れば
 此大文明は四千年以上に跨る所の發達期限を有したり。
 支那進化の歴史は殊別なる二期に別る、第一期は約を紀元前二千五百
 年より同く二百年即ち秦始皇帝の世に至る、之を創業の期とす。此第
 一期は豪邁不羈の政治家なりける始皇の治世を以て第二期より別た
 る、蓋し正當なる支那帝國を創立せるは彼に在る。
 第二期は紀元前二百年より今日に至る、之を發達の時代とす、支那帝國
 は此よりして連綿たる進化の狀を呈す、之が法式的の研究は遂に此大
 國の現狀を知るに至らん。
 元始より孔子時代に至る第一の形像は支那開化の創立にあり。
 此開化は吾人が既に論じたる所の著特なる諸質を以て始まる、敬天の

禮に依りて法式的にせられたる拜物教、等級の絶無、上流社會の存在、一
 首領の行政及び統治祖先禮拜及び孝敬を基とする家族、是れ一は吾人
 が史乘に徵する所なり。紀元前約を五百年に孔子哲學を組織し、以て
 此開化を法式的にし、以て學者社會の體制の基礎を敷けり。此形像は
 始皇に終り、支那帝國全く成る、定立せられたる支那文明は此點よりし
 て絶ゆるの漸進的發達をなせり。

連續と云へる賞賛すべき感情に驅られたる支那の學者及び史家は、彼
 等が社會の歴史に、事物の天真として出來得へからざるの一致を分與
 せんとせり、彼等は想像せり、後世の文化は盡く太古に存在したりと、之
 れ黄金時代の空夢に外ならず、彼等か言ふ所を追窮すれば、唯此開化の
 萌芽は遠く古代に在りとの一理を存するに過ぎず、然れども彼等は
 唯芽萌のみ、其啓發は幾多の星霜を経ざるへからず。

口碑は傳ふ、支那文明の搖籃は黄河の北山西陝西二省の近傍にありき
 と、蓋し次第に支那帝國となりたる一群は始め此處に部落をなせしな

らん。

支那文明は次に黄河を下り、其兩岸に延長し、南北に射出し、遂に現今の至大なる廣袤をなすに至れり。口碑は傳ふ、第一の部落は甚だ狹隘なるものにして、僅に百個の家族(百姓)より成り、之よりして支那人民は蕃殖したりと、是れ社會創成の通則に適合したるの古訓と云ふへし。又傳ふ、此第一群は始め全く蒙昧の野蠻なりきと。然れども其一旦部落を成したるや、拜星教によりて團結せられ、勢力ある一家族か輸入せる法式的敬天によりて統一せられ、此中心は周圍の人民に對して二様の作用をなすに至れり、即ち征服と優者の劣者に對する自然作用とに依りて猶政治的に結合せざる他の人民(故に斯の如き勢力に能く敵せざるもの)を併するに至れり。去れば此社會は其組織益々堅固となり次第に其作用を擴張せり、然れども其原本的性向の軍國的ならざるを以て、其征服安定ならず、故に一帝國を成さずして數多の聚落即ち特別なる王國は、最強人民の周圍に出來たり、而して此等の王國は其開化の勢力

孔子の事業

に服するも、猶異の政治的服従をなさざるなり。支那の史家は其文明の發達に完全なる一致を與へんか爲めに、事物の此狀態を以て一帝國の片々に分裂したるものと看做したり。然れば孔子時代に至る迄の現象は要するに左の如し、曰く前記の如き敬天的開化の發達せる事、此開化に影響せられたる數多の小王國の成生せる事。

吾人は今や斯の如き境遇に於ける孔子の大任を探究せざるへからず。

余は後に於て此問題を詳論すへしと雖も、此長き進化の歩次を明瞭ならしめんか爲め、茲に孔子の事業の大略を述べん。

孔子がなしたる事業は、聰明なる行政的社會(社會其者も亦最も著明なる支那文明の成産物)の爲めに、文明其者の神髓を法式的に表出せる哲學的の教を構成したるに在る。

是れ驚天動地の大事業なりき、斯の如く浩大深遠なる功績を奏したるもの、或は如何なる社會に於ても古來、曾てあらざりしならん。孔子の教は吾人か後に見る如く、此開化の理想的模範を創立せり。此法式的な

る教は目的とすへきの模範を形成し、以て理論家・行政者・其他學者社會に屬する所の人々を團結し得、又團結せざるへからざるの理想を描きたり。實に一種の組織なる上流社會に眞の一致を與へたるは此教にして、竟に學者社會を創立したり、蓋し此社會が首尾完成せるは孔子に始まりしなり。此時よりして支那文明は最高の勢力及び秩序を以て發達せり、何となれば支那文明は茲に始めて其第二の支配力の調和を受けたればなり。第一の原力、一致結合の元素、即ち帝權は始よりして確立せるものならざるへからず、然れども第二の原力、即ち帝權を制抑するの元素は社會の創始より見るを得べく、又其必然の一部なりしとはいへ、孔子時代迄は其調和を受けざるなり。第一元素の凝結せらるへきは其天真なり、元始よりして多少法式的ならざるへからず、第二即ち變形的元素は天性散亂のものにて、後世に至らざれば一の教を収得し、以て之に調和を與へ其固有の作用をして一層効果あらしむること能はざるなり。

秦始皇帝の事業

孔子より秦始皇帝に至る迄の事情は如何。(紀元前五五十年より二百二十一年に至るの間) 支那の政治的境遇は其分離せるにも係はらず、依然として其舊狀を存せり、然れども其文化は次第に進行す、學者社會は各王國に於て日に重大を致し、天下に遊説して政を談論せり、一國に生まれたる孔子派の哲學者にして他の宰相となるあり、斯の如くして學者は政治的に殊別なる王國間に次第に秩序あるの關係を定立し、始皇が成し遂げたる政治的・合同の爲めに漸く路を開くに至れり。人情風俗の酷似は學者社會の影響に依りて進促せられたり、蓋し彼等は其周遊する國民間に平和的・産業的發達を勸奨するにも同く汲々たりし。斯の如き姿にて秦の始皇帝まで進めり、(紀元前二百二十一年より二百九十年に至る)。吾人は此英雄かなしたる事業及び非常の過失を侵したるに係はらず、其衝動の無比なる効果を説かん。 彼は現今の陝西地方なる支那の北部にありつる秦國の君にして、當時

帝國の一統

支那に割立せる八王國の一を治めたり。彼は遂に他の七國を亡びて天下を一統し、眞の支那帝國を創立せり。秦は韃靼人に接近するを以て黄河の末流に近き他の王國に比すれば、自然に兵力を練るの必要ありしなり、故に征服事業の彼の手に落ちたる固り怪むに足らず。彼の偉業は既に同種の文明に依りて相關聯する所の諸王國を一政の下に統轄したるにあり。支那帝國の一旦眞に創立せらるゝや、彼は其力を碧江即ち揚子江以外に布延して、今南部支那なる東京に迄も及ぼせり。彼は斯の如くして眞に支那ならざる人民をも其版圖内に吸収せり、蓋し此等の人民は未だ前記の文明に化せられざりし所のものなり、然れども其征服後は彼等も亦支那文明に浴するに至れり。支那の此二部は時に衝突するの觀ありと雖も、其結果は常に政治的一致に復したりき。故に此英雄の征服は論議すべきの點僅少ならずと雖も、支那帝國の凝結及び増大に至りては到底確定したる所なり。始皇は又韃靼人を驅逐して其侵入を防止せり。絶えず發達し始終其

廣袤を大にむつゝある所の支那文明及び其北西の邊境に出沒する遊牧蠻族の兩者間には闘争常に歇む時なかりき。始皇之に勝ちて掃蕩するを得たり。韃靼人を防かんか爲めに彼の有名なる萬里の長城を築きたるは彼なり、然れども此浩大なる建築は効果ある防禦の手段よりも、聳る虚譽に誇るの記念碑たるのみ、此長城ありしにも係はらず、支那は兩度迄も蒙古人及滿州人に征服せられたり、然れども其征服たるや、吾人が熟知する如く、大帝國の内部に於ける護衛騎兵の權利を収得したるに過ぎず。始皇は大に支那政府に於ける軍國的元素を強くせり、故に學者の強烈なる抗爭に逢へり、然れども此軍國的運動は有用なりき、大に支那帝國の安定に資する所ありき、左れど學者社會の團結は至強なり、支那文明の基底に深く其根を蟠延せり、始皇の此運動と雖も、一時大帝國の爲めに十分堅固なる基礎を置くの用をなしたる元帥以外に出づる能はざりき。此偉大なる事業を、彼は最も劇烈なる手段を以て遂げたり。人あか己を得ざるの辭柄を以て、往々此暴行を庇保

八六
せんとす。然れども、斯の如き企圖たるや、絶對的精神の傾き易き彼の過稱話色たるに外ならず。此種の暴虐は常に卓越なる人の徳義に乏きより出づるものなり。學者は連續なる感情に薰染し、行政の如何を憂ひ、支那政府に維持せんと欲する父母的性質を慮りたるを以て、眞に支那帝國の基礎を固定し、外寇侵襲に十分の抵抗力を蓄養し置かん爲には、如何に始皇の政略の有用必要なりしやを理會し能はざりしなり。彼等は古の模範に拘泥せり、彼等は皇帝及び其相李斯に堅忍なる反對をなせり、彼等の抵抗は彼をして殘酷なる極端の手段を取らしめたり、彼は令して書を燬けり、特に人民の最も尊重する書を燬けり、之を保存せんと欲する者を死に處せり、此野蠻的なる命令は、極度の暴虐を以て執行せられぬ、斯の如き暴戾の全く成功せざるは事物の常理なれども、學者は又嘆美すへきの熱心を現しぬ、古來の智識が凝集する所の書を防かんか爲め、彼等は高尚なる勇を示しぬ。始皇が極端非理の政略は斯の如くなりし、毫も假借し能はざるの暴虐を以て自然に起るへき反對を

碎破せり、彼は斯の如き手段に藉らずして、容易に此抵抗を制し得たらんに。學者即ち孔子の徒に對して斯く暴戾なりける始皇も、一方に於ては、老子の末流なる方士、道士を獎勵せること、是れ注意すへき所なり。其理由は視易し。道士は他の哲學者の如く多少古を輕蔑せり、彼等か始皇の如き革命的精神に同情を感ずるは必然なりき。孔子の徒即ち支那文明の眞の代表者は深く古を尊へり。凡そ支那帝にして道士若くは佛徒を獎勵する時は、大抵衰頹の兆を現したる世なり、是れ注意を惹くに足るへき事實にして、若し孟浪なる心理的錯迷に傾き易き此兩教の劣等なるを考ふるときは、思ひ半に過ぐるあらん。支那文明の第一期の撮要的分析は以上述ふるか如し。支那文明は其諸本質に於て既に創立せられぬ、支那帝國は竟に建設せられぬ、开は衝突、闘争、瓦解を感ずることあらん、然れども種々の元素は、其以前の關聯に依り、又次第に法式的に組織せられ行く學者社會の勢力に依り、常に再び結合すへけん。吾人は今や連續的發達をなす此文

明の第二の形象に眼を轉せん。紀元前二百年より今日に至る迄歴代の朝其數少しとせず、戦亂無政府の時にありては、同時に數朝の存立するもあり。然れども吾人か茲に目的とする所は詳密なる形而下的支那史にあらすして、其文明の進歩の概要を法式的に測量せんとするにあれば、吾人は唯漢唐宋元明清の六朝のみを云はん。此數朝は無政府又は政治的分解の時代によりて分離せらる、然れども茲に注意すべきは、此等の無政府の間隙か、文明の進歩するに隨ひ、其年月及び烈度を減少するにそある。此六朝の年代左の如し

漢紀元前二百年より紀元後二百六十三年に至る。唐紀元六百十八年より九百五年に至る。宋九百六十年より一千百十九年に至る。元(鞏鞏蒙古)一千二百九十五年より一千三百四十一年に至る。明一千三百六十八年より一千五百七十三年に至る。清(滿州)一千六百十八年より今日に致る。

此簡單なる年表は吾人の大目標となるべきものにて、吾人は之に依りて支那社會か經過し來る所の進路の各歩を各時代間(任意的には撰はざる)に徴するを得へし、漢唐の間に吾人は其の政治的分裂を見る、唐元間に於けるも同じ。數朝か同時に存立せる時にありてすらも、支那文明の進歩は停止せるにあらず、唯較遅緩なりしのみ、秦始皇帝か深く捺したりける統一の印象及び學者社會を以て、法式的に表出せる風俗信仰の原本的酷似は、若干の年所を経るの後、常に益、同種なる文明をして政治的一致に回復せしむ。

此長日月間二様の進歩をなしつゝ、ありき、曰く、一、支那社會内部の發達。二、版圖の擴張。故に周圍の人民(韃靼人、西藏人)に對する其抵抗力は益々鞏固となり、遂に彼等を制御するに至れり、此を以て支那は其西洋と觸接する前に必要なる安定を十分に有したるなり。吾人は今内部の作用及び外部の反動なる此複運動を吟味せん。

吾人は見る、學者社會の啓發に缺くへからざる緊要の工業的發明の、秦

始皇帝の世に於てなされ、尋て改良せられたるを、开は他に非ず、紙墨の發明是れなり。筆の改良は、最も有名なる始皇の將、蒙恬によりてなされたりと云ふ。蓋し支那に於て緊要なる工業的改良の軍人によりて爲さるゝは、餘り目新らしき事にあらず。左れば竹片(稀には石)に文字を刻むの舊法は、變して筆墨を以て紙上に書くことゝなれり。竹片に雕刻するは、極めて面倒なる方法にて、唯學者社會の發達の始にのみ適せり。此社會が工業社會の増殖と共に盛大となるに隨ひ、自然言語を寫すの良法を切望するに至れり、左れば紙墨の發明は、時の需用に出づる自然の成績なりき。此一段の進歩は、智識の傳播取得に便利を與へたるを以て、學者社會の進歩更に著しきを加へぬ、而して識者の増加するに隨ひ、勿論文明の發達をも一層進促したるなり。此發明は、秦より漢に至りて次第に擴布し、紙の製造は、支那工業中最要なるものゝ一となれり。漢の惠帝(紀元前百九十四年乃至百八十七年)古書に對する始皇の法を

廢し、以て彼の革新者か其改革を施行したる、壓制暴虐の元素を救治せり。斯の如く、漢朝は、恢復補理の事實を目的とし、始皇の事業中主要な、かじもの、即ち政治的統一及び行政的集權を保存しなから、支那文明の常道を歩み、之を啓發せり。漢朝の最良模範たる一帝は文帝なりき(紀元前百七十九年より百五十六年に至る)。帝は學を起し、農を勸め、眞に民の父母たるの名に負かず、能く孔子及び其徒弟か描きたる最高官能の道徳的理想に適へり。

例へば日蝕(國教の基礎拜星)にあるか爲め、支那に於て至要の現象に關して文帝は眞に特色を有するの詔を下せり、曰く、天は其生する所の蒼生に優者を興へ、以て之を養ひ、之を治むとは、朕が常に聞く所なり。人主なる優者にして、徳を缺き、政を失ふ時は、天災異を下して之を戒む。茲に十一月日蝕す、朕深く之を思ふ。天にありては、星其光を失ひ、下にありては、蒼生其不幸に苦む、是れ皆朕が不徳の致す所なり。此詔下らば、直に天下に令して、朕が過失を詳察

せしめ、朕をして之を知らしむへし。厥れ賢良方正の士を四方に求め、之を朕に輸せ、又百官有司に命す、益、殿に其職を盡し、特に冗費を省きて民福を計らんとを。

吾人は茲に始めて天子に上書するの制規的權利の起るを見る、單主政治に於ける一大進歩と云ふへし。文帝に起り爾來常に維持せられたる此上奏權は、後に諫官の制に依りて啓發整頓せり。此官能たるや實行上頗る危険のものなれど、學者社會にありて嘆美すべき誠忠の好例を出し、以て最上權か生出し易き專制の弊を防止せり。吾人は此諫官の制に於て、輿論の衝動に依り帝力を調和せんと欲する學者の絶ゆる盡力の特色なる例を見る、蓋し諫官の上書は之を官報に掲げ、更に郡縣に公布するなり。文帝は又特詔を下して政を議することを禁したる始皇の法を廢せり。詔に曰く、

朝廷百官の口をも拮制するに至る、若し斯の如きは、爾今帝王は如何にして其過失を知るを得んや。加之此法は又他に一害を生す、今此法に従ふときは、君に對して忠誠敬順の意を公表するもの、若し其語にして毫末たりとも宜きを失ふことあれば、直に叛逆の罪を侵すへし、有司は其意の欲する所に隨ひ、政府に對する不平なりとの冷淡なる判断を下せり。此の如く、蠢愚なる蒼生は知らず、上刑を受くるに至る、實に忍ふに耐えず、宜く此法を廢除すへし。

此詔に對して康熙帝は左の特著なる批評を下せり、曰く、秦始皇帝は數多の法を布けり、漢高祖大抵之を除けり、而して此法は文帝に至りて始めて廢せらる、是れ既に遲しと云ふへし。

武帝(紀元前百四十年より八十六年に至る)は管に支那の内治を進めたるのみならず、四方の蠻族に對して大になす所ありき、後十八世紀に至りて韃靼及び西藏迄も附庸となし、東洋の大帝國となりしも、其濫觴は全く帝にありしなり。文帝の世より歴史の研究極めて盛なりしか、彼

の東洋のヘロドタスなる司馬遷か史記を編したるは此帝の時なり。佛教の公然支那に入りしは此代にして、後來其影響する所往々嘆すへきもの多し、然れども今日に至り佛教を信する種類及び西藏人を御するには有用なる政治的器械なるを證せり。

漢唐兩朝の間紀元二百六十年より六百十八年に至るの長き星霜は全く政治的擾亂の時代にして、往々無政府狀を呈し、竟に漢朝の交迭にて終れり。

唐朝

紀元六百十八年より九百五年に跨れる唐朝は支那史に於て最も注意すへきもの一なり。箇は文學の代なり、文學的著述小説及び戯曲の類の世に現れたるもの實に枚舉に耐えず。對策及第の官吏試験法茲に始まりて、一大進歩をなせり。

對策及第は決して等閑視すへきものならず、蓋し此法に依りて、學者社會か今日猶保持する所の彼の體制に達したるの路を開きたればなり。學者社會は非常に發達せり、其中よりして此勤勉なる人民を支配すへ

き有司百官を採用せり、去れば百官の作用をじて均一ならしめんか爲めに、之を撰抜するに保證を要するに至りしは自然の勢なり、是に於てか自然の必要より此試験法は設けられき、此法の一旦創立せられたるや、學者社會は爲めに一層の一致を來し、隨ひて一層の勢力を増し、益々鞏固とはなれり、既に天子か隨意に撰抜し得る所の漠然たる一社會に非るなり、對策及第したる後は、次第に進んで國の最高官に達し得へき、法律的階段を有する、眞に整頓したるの一社會なり。此進歩は學者社會に一層の整合を與へて、以て文明全體に於ける其作用を改良したり、社會の進化は是に於てか已前と同一の跡を遂ふて一般に連續せり。

此朝に於て庠序教育及び孔子の教は益々擴張せり。唐朝中最も著明なる模範の一は太宗紀元六百二十七年より六百四十九年に至るなり、吾人は彼に於て、孔子か略説し其徒か完成せる天子の理想を見る。太宗敕して、爾今支那帝は死刑を行ふ前三日間食を斷つへしと定む。死刑は至急を要する場合の外必ず天子に依りて裁定せ

らる。此死刑の裁断は毎年某時を期して之をなせり。太宗の人命を重んずること斯の如し、彼の神道政治の専制を以て、支那の如き政府に輕に附與すれども、事實上遙に之と異なるを見るへし。

太宗は家族及び社會の根底たる孝道の啓發を促せり。彼は浩大なる工業の系式を組織し、又老朽痼疾のものを救恤せしか、後の諸帝も皆之に倣へり。又棄兒院の設あり、以て公然たる殺兒の制ありとする、西洋の讒謗の如何に不裕なるやを知るに足らん。彼は治世の法を著述せり、其一節に曰く、

朕毎日政を執るの餘暇を以て古史を繙き、各代の風俗君主の良否治亂興廢の跡を講し、朕か意見及び思想を練るを以て樂とし、常に益する所あり、……

曾て諸皇子を戒諭して曰く、

嚴なるも而かも慈なれ、己に克ちて慾を制せば、群臣悅服して治むるに難からし、一の善行は百の嚴法に優れり、能く群臣をして其職を致

さしむるを得ん、刑は稀にして而して寛なれ、仁は施して惜む勿れ、今日與へ得るの賞は明日に遺す勿れ、罰は其正當なるを證する迄は必ず行ふ勿れ、

と嘆美すへきの至言なり。

印刷の術

此朝に於て彼の有名なる大學翰林創設せられ、最も才徳あるの士を此に集む、支那の文學政治及び教化に益したる所少しとせず。

唐の末約を紀元九百三十一年に印刷の發明あり、活字法にあらすして木版なりき。此發明は、文明の性質及び需要よりして實に必須のものなるに、其豫備なる筆紙墨の發明後千有餘年の久きを経たるは驚くに堪えたり。學者社會の大に増加しつゝ、ある國に於て、容易に又迅速に多數の書籍を供給するの必要を感ずるは自然の事にして、斯く勤勉なる人民間に竟に此發明ありしは固り怪むに足らざるなり。其法は西洋活字と異にして、木片に文字を雕刻するにあり。第十一世紀に至りて活字を發明したるも、猶其木板を撰用したること、決して西洋人か想

像する如く、守舊の性癖に出でたるにあらず、然れども甚だ確乎たるの理由ありて存するなり。

印刷の爲め支那人か何を以て多く活字を用ひざるや、其理由二あり、一は其文明の事情より起る理由にして、一は書字法の性質より來るものなり。

社會的理由は、支那は同一の書を再版するの多きこと、是れなり。革新的西洋に於ては、古人の糟粕を以て皮相を修飾せる淺劣なる著書を公にするの弊あり。支那は注釋批評の類を多く著すこと勿論なれども、社會的連續に對する尊敬心は幾回となく同一の古書を再版するの慣習あり、故に木版は十分保存するの價值あり、特に其磨滅したる時に當りて容易に且つ廉價に修復するを得。支那に於ては西洋よりも廉價に印刷するを得ること注意すへし。印刷は唯紙の一面にのみなされ、甚だ迅速なり、一人の職工は一日に二千枚を摺り得と云ふ。

然れども支那人か木版を採るには他に緊要なる理由あり、蓋し其文字

書法の性質に關せり。吾々西洋人にありては原音を表するに母字を以てし、其數亦多からず、是れ活字を用ふる所以なり。支那に於ては然らず、彼等の文字は表音的のものにあらず、詳言すれば、其文字は國語の盡く組織せらるゝ少數の原音を代表したるものならず、支那の記號即ち文字か、表音的に使用せらるゝ時は全語を表し、單に音の一節を表せず、而して音符は稀に單用せられ、通常は思想の符號に結合せらる、故に其文字は非常に夥多にして、開化の進歩と共に無限に増加せらるゝを得ん、今其數を擧げんに、少くも三萬以上ならん、此を以て之を作らんに、は非常の數を要し、隨ひて支那人は活字なきの不便を感せざるなり、而して其術の發明せられたるの時にありても、自然二者中の便利廉價なる木版を撰用したり。

然れども支那人の活字を用ひ用ひざるは時の問題なり、耶穌宣教師の熱心に依りて、實際上の困難多く減却せり、日本に於ては活字殆ど木版を壓倒したり。

印刷の發明よりして官報の組織は起れり、始めは帝室の報告のみならず、縣郡の報告も尋て起り、爲めに官民の交通容易に又迅速になりたり。此外に輿論に訴ふるの便法たる廣告札、揭示帖の法行はれて、官民共に之を用ひたり。

宋朝(紀元九百六十年乃至一千二百二十六年)に於て文官にのみ用ひらるゝ所の對策法は武官にも及ばせり、其法恰も佛蘭西に於ける陸軍海軍及び工業學校の入學試験の如し。此題目に關して一言すべきは、唯此大國民の命運を支配する帝力に於て、益、專制的元素を除却するの絶えざる傾向あることに在り、即ち此試験法に依りて百官の採用は盡く人主の隨意に出づるを得ず、然れども合格の如何に依りて決定せらるゝに至れり。

元。即ち蒙古朝。は其創立後八十八年間支那を治めたり、蓋し蒙古の支那略定は、無政府的擾亂の時にありしを以て、支那人が死れんと欲するも能はざりしなり。

元朝

支那の學者社會か、其文明の主要なる睿智的、倫理的成績を法式的に蓄積し、隨ひて連續の性質を之に印象し、以て其發達をして齊一ならしむる事は、元朝の創立に於て其適例を見る。

窩闊台(成吉思汗即ち太祖の子太宗)の相、耶律楚材(ユルチケイ)は韃靼人と雖も、有名の學者にして、支那の諸學を回々教徒の星學を兼ねたり、彼は此智識を支那に輸入したるのみならず、其主をして、學者社會を行政官及び裁判官に用ふるの如何に有用に如何に必要なるかを知らしめたり、彼は巧に且つ熱心に、支那文明の連續及び進歩を確定せんか爲め、征略者を之に同化せんと勉めぬ。アベル・レムサト氏は其新亞細亞叢談に云へり。身の韃靼人にして心は支那人なる彼は、自然に歴せらるゝ人民と、歴する種族との中人となりき、成吉思汗及び窩闊台の側にあるの高官に在りて、彼は自ら討ち勝たれたる人民の守護神なるを知れり、而して打ち勝ちたる野蠻に向ひて、制度、秩序、文化及び仁義の爲めに訴へつゝ、其一生を費せり、彼は獸力の束縛に道の勢力を、兵馬の權を制度の

權に奪掠の暴を租税の法に改めたり、是れ攻略的韃靼人の暴力に對する、緩慢なるも然かも抵抗すべからざる支那學者の勢力なり。成吉思汗の孫なる元の世祖忽必烈ケビレイも亦同じ政略を繼續し、自ら支那人となりて、其文明を増進するに盡力せり、實に元の諸帝は支那の強大に資したる他の諸代の天子と並稱するを得へし。忽必烈は北京を以て支那の都とせり。韃靼人が喇嘛教を輸入したるも亦帝の世なり、蓋し喇嘛教は西藏に特別なる佛道の一種にして、他の宗教に殆ど見ざる所の僧侶の體制を以て著し。忽必烈は紀元一千二百九十四年に崩せり、彼は支那の政治上に數多の改身を加へ、又甚た必要なりける強兵の功を致せり。要するに蒙古朝は帝國の偉大を維持し、其内治を進むるの功をもなせり。此朝漸く衰へて國を治むるに適せざるに至りし時、支那人は韃靼人と共に之を驅逐せり、而して明なる内國の朝は之に代れり。

明の太祖(一千三百二十七年より一千三百九十八年に至る)は一工人の子にして、始め僧となれり、元末の亂るゝに當りて、蹶然寺院を去り、久か

明朝

らすして衆を集め、竟に蒙古人を驅逐せり。内治に於ける彼は學者社會の力を借りて秩序を回復し、韃靼人征伐を以て益國の文明を鞏固にせり、子孫亦彼の政略に倣ひて國利民福を増進せり。太祖崩するに臨み遺詔を下し、其儲嗣を撰ひたる理由を明にし、同時に遺訓を與へたり。其皇族中より自在に儲嗣を撰拔せし事、及び其理由を公にせし事、此二事は未來に起るべき中和の狀態に於て、人間社會が猶一層の高度以て應用實行する所の社會的組織ならん。太祖は帝國の内治を完全にし、有用なる工業を起し、老弱を扶助し、祖先孔子及び賢哲を崇拜するの禮を盛にしたり、略言すれば、支那固有の帝徳を以て世を治めたり。隆盛を極め重大の功績を成したる後、明朝は最上權の爲めに沈醉して、竟に其性質を變し、其腐敗に伴ふ擾亂の最中に、今代の滿清は連戰連勝の勢を以て舞臺に現れ來れり、支那も流石に非常の抵抗を爲せしものから、全く無政府狀をなしたるを以て征服されたりぬ。

清朝は正史上一千六百十六年に始まり、一方には精勵内治を圖り、一方

滿州朝

には鞏固及び西藏の略定を終へ、其西洋と交際して攪擾せらるゝに先きたち、總へて必要なる安定を確立したるの功績大なりと云ふへし。西洋と觸接する以前に支那文明を攪擾せる元素は實に何にもものなりしを、開はいふ迄もあらず鞏固人なり、即ち此勤勉富裕なる社會と自然に衝突をなしたるは、水艸を逐ふて遊牧する一群の人民なりき。此衝突の結果は一様ならず、鞏固人は多く討ち退けられ、時には征服せらるるにも致りぬ、時には又勝を制して自ら支那文明に結合同化し、多少劇烈なる擺動の後其發達を媒助したり。元か鞏固人に佛教を輸入したるは、現清朝か結了せる征服の素地をなしたるや明けし。此朝の代表者たる康熙乾隆の二帝は、竟に鞏固及び西藏を服従し、以て必要なる堅硬を支那文明に附與したり。

康熙帝

支那の諸帝中最も歐洲に知らるゝは路易十四世と同時なる康熙帝(一千六百六十二年より一千七百二十三年に至る)なり、彼は天主教の大宣教に賢明なる保護を與へき、彼は賢くも、西洋人か貯蓄する化學的智識

を、支那文明に輸入するの用を視たり、彼は試験に依り西洋星學の支那に優るを徵知し、一人の天主教徒を司天局の長とせり、彼か工夫せる試驗法左の如し、彼は兩者に命じて、某日に於て日晷の指針か投すへき、影の長さ若干なるやを計算せしめぬ、此問題は當日の大陽の傾度及び正三角の智識を要す、兩者の豫算を當日の實際に驗せしに、其優劣忽ち判然せり、彼は支那天文の猶幼稚にして、遠く西洋に及はざるを知れり。彼は内國の秩序を十分に恢復し、外に對しては政兵の二畧を兼用し、以て成吉思汗の如き新蒙古力の成生を防けり、彼は其長き治世を國運の隆盛に委ね、廣く文學の普及を奨勵せり。

乾隆帝

康熙帝の孫乾隆帝は一千七百三十六年より一千七百九十六年に至る迄位に在り、彼は鞏固の征服を完成し、西藏の服従を確定せり。西藏の外面は大教主ダライラマに依りて支配せらるゝと雖も、其實支那官人の制御する所なり。此英主の治下に内國の改良は能く對外の政策に伴へり。彼は公益の事業、特に黄河の汎濫を防ぐ所の大工事を勸奨せり。彼の性

質は高尚にして、其責任を思ふの深きや、最上權を認めて義務を命ずる所の社會的官能となせり、此概念や全く孔子の哲學と一致するものにて、賢明なる支那諸帝か學者に逼られ又助けられて、實際に躬行したる所のものなり。余はアベル・レムサト氏より數語を借りて此英主の徳を記さん。曰く、

帝漸く年老ゆるに従ひ、人主の義務の一部分たる典禮を行ふこと、益々嚴格となれり、而して老衰に耐えず、較其嚴行を緩くするに當りてや、詔を下して其理由を説明せり、彼は斯の如く國事に精勵すること益々深く、年九十に至りても嚴冬の深夜を侵して、謁を宰相に許し、國政を談せり。天性剛毅にして聰明敏活にして正義を重んじ、民を愛すること古帝王に譲らず、其民を治むるや謹恪にして、其平和富饒を計るに至りては百難に當るも屈する所なし、南に巡狩すること都て六度、毎に民福を増すの命を發せんか爲めなり、或は海濱に沿ふて溝渠を掘らしめ、或は有司の専恣を罰して寛假することなかりき。

乾隆帝は又文學教育の普及を計り、帝も自ら博學多識なりき。故にペール・アマットが著したる記事の卷首に、左の讚美詩を掲げたるも決して過稱にあらざるなり。詩の意は左の如し。

浩大なる版圖の統御に關する政務の爲めに常に孜々汲々たるも、地球上最も雄渾なる帝王は、帝國中最も博識の學者なり。

諸君、吾人は今や此文明の形而下的發達の測量を終へたり、測量は實に省略したるものなり、然れども吾人の目的には十分なり。吾人は、二種の現象の次第に、眼界に浮ひ來るを視る、即ち一方に單主的勢力と、衆民の中より試験に依りて撰擇せる行政社會との聯合作用に依りて起る所の産業的平和的社會の内部の發達、あれば一方に於ては絶えざる競争の最中にありて、其屢擾擾せられたる外部の人民を遂に並呑し去る所の着實なる増大膨脹なり。

斯く吾人の概測を結了したる後、吾人は之より生ずる所の最後の収入は如何なるものなるかを合算せざるへからず、言を變へて云は、吾人

は此大文明の現状の概圖を畫かざるへからず。諸君、余か抽象的理論を創立し、尋て形而下的摘要を與へたる長き進化は、其結果として東洋の極端に於て、浩大なる一社會を成生せり、是れ上下四千年間連綿として絶えざる所の發達の果成物なり、吾人か今簡單に其實價を講究判断せんとする最後の成績なり。同時に安定的進歩的なる此大社會、古來存立せるもの、中最も善良なる此社會は、秩序と進歩との兩者間を來往せざるへからる必要の擺動あるを諒知せば、西洋に於て此題目に關し、一般に流布する卑劣なる情操を庇保する所の愚説の皮相なるを、諸君に證するに足らん。

支那帝國は支那本部及び附庸より成れり、附庸は西藏、東ツトルケスタン、サンガリヤ、蒙古朝、鮮朝、鮮を、附庸とせしは、著者の、誤認、其他臺灣の如き支那東岸の諸島を包含す。支那の古代に遡りて其對外的活力の歴史を成す所の競争後、十八世紀の末に至りて、漸く此等の附庸を征服したる事は、此開化に其主要なる安定を附與したり、昔時西歐羅巴迄も恐

怖を散布せる野蠻人を文化して、以て人間になしたる功績の如きは云ふを俟たず。

支那本部は北緯二十度より四十二度に至り、東經九十七度より百二十二度に至る、即ち南北一千五百哩、東西約一千二百哩、面積百五十萬方哩以上にして、十八省に分たる。左に掲ぐるは千八百五十二年及び千八百五十二年政府の調査に係る人口表なり。

省	首府	千八百五十二年の人口	千八百五十年の人口
一、直隸	保定	二七、九九〇、八七一	四〇、〇〇〇、〇〇〇
二、山東	濟南	二八、九五八、七六四	四一、七〇〇、六二一
三、山西	太原	一四、〇〇四、二一〇	二〇、一六六、九七二
四、河南	開封	二三、〇三七、一七一	三三、一七三、五二六
五、江蘇	蘇州	三七、八四三、五〇一	五四、四九四、六四一
六、安徽	安慶	三四、一六八、〇五九	四九、二〇一、九九二

七、江西	南昌	二三、〇四六、九九九	四三、八一四、八六六
八、福建	福州	一四、七七七、四一〇	二二、六九九、四六〇
九、浙江	杭州	二六、二五六、七八四	三七、八〇九、七六五
十、湖北	武昌	二七、三七〇、〇九八	三九、四一二、九四〇
十一、湖南	長沙	一八、六五二、二〇七	二六、八五九、六〇八
十二、陝西	西安	一〇、二〇七、二五六	一四、六九八、四九九
十三、甘肅	蘭州	一五、一九三、一二五	二一、八七八、一九〇
十四、四川	成都	二一、四三五、六七八	三〇、八六八、七五七
十五、廣東	廣州	一九、一七四、〇三〇	二七、六一〇、一二八
十六、廣西	桂林	七、三三三、八九五	一〇、五八四、四二九
十七、雲南	雲南	五、五六一、四三〇	八、〇〇八、三〇〇
十八、貴州	貴陽	五、二八八、二一九	七、六一五、〇二五
總計		三六〇、二七九、五九七	五三六、九〇九、三〇〇

吾人は云ふを得ん、支那本部は同一の制度に屬する少くも四億の人民

活力は平和的産業的なり

を有するものなりと、事實其者に於ても固り驚くべきことにして、永久連續無比なる社會的進化の最も著しき成果なり。

吾人は先づ此浩大なる人民が主として表示する所の活力は、如何なる種類なるかを見ん。諸君、吾人が茲に觀る所のものは、實に偉大なる現象ならずや、四億有餘の人口は全く平和的産業的なる活動に従事せり、而して清朝が蒙古を服従したるか爲め、其兵制は單に警察の用を爲すに過ぎず、即ち其一個人より起ると一揆より生ずるとを問はず、内亂の爲めに保安を維持するの官能たるのみ。

個人的財産は、其取得使用遺傳の三者に於ける、共に全く安全なり、而して其動不動たる共に同じ。財産の安全、諸活力及び諸文明の主要なる基礎たる財産の安全は、西歐羅巴の最も善く治まれる諸國に異ならず。田地は小分せらる、故に小産の制は高度の發達をなせり、小作者社會即ち農夫は頗る尊重せらるゝものにて、其位地學者の次にあり。時に大田ありと雖も、开は全く例外なり。大作法は近世のものにして西洋に特

別なりとす。蓋し極西の人民間に抽象的能力の發達せる結果なり、未來に於ては現今よりも大作法行はるゝに至らん。蓋し農業を法式的にするの必要なる條件及び基礎なりとす。大作の前驅者たる牧畜は殆ど支那(特に南部)に存在せず。五穀特に米の耕作は支那農業の大目的なり。牧畜の絶無隨ひて肥料の缺乏は支那人が非常の苦辛をなして種々の物を利用せんとするに係はらず。土地を空耗するの原因たるや明なり。然れども此等の不便、實に斯の如き開化の性質として固有なる此等の不便は、無数の小農の存在に依りて償ふに餘りあり、此等の小農は自由勤勉獨立にして、個人的財産の安全なる人民の體格なる生活より起る必然の形像なりとす。

盆栽花木庭園等の耕種は高度の發達をなし、其完全なる諸國殆ど其此を見ず。竹茶等の如き樹木の栽培は農業中緊要なるものなり。支那人の食料は多く植物なり、肉食は豚鶏を多しとす。支那の北方に於ては牛羊及び野獸の肉を韃靼より供給す。農具は耕す所の田地の小な

る故に最も簡單なるものなり、此缺點は農夫の熟練にて補へり。此他支那農業は浩大なる灌溉の組織より其利を受く。故に吾人は支那人が天氣の不順を慮るの甚きを理會すへし、風雨の影響は四億の人民の食料に及ぶなり。左れば公廩の制亦大に發達せり。蓋し全文明の根底たる拜物教によりて、氣候を苦慮するの度は一層高めらるゝなり。農業は此平和なる人民の活力を費す主なる目的なり。支那の輿論は常に國の大本として農を尊重す。吾人は更に其工業及び貿易に眼を轉せん、即ち原物を製工するの事業及び貨物を交換するの手段を視察せん。支那工業は主として實驗的なり、抽象的科學の應用より生ずる器械の使用に至りては殆ど絶無と云ふへし、然れども支那人は其工業に於て著しき敏活及び手練と不屈の耐忍及び謹恪を示す。支那工業は特に小工業なり、小仕掛なり、猶其農の小農なるかことし、是れ資本の凝集不十分なると大器械を使用せざるに因る。

支那に於ける絹製造は古來より著大なる産業なり、杭州一府に於ても其職工の數六萬以上にして、其近村は十萬以上なり。綿製造も絹に同く盛なり、然れども其緊要の度は較、一步を譲るへし。陶器製造に至りては其技の巧なる、其産額の大なる更に言ふを要せず。然れども此人民の産業的活力の觀念を與へんか爲めに、余は十七世紀の宣教師の一人なるガブリエル・ツ・マゲイランが著したる支那記事の一節を抄出せん。

此王國に於て一尺も無用なる地はなきか如く、男女老若偏手跛踰雙盲を問はず、一人として無業の者あらざるなり。支那の諺に曰く、支那王國に於ては一物をも投げ棄てず、と實に然り、如何に無用無價なりと思はるゝものと雖も、必ず之を利用す、或る種の利益は必ず之より生ずるなり。例へば北京に於て附木(木片)に硫黃を塗抹せるものを販きて生活するの家、一千戸に下らず、紙屑を拾ふて業とするもの、亦之に譲らざるへし……

竹の栽培

支那人の産業に敏捷なるを示さんか爲め、種々様々に竹を利用するの法を説かん。

支那人は法式的栽培に依りて、無數なる竹の種類を生ずるの熟練を得たり、大小長短、節の距離、内部又は外面の色、質の厚薄、枝葉等を異にするの竹を作り、其特質をして益、著明ならしむ、故に用法亦非常に夥多なりとす。グロシエルの『支那』第二帙第三百八十一頁より左の一節を抄出せん。

筍は「マツパウド」の如く柔軟美味にして、滋養あるの食料とす、其需要活大にて其地に餘りあるものは、帝國極遠の地迄も輸送す。其腐敗を防かんか爲め、短く之を切り、蒸したる後に乾燥す、然るときは能く長さに堪え、遠地に送るの便あり。竹は中空なりと雖も甚だ強し、棒として用ふれば甚だ重き物をも支ふへし、時に建築用に供す。竹は横斷すること難し、然れども縦に之を割くは易し。時に其細線若くは薄片を編みて筵とす、小函箱等の飾具を製すへし。其自然に中空

の管なるを以て、地上又は地下に敷きて水を引くの樋とす。竹質は緻密にして容易に磨き得るを以て雕刻材に供すべく、又金銀象牙等を鑲むるを得。甘藍水に煮て之を壓迫するときは、能く其色を保存して消磨することなし。シボット氏の説に隨ひ、此大帝國の鑛山も竹の利に若かすといふも決して過言にあらざるなり、蓋し米及び絹を除きては歲入之に及ぶものなけん。

内國の貿易大なり

支那の眞の貿易は内國にありて浩大の度に達せり。蓋し帝國の廣袤と人口の稠密なるを知らば、容易に之を想像すべし。貿易は主に水運に依る。支那は河川溝渠の一大網細工にして内地の航行自由なり、政府は此水運の便に注意怠るなし。支那は自ら一天地をなして他の供給を仰ぐを要せず、實に内國の産業製造にて十分需要を満足するを得るなり。マゲイラン師曰く、

紀元一千六百五十六年余は天子の命を受け、大渠及び他の川を航して北京より瑪港に至れり、其距離千五百哩以上、一日の外曾て陸行せ

しことなし、而して其陸行せるは江西省より廣東省を分つる山なりき。一千六百四十二年の五月四日に余は浙江省の杭州府を發し、同年八月二十八日に四川省の成都府に着せり。此四月間に余は一千哩以上を水行したり、其中一月は二川を航せしか、他の三月は大江のみを航せり。此長程を通して余は毎日無數の筏を見しか、若し之を連接したらんには、渡るに數日を費すへき一大橋を成したるなるべし、……………

外國貿易は小なり

此浩大なる内國貿易はマゲイラン師の著述後一層盛大となれり。現世紀に至りて大衝動の興へられたるにも係はらず、實に支那の外國貿易は其人口に比し微々たるものなり。外國との通商は、主に西洋の惡徳のみを傳ふるを以て、害多く利少し、東洋の人民に對して一の義務をも認めざる所の人民と交際するには、更に特別の危險あるは別に云はずとするも。

西洋(露西亞を除き)の貿易は、支那のみに關すれば、有用品の交換にあ

らざるなり、支那は金錢にて拂はるゝなり。二千年以前支那の一帝は流石にも社會的の意見を以て、正當に此種の貿易の價值を評定せり、曰く、

貿易に依りて國內に輸入し來るの貨幣は、其利する所唯貿易に依りて再び輸出するのみに限れり、必需品又は有用品の交易に非されば、到底有益なる貿易となすべからず、飾具美術品等の交易は、其實物交換法に依るも又は買買法に依るも、必竟驕奢に屬せり、然るに驕奢、或る市民の餘裕を示す所の驕奢は、數多の他の市民に於ける缺乏を意味せり、富人か其車に要するの馬益、多ければ、徒步するの民益、多からざるべからず、其馬彌、華美なれば、貧者の家彌、窮乏せん、富人か美肉に飽くに隨ひ、菜蔬に飢うるの民隨て多からん、吾人か社會にありて勤勉節儉に依りて爲し得べき最良事は、衆人今日の衣食に乏からざるにあり、時に或は愉樂をなすにあり。

諸君此勤勉なる人民の一般活力は、以上説けるか如し、吾人は今其組織を研究し、第一に家族第二に社會を評論せん。

支那に於ける家族の基礎余か既に示したるか如く、全社會の基礎は孝道なり、父母祖宗に對する崇敬なり。斯の如く父の權、祖先に對する尊敬、此主要なる基礎に組織せらるゝの家族は、支那政治家及び學者が常に稱道する所なり。

祖先拜禮

拜物教的精神の結果なる祖先及び墳墓の拜禮は、支那に於て一の制度となり、家族を鞏固にしたる所の私祭法を組織せり、各支那人か其心理的狀態の拜物教的基底に、神佛等如何なる宗教を加添するも、時々墳墓に詣て、細心に之を修むるは、其主要なる義務なりとす。各家族には其門葉如何に夥多なるも、必ず其有の祭祖堂ありて、一家一門相集りて例規の祭典を擧ぐ、其席次の如きは貴賤貧富に關せず、年齢に依りて之を定む。又各門葉は其直接なる祖先の位牌を安置すべき祭壇を設け、一家に起れる細大の要事は、戸主たるもの毎に之を告ぐ。

祖先拜禮の嘆美すべき組織は此の如し、連續を精神とする理想的家族

の常態に近似せる組織と云ふへし。法式的に此情操を啓發するは、即ち家族の構造中最も有機的なる部分を啓發するものなれば、其真正なる進歩を確定するの最良法なり。連續に對する此尊重を大に家族に啓發する時は、實に適當なる安定を家族に附與するのみならず、又社會の爲めに眞に有機的なる性質を調成し、以て現在西洋の人民間に種々の擾亂を起す所の彼の過去に對する、輕蔑を避くるに足らん、故に吾人は、惡き子は常に惡き民なりとの支那格言の虛ならざるを確信するを得ん。此家族制度の美風は更に左の慣習に依りて完成せらる、即ち支那に於ては人の成したる功名を以て祖先に及ぶものとし、所謂祖先の名を發揚するを云ふ、神政社會に於るか如く子孫に傳はるものとせざるの慣習、是れなり。斯の如く殊勝なる組織は眞正なる各哲學者の尊敬を惹くに足らん、而して人道といへる宗教の衝動に依り、西洋人か次第に社會の常態に進み近づくに隨ひ、竟には此偉大なる美風に同化するに至らん。西洋の習俗は、大抵特に現今に至りて、只管英傑の子孫を

して懶惰無用の人たらしむるの傾向を強むるのみなれども、十分に啓發せる孝道を基とする支那の組織は、祖先の名を發揚する事を以て、人か成さんと欲する功業の賞とし、同時に後年自己の名を擧げ得んか爲めに子弟を教練せんとするの欲望を獎勵す。

兄弟の關係も、西洋の如く無秩序的同等のものならず、幼は長に順ふの主義を以て倫理的に整頓せらる、是れ秩序及び安定を家族に與ふるのみならず、又眞正なる友情を啓發すへし。革新的精神の皮相的僻説あるにも係はらず、交互の義務を創造する所の多少の服従は、唯利己的競争と要求との間に衝突を醸す所の整頓なき同等よりは、眞正の愛情を生ずるに甚だ適切なるものとす。

支那文明の發達其者は暗々裏に家族に反動して、更に一層の強固完全を之に附與せり、蓋し社會か其永遠の進化に於て曾て眞に連續を破りたることなき事實の、必然なる影響に歸するなり。支那人にして如何に遠く祖先の連鎖に遡るも、彼は常に祖先に對して自然の同情を感ず

るなり故に祖先に對する尊敬は常に過去の考察に依りて益々強固となり、決して之か爲めに淺弱とならざるなり。西洋に於ては之に反し、社會的進化の連續往々斷絶せり例へば茲に一人の耶蘇教徒ありて遠く古代に遡らんには必ず其祖先にして神罰を受けたりと見做さるへからざるものを發見せん斯る場合に當りて彼か祖先に對するの尊敬心は如何にして能く深き整合を受くるを得んや祖先の誹謗を以て自ら基礎とする所の教は祖先崇敬の感情に對して悲むべきの影響をなさるへからず此を以て拜物教か多神教に傳へたる祖先及び墳墓の禮拜は一神教に依りて放擲せられぬ、コルネール大作に於て、ポリーンは邪宗徒として父の命を重んじ耶蘇教徒として彼女は

"A holy rebel 'gainst the laws of birth."

生れの法に背く
神聖なる叛徒

なる自身の語に従ふに至れり。

革新的運動は社會的連續の斷絶より生ずる深き倫理的弊害を、一層増大せり各時代か直に之を先きたつ所の時代を輕蔑誹謗するの社會に

夫婦の關係不完全あり

在りて孝道は如何にして繁榮すへきや。左れば西洋に於ては支那文明の連綿たる進化か鞏固にしたる彼の家族の神聖なる基礎を革新的状態の必然なる反動に依りて破壊し了れり。革新的耶蘇教徒の愚なる空想あるにも係はらず支那の家族は其孝友の點より視れば西洋に於ける家族よりも一層人間の常道に近かり故に是等の點に於ては模倣及び尊敬の價值あるものとす。

支那家族に於て割合に劣れる點は夫婦の關係に在る。社會的啓發の一夫一妻的段階は支那に於て唯不完全に達せられたり法律は唯一人の正妻を許すと雖も亦蓄妾の制あり。然れども茲に注目すべきは此蓄妾の制は其實唯富裕の人にのみ限り富裕の人にありても法律の許すか如く甚しく實行せざることなり。然るに西洋に於て特に活力の中心にありては毫も法律の制裁なき不規則なる蓄妾の習俗ありて支那政治か制裁を設くる所の正規の蓄妾法に代れり。然れども西洋(改新したる後)か其貪慾飽くなきの交際法を捨て、他日善良なる交際

を支那と結ぶに至らば、支那上流社會に一夫一妻の制を輸入して夫婦の關係を改良し、以て其幸福なる影響を感せしむるを得なん。西洋の家族特に若し證明し得へき宗教に依りて改新せられたらんに、はか真に優れる所は唯此點のみ、親子兄弟の關係に於ては、今日は特に其劣れること云ふを俟たず。實に支那人か其整頓せる社會を吾人に示して、西洋の道德改良をなし得る所多かるべく、吾人か工業製造の不明なる利益に依りて、彼等の睿智的物質的改良に資する所割合に少かるへし、特に此等工業製造の改良は、其生する所の道德上の影響に、益無頓着になり行く今日に於てをや。工業的進歩か、斯く其道德的及び社會的状態を輕視するの影響は、放逸なる自由主義か、如何に高聲に論争するども、開化人の模範として、實體的に甚た強き一種の獸類を造出せんとす。瞭然たる傾向を來せり。實に勞働社會に見るか如き此無慚なる工業的放恣の結果は、支那人か最も模倣するを厭ふ所のものなるへし、蓋し工業的放恣の影響は、勞働社會に於て最も著しく現出せり。

開化人の標本は一種の獸類とやらんとす

國典

今や吾人は最も廣き意義にて此社會の概算を試みん、而して先づ第一は其典禮より始めん。敬天に依りて法式的にせられたる拜物教は支那の國典なること、余か既に述べたる所なり。此國教に伴ふて偉人崇拜あり、否寧ろ其睿智的工業的又は倫理的なるを問はず、社會に功勞ある男女の法式的拜禮あり。此英傑崇拜は孔子祭即ち釋奠を第一とす。天地に次ぎて要用なるは孔子の禮拜なり、彼は支那にとりて著しき哲學者なり、吾人か此聖人の法式的評價をなすに至らば、吾人は彼か斯る尊信を來す所以を知る由あらん。左れば拜物的敬天を完成する所の英傑崇拜は支那の國教にして、能く此開化の真正なる精神を表し、制規の執行に依りて此精神を整合ならしむ、蓋し祖先禮拜を以て家制の基礎とするの人民間に、英傑崇尊式の生出するは自然の勢なり、一家の祖先に對する禮拜は社會の祖先にも及ぼさるゝなり。真正なる有機的開化の表章たる此過去に對する法式的尊敬は、拜物教より來る所の彼

の長者尊敬を維持啓發せり、而して此長者尊敬は他の社會の基礎と共に、次第に吾人の西洋無制度に依りて吸収調和せらる。斯の如く支那の國典に於ては、大は最大哲學者より小は各家の直接祖先に至る迄、都て社會の主要なる代表者の禮拜と共に、主要なる外界の現體、即ち天地山川の信仰を結合する所の均一なる連鎖を見る。特種の産物に著名なる諸省には各、特別の祠堂あり、例へば浙江省に於ては最始の蠶を祭る所の堂あり、何となれば此省に於ては逸古よりして養蠶法發達したればなり。

有司は國教の法師なり、天を祭るの大典は天子親ら之を行ふ。

然れども支那人は國教と共に道教佛道又は多少妄信的なる他の宗旨より借り來れる宗教の禮式を行へり。有司と雖も専ら正式の國教のみを守るにあらず、兼て佛徒若くは道士の拜禮式を修むるもの多し。然れども此等の式は決して支那の國典を變更せず、又之に入るゝを許さず、實際道佛を修むる人と雖も往々之を輕蔑す、而して佛教に至りて

神教は輕蔑すべからず

は之を信するの人民多きを以て、政府も已を得ず默視するなり。然れども真正なる支那政事家は、國教の神學的宗教に優ることを正しくも明知せり。余は茲に此點を明證する所の數語を引用せん。康熙帝曾て聖諭と稱する倫理上の格言を公にせしか、次帝は其臣に命じて其注釋を編輯せしめ、大に全國に流布せり、蓋し此題目に關する眞に特色の觀察を含蓄せり。

此注解者か特に切言せるは僞教にして、就中外國傳來の佛は其最も嫌惡せし所なり、彼は其基礎とする所の教條を論難し、其禮拜式を嘲笑せり。佛徒か題目を唱ふるを嘲りて曰く、

茲に人あらん、法を侵して法廷に出てたりと假想せよ、彼若し一生懸命となりて、南無阿彌陀佛を唱ふること千回ならん歟、法官は之か爲めに彼を赦すへきや。(レムサト氏の亞細亞雜記)

彼は實くも神道的宗教に屬する弱點を説明せり、曰く、
汝若し佛の爲めに紙を焼き物を供せさらん歟、彼は怒りて汝に罰を

下さん、然らば汝が慈善なる佛は卑劣なるものならずや。試に汝の地方官を見よ、汝實直にして業を勵む以上は、汝曾て彼に禮せず又彼を訪はさるも、彼は之に關せずして汝を保護すへし、然れども汝にして法を侵し暴を行ひ又は他を害せんか、百方彼に媚ふるも無用ならん、彼は必ず汝を罰すへきなり。

彼は又帝の意見に従ひて、左の如く加特力教を批評し、支那に於ける其位地を論せり、曰く、

常に天地及び無影無實の物を論ずる所の天主教も亦腐敗背理のものなり、然れども之を奉ずる所の西人は天文數理に通ずるを以て、政府は曆を校正せんか爲めに聘用するなり、決して其宗教の善良なるか爲めにあらず、彼等か汝に告ぐる所のものは毫も信するの要なし。」

真正なる學者社會か諸種の神道の宗教に關する意見は右の如し。

今や國教の如何を觀察したれば、此大帝國の組織を手短に略記せん。政治は天子の手中に凝集せり、彼は最上權を有せり、最後の手段に至り

ては凡そ百の裁斷盡く彼より出づ、然れども此最上權と雖も都て他の力の如く、遼古より定立せらる制規と輿論とに依りて制限せらる、此制規と輿論とは如何なる朝も長く破ること能はざるなり。此制限の例として余か既に詳説せる所の事實を記せよ、即ち天子の模範は家族に取れり、彼は民の父母なりと認められ、又自ら認むるなり、故に其權は斯の如き官能の義務によりて限られ、神道的模範の如く任意的に作用する神體の如きものならず、左れば君權は常に斯の如き概念の重量を負ひなから行はれ又受けらるゝなり。此他社會的前項の結果として、古代より創造せられたる慣例及び格式ありて、君權の施行を調和せり。天子は諸皇子中より其儲嗣を撰ひ、可及的神道政治にありて課せらるる所の彼の世襲的桎梏を避く。

支那に於ては世襲貴族なし。此社會的偉觀の理由は前講に於て説明せり。官吏は制規の試験に依りて萬民中より撰擧せらる。三段の試験ありて、殆ど我か得業生、學士及び博士に相當するの學位を授く。得

業生は省の試験を受けたるものに授け、學士は得業生中より、博士は學士中より撰拔す。有司は其最高のものと雖も必ず學士及び博士より採用す。左れば支那帝國は、制規の檢定を受けたる毫も世襲的ならざる一社會に依りて支配せらる。實際上には學位の授受に於て必ずや弊害あらん然れども全體より之を觀れば、此組織は四億以上の人民を統治して、能く最多數の物質的及び倫理的存在を安定し、其國利民福を計るの點に至りては、毫も他の宇内の諸國に譲らざるなり。

政を執るの社會は以上の如くに組織せられ又撰擢せらるゝなり。吾人は今より諸官職の分排配布如何を見ん。

此政治の頂上に於て議政及び太史の兩院軍機處及內閣をいふありて、政府の全機を統轄す。次に六局(即六部)を北京に置き、各其司る所の國務を管理せしむ、是れ實に中央の行政府にして、左に記するか如し。

一、內務局(即吏部)諸文官の進退黜陟を司る。

二、稅務局(即戶部)帝國の賦稅歲入に關するの事務を司る。

三、式部局(即禮部)宗廟社稷等の典禮を司る。

四、軍務局(即兵部)

五、刑務局(即刑部)

六、工務局(即工部)

各局皆會議に依りて事を執り、議長ありて之を總ふ、蓋し長は其同僚に諮るの必要あるを以て、歐洲の國務大臣の如き權なし、清朝にありては各局に二人の長を置けり、即ち一は滿州人一は支那人なり。

各局又數課に分かる、例へば稅務局には十四課あれども、式部局には唯四課あるか如し。

帝國の區分法は如何。支那本部は十八省に分かる。(臺灣を加ふれば十九省なり。)各省に大守(即巡撫又は時に總督を置く、蓋し總督は二省を兼ねるを常とす。各省の人口は既に前に擧げたり、其中には佛國と人口を均くするもあり。各省は又縣州郡都邑に別かる。大守は縣知事(即知府)の外に、稅刑鹽穀を司るの屬官を有せり。縣知事の下には州

官郡官等あり。

都邑は人民に依りて公撰せられたるの長及び参事會あり。余は此浩大なる行政の系統を詳述する能はず、余は唯土木の組織、鐵艦に備ふる倉庫の制、老若教育院、棄兒院等の設あるを云はんのみ。西洋にて良民の自負心を弄はんか爲めに、支那には殺兒制度ありとの卑劣なる讒謗を流布するものあれど、棄兒院の設立あるを知らば思ひ半に過くへし。

摘要

要するに、極東に浩大なる一國民あり、其性質は主として平和的、實業的なり、能く整頓せる試験法を経て、人民中より撰出せらるゝの一社會に依りて支配せらる、故に此社會を統轄するの君主ありと雖も、絶て世襲の貴族を見ず、此學者社會は次第に行政の一大系統を構造し、其下に四億の生靈は生存するなり、而して此人民は長き刻苦に依りて、其周圍の未開人を連合したり、蓋し此等の未開人は從來絶えず擾亂を來したるものなりしを以て、遂に其兵備を減省して、後來諸兵制の常の官能と

すへきもの即ち憲兵若くは警吏の官能に致すを得たり。

西洋の無制度的觸接か妨害壓倒せんといつゝあるは、實に此浩大なる社會なり。然れども西洋の爲めに眞に合理的なる政畧の原理を設定するに先きたり、余は先づ此大文明の最も法式的代表者たる孔子の評價を試みざるへからず。

第三篇 孔子及支那文明に於ける彼の影

響

前二篇の講義に於て、吾人は第一に支那文明の基本的精神を概論し、次に其形而下的發達の一般歴史を講究し、以て此大帝國の現狀につき、明確なる智識を得んと勉めたり。吾人は見き、支那帝國が進化法に依りて次第に自ら形づくりつゝあるを、而して其進化の法則は余が説明を試みたる所なりき。此哲學的支那文明説に於て余は簡單に其最も卓越なる哲學家の成績を述べたり、即ち此開化の變形的元素が建築せらるゝの基礎創立者の成績を述べたり。余は實に此開化に二箇の基本的元素あるを示せり、即ち一は帝室單主的政治を行へども、切迫の場合に於ては廢滅を免れざるもの、一は賢明なる學者社會之に依りて帝權が同時に變更調和せらるゝもの。

此大社會の法式的整合の爲めに基礎を置きたる所の人は孔子なりき。故に特別に此哲學者を研究するは必要のことなり、然れども之をなす

睿智上の境遇

に又他の功用あり、即ち吾人をして支那文明の神髓は彼に存せりとの正當なる判斷をなすを得せしめん、是れ吾人が今夕の講義の最始の部分を特に孔子事業の測量に委ぬる所以なり。

余は先づ孔子が起りたる當時の形勢を略説せん。斯くして吾人は知るを得ん、如何なる先項の重量の下に彼が働きたるかを、如何にして彼は過去に依りて創造せられたる境遇の基本的切要の機關なりしかを、然るときは彼が衝動せる開化の精神に如何に能く適合せるかを發見し、以て彼が作用の驚くべき力を理會するを得ん。孔子は實に、人間が其環象に對して最も深遠なる影響をなしたる所の一人なり。

吾人は先づ、孔子及び其門流の力が如何にして、道德特に實踐的、道德及び普通學、即ち形而下的社會學に傾かざるべからざりしやを説明せん。

支那文明は、吾人が既に示したる如く、主として拜物教的なり、而して此方に向ひて發達し來れり。此結果たるや、支那は抽象の社會的組織を缺きたり。夫れ抽象の組織は、人道の最大創造の一たり、而して先進者

たる國民の心理的進化は其勢力に依れり、西洋の高き睿智は皆此大組織の衝動に依りて働けり、彼等は其理由を知らずして自然に其力を感せり、何となれば、オーガスト・コムトが形而上學と形而下學との間に創立せる、獨斷的及び歴史的兩者の反對に依りて、此偉大なる社會學的現象の發明及び整頓は出來たればなり、蓋し社會的影響は猶天地的影響に於けるか如く、高尚なる睿智が其法則を發見する前、早く已に感知せらるゝものとす。

神道は相當の神に依りて種々特別なる現象を表し、以て抽象を齎し來れり、然るに支那には天然に神道の起らざりしを以て、深遠親密なる抽象的能力の作用あるべくもあらず、而して抽象は大なる科學的、美術的發達の必須なる條件にそある。

此眞理は科學に關して明瞭なり、抽象的科學の眞の科學はあらざるなり、種々特別の現象を研究してこそ、吾人は能く其法則を確定するを得べけれ、斯の如くして、數理學、物理學、化學、生物學及びオーガスト・コムト

の大創造なる社會學は、次第に西洋に起りたり。故に全く拜物教的なる支那は西洋に類する大科學的運動を示さざるのみか、印度の睿智的進歩にも及ばざるなり。

而して大美術的創造に於けるも亦同し、抽象は理想の主要なる基礎なり、理想は眞に高尚なる美術の出來得べき條件なり。夫れ抽象は、一方に於ては物體の性質中或るものを除却して理想を作り、一方に於ては物體より性質を分離して理想を描くを以て、變化の極端を概念するを得べし。支那は餘り正確に天真を寫出するを以て、美術の作物多しと雖も皆第二流のものたるを免れず、高尚偉大なる審美的創造に至りては、其詩歌的なるど成形的なるどを問はず曾て知らざる所なり。

斯の如く神道に疎く、隨ひて抽象法に疎き所の支那人は、純精なる科學及び高尚なる美術の發達に適せざるなり。

夫れ一大國民にして、文學及び哲學の偉大なる著述はなしなから、猶科學及び美術(眞に高尚なる)を産出せざりしは、往々吾人が奇異なりとす

る所なり、而して此奇異なる事實は前の如く説明するを得ん。斯の如き一般の境遇は、純粹なる抽象的思辨若くは偉大なる美術的創造は、神道的なる睿智を反撥せり。是れ此文明の全心理的進化を制する所の一の原本的普通事實なりとす。然れども社會的境遇も亦睿智と同一の方向を取りて、道徳的思辨特に實踐的倫理に傾き、理論的睿智を制して純精科學の事業を反撥せしめたり。余は既に示せり、支那文明の主要なる一特性は等級即ち族制の絶無にあるを、故に又僧侶即ち純粹に理論的なる等級なし、蓋し僧侶は其始めに當りて神道的保護を受けされば存立し得ざるを以てなり。此を以て富裕なる識者は其力を行政に委ねて自から社會實際の政治に従事することゝなれり。此社會的境遇に一致して純粹に理論的なる人々は、政治と直接の關係ある倫理的思辨に其心力を傾けざるを得ず。斯

の如く學者は此一雙の勢力に驅られて全く倫理學に従事せり。倫理學又は道徳學の全く之に適するは亦注意すべきことなり、倫理は同時に技術と科學なるを以て、理論的社會の爲めに理論實際兩者間の通路を成せり。其基礎は最も高尚なる論理に觸接す、何となれば倫理學は必ず人性の智識を基とせざるを得ず、而して人性の智識は又真正なる科學的概念の全體を根據とせざるへからざればなり、其極點に達するや倫理學は直接に實際的となるなり、何となれば人は人性の統御を組織すればなり。倫理學は其基礎より云へば、理論的なり、其直接の命數より云へば、實際的なり。必竟するに強き睿智は、斯の如き研究に依りて其眞の心理的傾向を満足し、同時に實際の活用を目的としつゝ、其周圍の影響と一致す。

去れば此總結結果こそ、孔子の大業を喚起し、又大業の路を開きたる原本的境遇なりき、此事業や老佛の普及より起りたる至大の妨害ありしにも係はらず、嘆美すべきの成功をなしたりき。彼の構成的奮勵は支那

文明の真正なる進化的流潮に合一したればこそ、彼の如く浩大なる效驗はありしなれ、何となれば孔子の整齊は倫理的、政治的、整齊にして、斯の如き境遇か真正なる識者に課せし所の理説の一種なりしを以てなり。

然れども孔子の生れたる當時の特別なる形勢は、更に其哲學に高き直接の目的を附與したり。

孔子か世に出てたる時に吾人か既に論究したる所の文明は、黄河沿岸及び山東省の如き黄河近傍の地方に建立せらるゝ所の數多の小王國に同時に存在せしなり。

此等の小王國に流布せる開化の其源を二にする事は、支那文明を建設したる家族を多少避くへからざるの變化と共に連續する所の周朝に臣事する多くは有名無實にて明なり。又此等諸國の間には絶えず戰爭ありき、吾人は茲に二重の事實を見る、即ち政治的分解と共存する文明の真正なる等一辭を變へて云へば、多少獨立にして絶えず鬭争する

の數國に於て共存する所の等一なる社會の狀態之れなり。斯る形勢は、偉人傑士をして此擾亂を止め、習俗慣習相同きも猶互に衝突する所の人民間に統一及び秩序を恢復せんと欲するの念を起さしむるや明けし。此事業の成績如何は此官能に當らんとする機關の種類に因れり、开は兎も角茲に志士の奮起を要する所の境遇はありしなり、而して此大任にこそ孔子は其一身を委ねたれ。彼は實に支那文明の全先例を唯多少抽象的に法式的にしたる所の徳教の名を以て、此等數王國の君相に作用せんとしたりき。是れ彼か解釋せんと欲したる大問題なりき、而して彼は之を解釋せり。然る後彼は實際に其倫理的及び政治的教義を説き、人君をして其戰爭の永久無制度及び其不十分なる内治の無秩序を止めしめんと勉めたり。彼は斯の如く諸國共通の先例に従ひ、平和的産業的文明に益、勢力を興ふるを目的とせり。

諸君余は此大事業の性質は如何なるものなりしや、如何に境遇か之を喚起せるや、如何に先例の總計か其爲めに準備をなせしやを指示した

るを以て、括言すれば此大業の必要なる標準を明示したるを以て、次に彼の國の全社會的命運か、斯の如き官能を一任したる所の機關に依りて、如何に此事業か成し遂げられたるかを見ん。

孔子は紀元前五五一年今の山東省の一部分なる小王國魯に生まれ、齡七十三にして其生地に死せり、彼の父は魯國昌平郷の小邑なる陬の長なりき。彼は早く父を失ひ、賢き慈母に依りて養成せられぬ。彼は周密なる教育を受け、少年の時より此氣高き人物の特性なる智、禮、誠三者の結合を備へたり。十七歳の時彼は母の意に従ひ、穀物市を監督するの小吏(委吏)となり、其職に精勵して、常に彼か生涯の主義なりける公益を計りき。十九歳の時母の命に依りて妻を娶り、三十一歳にして少く位地を進み、牧畜の監督(司職)の吏となり、彼か欲する所に従ひて此業を改良するを得たり。彼の官吏的事業の恰も華かんとする時に當りて母を失へり、其年二十四なり、是に於てか彼は舊禮に従ひ、且つ之を鞏固にし之を啓發せんと欲し、職を罷りて三年の喪を行へり、此三年の

星霜は彼か立派に利用せんと心掛けたる所にして、彼か救世の大目的を明に思ひ定めたるは、實に此時なりき。此成績多かりける三年の閉居間に、彼は其事業の方案を規畫し、倫理政治に關する支那の古典を闡攻し、其大志を成すに必要なりける考慮を費せり。喪終りて諸國を周遊し、以て其學問に最後の琢磨を與へたり、彼は彼の教を施さんと欲したる諸國を觀察し、深く其智識を得、蓋し彼の教は支那文明の傳説及び傾向を哲學上より法式的になしたるものに外ならず。爾後二十年間、彼は諸國を周遊し、弟子を集め、君主士大夫の諮問を受け、絶えず彼等に説くに、父母的倫理的平和的の政を施さんことを以てせり。ペールア・ミオット氏か云へる如く、孔子の教化は當時支那文明の根源たる黄河沿岸の地以外に出てさうしや明なり。デ・ボーシエール氏著の支那に曰く、

北は直隸の界を踰ぬす、南は江河を渡らす、東は山東を出てす、西は陝西に限れり。

孔子魯に歸り、定公の聘に應じて仕ふ、年五十一にして中都の宰となり、尋て司空となり、又大司寇となり、五十六にて相の事を罷行す、斯の如く、彼は倫理及び歴史の研究に政事的生活を結合せり、之れ其學派となりし所なり、實に實踐と理論との此結合は、支那文明の變形的元素を法式的にする必要の方法に外ならざりき。彼が相の事を行ふや、果斷勇決を以て少正卯を誅せり。彼は其職を盡くすに當りて、固り仁を旨とすと雖も、常に之に和するに勇を以てせり、蓋し勇なければ仁を誤施するを免れず。支那歴史家は謹んで彼が施政の詳細を記存す、而して彼の事業の外、彼の徒弟も亦同時に諸國の官吏となり、又は師の布教を贊助したるの事跡を録するを見る。定公死するに及び、彼は再び退きて魯を去り、多少の弟子を從へて哲學的社會的漫遊に出でたり。十四年を経て更に魯に歸り、復た仕を求めず、全く其餘年を教義の完成と弟子の熏陶に委ねたり。弟子の數も亦大に増加し、諸國散在して道を布くもの少しとせず。年六十六にして妻を失ひ、尋て子を失ひ、遂に其親族に

して而かも愛重せる弟子顔回を失ひぬ、蓋し顔回は彼が仁を得たりと稱せし所なりき。大救世家の晩年は斯くも悲きものなりけり。死に先きたつ少時、彼は其高弟を集めて彼の道及び其應用に關する遺言をなせり、彼は曰く、

凋める艸は今や全く枯れぬ、天下到る所我を容るゝの地なし、明教地に墮ちて更に人の知るなし、余や汲々として之を恢復し、其力を再創せんと勉めたり、而して成すを得ざりき、余が死せる後誰か進んで此慘憺なる事業に當るものぞ。

彼の弟子は禮を厚くして彼を葬り、毎年其墓に參拜するの慣例を残せり。

彼の學派は榮々ぬ、彼の影響は増しぬ、而して名譽は次第に彼が身後に照らし來りぬ、嗚呼人間か誇張し得る最も高き人物、最も強く支那文明に影響せる人、數億萬の人類の命運を支配したる偉人。孔子崇拜は漢の世に始まり、支那の諸都府には次第に聖廟を設立し、宋に至りて始め

て釋尊の制を設く。漢に於て彼に公爵を贈り、唐に於て彼を大聖と呼び、後に宣公と諡し、天子の衣冠を以て其像を被ひぬ。明朝に至りて更に大聖大智大徳等と呼びたり。彼等の子孫は支那社會に無比なる世襲貴族の爵號を受け、現に今猶存せり。

此大傑士の事跡要するに斯の如し、吾人は進んで彼が事業の價值を評論せん。

孔子の著述

嚴格に云へば孔子には殆ど著述なし、舊傳禮記等の古典を編纂せる外、彼は魯の年記なる春秋を作り、論語等の四書は其弟子の編輯に係る。四書は孝經大學中庸及論語なり。始めの二書は孔子の直弟子曾子の傳ふる所なり。曾子は其師と同一魯人にして武南邑に生まる、其齡孔子より少きこと四十六年。

中庸は孔子の孫子思の編する所なり。孔子の死せる時子思は其年三十七なりき。論語は其徒弟の編輯に係る。

吾人は支那大聖人の哲學的及び倫理的系統の如何を見んか爲め、前記の書中より多少の抜萃を試むべし。

孔子の道

大學は孔子の論旨と曾子の説明より成れり。此小冊子は數多の支那學者が注釋を下せし所なり、就中宋の朱熹最も著る。大學に於ては道徳完成の原本的問題を美妙に説けり。

大學の道は、明德をして益明ならしむるに在り、民愛を得るに在り、即ち在親民、至善に止まるに在り。天子より庶人に至るまで唯一の務あるのみ、即ち身を修むるを以て本とす。

茲に吾人は此最上問題の簡明に述べらるるを見る、各個人の道徳完成こそ目的の標準なれ。倫理哲學の目的は此修身の法を形成體制するにあり。孔子が問題を解釋するの心理的境遇を概念すること、左の如し、物には本末あり、事には終始あり、先後する所を知れば、則ち道に近からん。

汝が爲すべき第一の事は目的を知るに在り、然る後に決定せよ、決せ

る後は一意誠心なれ、一意誠心にして後心平ならん、心平にして後に考慮するを得ん、考慮して以て汝の目的を達するを得ん。(先致其知、致知在格物、物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后心正、心正而后身修、云々を譯したるものならん。

故に孔子は毫も神異的に訴へずして、人間の命運問題を簡明なる語にて式表せり、即ち唯人間の睿智のみに藉りて、倫理的完成圓滿に達すへき條件及び手段を表出せり。曾子の注釋は此等の原本的觀念を祖述し、之を支那の古史及び口碑と結合して、以て社會的連續を維持固定せんと欲し、然るに他の救世家は從來其革新的精神と方法とを以て社會的連續を破るを常とせり。曾子は大學の道を例證して云へり、

至善に達せんとする文王の勵精は、如何に深く堅忍不拔なりしと、人の君となりては仁ならんを欲し、人の臣となりては敬ならんを欲し、人の子となりては孝ならんを欲し、人の父となりては慈ならんを欲し、國人と交りては信ならんを欲したり、穆々文王、於緝熙敬止、云々の

譯

と茲に吾人は人間存在の最上目的たる此倫理的圓滿の何に在るやを見る、即ち人間の自然の諸關係を仁、敬、孝、慈、信の五者にて支配せんとするを見る。

倫理的圓滿の状態に關する孔子の概念は中庸に明なり。四書中最も法式的なる此書に於て、曾子は心理的狀態を説き且つ倫理的等合を述べたり、此状態と等合は如何なる變化錯迷に遭ふも、必ず之に向ひて歸依すべきものにて、社會の政教を司る聖人にあらざれば達し得ざる所のものなり。

吾人は先づ倫理的圓滿の理想に達したる人間、即ち聖人といへる孔子の概念は如何なるものなるかを見ん。余は中庸より其一節を直譯せん。

唯天下の至誠、聖のみ能く其性を盡すこと、爲す能く其性を盡せば、則ち能く人の性を盡す能く人の性を盡せば、則ち物の性を盡す能く

物の性を盡せば、則ち以て天地の化育を賛く可し、以て天地の化育を賛く可ければ、則ち以て天地と參なるべし。

至聖に亞くは學に依りて其性の汚點を除きたる人なり。(其次致曲、曲能有誠の一節を譯したるもの歟。

然れば完全なる人は倫理的傾向に誘はれて、有機無機兩體の天則の智識に依りて、正しく自然の秩序を變化し、以て其法式的なる媒介に依り、之をして益、完全ならしむるの方に達したるものなり。孔子は斯の如く彼の變化力(即ち化育力)に對する高尚の理想を書き、之を天地の中間に位する第三の支配者とせり。茲に恰も人間の常態に關する豫考とも云ふべきものを見る、蓋し常態とは如何なるものぞ、即ち社會的感情の衝動に依りて、自然の秩序を活潑地に完成するの狀態なり。孔子は天地の活力の通法を認めて、自然に存在する事物の順序を化育せんとする人力の基礎なりとせり。

吾人は觀る、孔子は拜物的敬天的文明を完成するに於て、其政治的倫理

倫理的秩序は自然

に基づけり

的法式の爲めに、天地の通法中より秩序の模範を借り來り、利己心を制する社會的感情に訴へて、之を人生に施さんとしたるを、蓋し外界の觀察により來る秩序の模範を人間に實行せんとするには、此社會的感情の勢力を手段とするの外あらざるなり。孔子が其秩序の模範を作りしは、宇宙の天則を拜物的に觀察したるの衝動に依りしこと、之を四書に徴するも實に明瞭なりとす。子思曰く、

仲尼は堯舜を祖述し、文武を憲章す、上天時に律り、下、水土に襲る、譬へは天地の持載せざるなく覆構せざるなきか如し、譬へは四時の錯に行はるゝか如く、日月の代る明なるか如し、萬物並ひ育せられて而して相害せず、道並ひ行はれて而して相悖らず、小徳は川流し、大徳は教化す、此れ天地の大となす所以なり。

斯の如く秩序の模範と出來得べき化育の起點及び境遇とを同時供給するものは、外界の秩序なりとす。然れども此化育的作用は、唯倫理的方案の指導に依りてのみ行はるゝを得べく、又行はるゝへからず。吾

人は余か先きに唯其原理即ち私慾を制する社交心の勢力のみを述べたる彼の倫理的系統の概狀を較、詳に吟味せん。中庸に曰く、天下の達道五之を行ふ所以のもの三、曰く君臣なり、父子なり、夫婦なり、昆弟なり、朋友の交なり、此五者は天下の達道なり、智、仁、勇の三者は天下の達徳なり、之を行ふ所以のものは一なり。

朱熹は中庸に注して曰く、此書の要旨を按ずるに、智、仁、勇の三徳は普通至要にして、衆人の蹈むべき正路に至るの門なりと。然れば孔子の定説は智、仁、勇の三徳を以て、彼の倫理的圓滿一身を擧げて衆人の公益を計る所の(に)達する必要の能力とするものなりと認むるを得ん。此概念に隨ひて孔子が世の爲めに一身を委ぬる政治家を描きたる理想的肖像あり。

凡そ天下國家を治むるに九經あり、曰く身を脩む、賢を尊ぶ、親を親む、大臣を敬す、群臣を體す、庶民を子とす、百工を來たす、遠人を柔んす、諸侯を懷く、身を脩むれば則ち道立つ、賢を尊へば則ち惑はず、親を親め

ば則ち諸父昆弟怨みず、大臣を敬すれば則ち眩はず、群臣を體すれば則ち士の報禮重し、庶民を子とすれば則ち百姓勸む、百工を來たせば財用足る、遠人を柔んすれば則ち四方之に歸す、諸侯を懷くれば則ち天下之を畏る、……

此道徳の系統を立つるの外孔子は支那文明の古記録を序述校訂して以て其畢生の大事業を進促せり。其成績は支那の經典たる易、書、禮、詩の四經にして、魯の年記なる自作の春秋を加へて、第五の經典とせり。詩經は三百篇以上の古詩を編輯したるものにて、其中數篇は商の世紀元前千七百六十六年乃至千二百二三年に遡るもあり、然れども其他は周の始め(紀元前第十二世紀)より孔子前一二代の間に跨れり。禮記は政府百官の制度及び職務と冠婚喪祭に關する格言及び典禮を記したるものにて、其載する所古代の記録頗る多し、然れども今日見る所の形となりしは、孔子を去る數百年の後漢の世にありしなり。易經は支那文明の最も古き紀念にして、其梗概左の如し。先づ國民の

始祖と稱する伏羲の八卦なり、此八卦は更に交錯結合して六十四卦を生ず、又每卦を説明せる經あり、周の文王の作る所と傳ふ、蓋し王は古代よりの口碑に據りしものか、此外に易の眞意を傳ふるものなし。文王の子周公は更に多少附加する所あり、而して孔子は以上の三聖を基として、一層浩瀚なる傳を編したり。後世陸續として此經の注釋を作る者あれども、其意味漠乎として分明ならざるか爲め、其研究に幾多の學者を苦めたるや知るへからず。易經に分明なる一事あり、數を以て人生を説明調和せんとする之れなり、他の古文明亦皆此傾向あり。拜物教の盛なる時代に創立せられたる記數法は人間最始の科學的組織なり、而して他の諸總念を驅りて皆此最始の積極的總念に歸せしめんとする自然の傾向あり。此を以て吾人か屢見る所の數の勢力に關する哲理説は起るなれ、而して其應用に至り往々誣謗の弊あるにも係はらず、今日通常に假定せらるゝよりは多くの社會的、心理的眞理を包含するものなりとす。

四經中最も緊要なるは書經にして、支那の古代に關し最も興味ある歴史の記事を載せたり、即ち上は堯舜紀元前二千四百年餘より下は紀元前七百九十年に跨れり。識者は云ふ、支那の信據すべき歴史は耶蘇前二十四世紀以上に出てすと、實に此より以前は蕪乎として考ふへからず。左れば孔子は其國民の倫理を統合するの直接事業の外に、又其原本的古史を校訂せり、假令之を輯集せざりしとすも、而して彼れ自ら古史を傳ふるを以て任したるや宜なり、何となれば彼の教も亦必竟するに、一層完全なる形となして古史を後世に傳へたるものにて、更に之を誹謗排斥したることなればなり。今や吾人は孔子の事業を總計して、歴史に於ける彼か人物及び位地を評價するを得ん。

吾人は第一に見る、此大哲學者は古例及び口碑を概括して一の基礎を作り、其上に屹立して、斷乎として、動かす、以て偉大なる倫理的、社會的啓發を致さんとしたるを。彼の耶蘇教か明確なる科學的理論に依りて、

其因りて以て起りたる過去の事跡を誠實に表示すべき能力を缺乏するが爲め自ら人為的史譚を構造したる所の任意的臆説の如き比にあらざるなり。支那哲學者は眞率に公明に支那文明の先例の全連鎖を立脚點としつゝ其法式的發達を進促しつゝあるなり。是れ常に過去の構造に基きて現在の構造を設立する正當常式の哲學的模範にして能く眞正なる科學的精神に適するものと云ふへし。之に反して西洋人は耶蘇教的革命的衝動に依りて毫も社會的連續を顧みざるの傾向あるは背理にも亦不道德なりと云はざるべからず。

孔子は支那文明の根本たる敬天的拜物教に於て彼の起點を發見せり。十分に此敬天的拜物教を容れつゝ深く之に基くの典禮を尊ひつゝ、彼は此拜物教の一變遷に着手し、後世彼の志を繼きたるものをして之を完成せしめんと欲しぬ、彼は着手の始に於て先づ活動と生命とを區別せんと勉めたり。拜物教は萬物を以て管に活動するのみならず、之れ科學上正確なりとす、又生存するものと考へたり、之れ唯萬物中或る物

のみに限る所なり。孔子は明に天地の意志よりも寧ろ此至強なる現體の動作(即ち法則)に注意せり、故に運は天の命として概念せらるゝも、此命や寧ろ天意にあらずして、天則より生ずる所の數を云ふこと、はなりぬ、而して孔子の此概念たるや、社會の諸現像を以て天象の法則に支配せらるゝものと看做すことに依りて、最濶の概括を之に與へたるを以て益、緊要なり。或る度迄は彼等は疑もなく然りとす、星學的形勢は社會的形勢に影響せん、然れども始め假想せられたるか如き正確なるものにはあらず。此を以て吾人は後世に至りて見る、孔子派の學者か、萬物皆活動す然れども皆生あるものならずとの信仰あるか爲めに、自然に思想の科學的段階に向ひて進みたるを、此信仰や物質に活動なしとする神學家及び形而上學者の意見より道理あるものなり。敬天より起れる基礎の上に孔子は其道德の系統を建立せり、彼は天象か實に善く提起せる所の秩序及び従順の總念を拜物教に借れり、彼は

其事業の浩大なる政治的倫理的命運を十分に知覺しつゝ、彼が道德の系統を此基礎に安置せり、彼の目的は實踐的道德にして、人生の種々の關係に切要なる義務を明示し、社會的感情が私慾を制する彼の精神的統一の状態即ち人間の主要なる目的に常に着眼せり、而して彼が此問題を解釋したるの方法は、子の孝と親の慈を基とする家族の制度に非常の重きを置きしにあり。

孔子の道德系の概要斯の如し。諸君が見るか如く毫も神異の痕跡を留めず、之れ神學的精神の絶無なるを、敬天的拜物教の永存せるに因れること、余が既に第一篇の講義に述べたる所なり。

神異の信仰の絶無なることに關して有名なる學者アベル・レムサト氏は云へり、孔子の道德系統は、制裁の點に於て、缺くる所ありと、嗚呼之れ何の言そや、氏の如き識者と雖も全く神學的形而上學的偏見に誘惑せられて、此制裁の絶無こそ、恰も孔子の教に、真如と偉大とを與へたるものなるを見ること能はざりしなり、神異の制裁、常に利己的私慾的なる

もの(の)缺乏こそ益、孔子の性善説をして著明ならしむるものなれ、孔子は人性の自然に倫理的なるを認めたり、制裁は恰も其善なるか爲めに善をなすの幸福なるに存せり、他に對する熱心に衝動せられて、高尚なる思想に開發せられて、真正なる賢者か其理想として修むる所の彼の圓滿なる状態に達すること其制裁なれ。神學的形而上學的概念は此點に於て人性に對する眞總念を鄙賤にするの媒となれり、特に僧侶の實踐的智識か其宗旨固有の缺點を補ふ能はざる以來に於て然りとす。政治上より觀れば孔子の教が次第に發達し行くの影響は、支那文明を化成する學者社會の組織を鞏固にし、此社會の作用を確定完成し、其勢力に永續増大するの效能を與へたり。

一大社會的改良を爲し遂げんかため、法式的に又活潑地に其一生を委ねたる聖人の成績は、概畧前に述べたるか如し。

西洋文明は睿智又は活力に關して此支那哲學者に優りたる模範を吾人に示し得るや疑ふへからず、アリストトール及ひアキミデイスは

一段高等の智者なりき、シーザルは無比の能力を有する政治家なりき、然れども吾人は斷言するを得ん、堅忍不拔の心を以て救世に致せ、汲々たりし活力に加ふるに、明智及び道徳を兼有すること、孔子の如き模範に至りては、曾て一人も西洋か出たさ、いしを。彼は其教を支持する爲めに毫も妄信的獨斷を採らず、人間の最上目的は倫理の完成にして、斷せず社會の爲めに熱心從事するに在り、と主張せり、彼は社會の基礎を改良せんと勉めたるも、其作用せんと欲したる支那文明の先例古格を更に破りたることなし、而して斯の如き刻苦の生涯に對する制裁は、人の道を致したりとす深き感情にありと觀念せり。實に斯の如き模範を講究せんこと、西洋人に取らば有用なる故とならん、彼等は之よりして耶蘇教徒及び革命的學者か其背反忘恩の心を以て常に信する所のものと、甚た異なる所のものを學ぶを得へし、即ち彼等は祖先に負かすして社會の進歩を退ひ行くの善良なるを學ぶを得ん、若し夫れ巧に先達の保護に依頼し、祖先の事業に公正なる判斷

を下し得るに至らば、吾人か社會の改良を計るの功果、益、善良なるを得へく、益、人間の本分を盡したりと云ふを得ん。然る時には西洋は益、進歩改良して、彼の浩大なる古帝國か救世家の最上なりと稱する此有名なる哲學者の價值を知り、遂には彼等か尊信する聖哲の中に其位地を與ふるに至らん。今や吾人は孔子の教の價值を評定し、人間の智識の齊一に對する其關係を吟味せん。

孔教の缺點

孔子の理論は要するに人性を正に導くを直接の目的とする倫理の實驗的格式なり、乃ち斯の如き格式の、浩大なる缺點は、支那文明其者の缺點なり、再言すれば倫理の格式的基礎を作り、外界及び人間其者に對して變化作用をなすに十分なる力を供給すへき抽象的科學の發達なきなり、何となれば變化をなすへき能力は全く抽象的規則の智識に依ればなり、唯諸現象の抽象的規則か明瞭に確定せられたる時のみ、彼等に對して強烈にして而かも整頓せる變化作用の程次を組織するを得へ

し。
 孔子の法式か如何に驚くべき瑣瑣を呈するかを示さんか爲め、余はオ
 ーガスト・コムトが抽象的科學の全體を凝縮したる彼の百科類典的連
 鎖と照應せん。此排置法に於ては諸科學の順序左の如し、
 數學、星學、物理、化學、生物學、社會學、道德學。
 此心理的進化の大團圓たる倫理學は二箇の特別なる部分より成れり、
 第一は理論的倫理にして人性の智識に關す、第二は實踐的倫理にして
 人性の管理に關す。理論より實際に遷るの經過は此第二の部分にて
 成し遂げらる、而して究竟は單純なる理論家なく、唯實踐家或は事物に
 従事し或は人間に従事するのみありと云ふを正當とせん、然れども此
 種の作用は其性質必ず法式的なるを以て、之に關する所の人を名づけ
 て理論的社會と呼ぶに至れり。
 此照應は支那文明の天眞より生ずる孔教の深き缺點を示すに十分な
 らん。孔子の教法は、數學より始めて次第に道德に登る所の彼の長さ

如何にして缺點を
 補ふべきや

抽象的發達を缺けり、此順序を踏まされは人性に對する眞正深遠なる
 理説を創立すへからざるなり、然れども此理論上の缺點は又實際上の
 缺點となる、即ち人性の指導に於て言ふへからざるの不十分を來さん、
 何となれば數理的現象より社會的現象に至る迄、都て人間に影響する
 諸現象を司る所の抽象的法則につきて着實なる智識を有するにあら
 ざれば、社交的動物なる人間を十分に善く支配すること能はされはな
 り。然るに支那後來の進化は此缺點を補充するを得ざりき、之れ支那
 文明の天眞として自然なる抽象の組織に無感覺にして、爲めに必要な
 科學的發達に適せざるに依れり、故に孔子派の學者かなしたる哲學
 的事業は或る點に於ける發達と注釋的著作とに外なる能はざりき。
 吾人か斯くなしたる分析は、孔子の大實驗的教法に於て心理上又社會
 上深く不十分なる所あるを示すへし、然れども之と同時に西洋か如何
 にして其最も著しき機關に依りて、斯る文明に作用し得るかを示せり。
 西洋の科學は孔子かなしたる如く倫理の最上なるを認めつゝ、支那文

明を支配するの人をして、其鞏固と維持を計らんか爲め、遂に人性を十分に制御し得るか如き基礎を輸入するの必要を覺らしむるを得ん、而して倫理を最上とする此共同の基礎を有するの外、絶えず親密に成り行く西洋及び支那の交際は、此大帝國の學者をして社會學の必要を感せしめ、西洋と支那の如く非常に異なる所の社會の狀態を正當に評價するを得せしめん、斯く社會學の必要を感したる以上は、又次第に生物學の緊要なるを認め、遂に化學的、物理的、星學的、數理的、現像の相互の關係より生ずる彼の分離すへからざる連鎖の各鏈環に及ぶに至らん。此結果たるや支那哲學者は、人類心理的状態の主要なる基礎たる抽象的科學の大教法を法式的に研究するに至らん。實驗哲學は支那の自然進化を認識して、以て其心理的状態の完全なる革新を來たすへし、而して若し其系統中に拜物教を同化し、支那國典の精神を採用するに至らば、其革新の功益、善良著大ならん。

吾人は孔子の徒より出てたる主なる著述、否寧ろ此等の著述の特色なる普通の精神を見ん。吾人か見んと欲するは支那哲學及び科學の詳なる歴史にあらず、开は浩大なる題目にして茲に左程趣あるものならず、吾人にとりて必要なるは其主要なる性質に在る。支那歴史家の研究は材料多かるへし、然れども之に關せる浩瀚なる著述は既に出版せられ、歴史哲學の通法に従ひて此心理的發達の明確なる科學的理論を構造するに十分なり。三種の著述は孔子の徒より出づ、皆支那文明の特色を備へたり。第一倫理書、孔子の教を布延したるもの、第二物理上の著述、活動の觀念と生命の觀念とを區別して以て敬天的拜物教を改變し、孔子か敷きたる基礎の上に建築せるもの、第三文學統系等に關する著述、即ち形而下社會學の著述。蓋し第三種の著述は其實觀察を編輯したるものなれば、社會學に關する純粹の科學的著述をなすの材料たるへし、支那文明は到底形而下的精神のものなれば、斯の如き豫備的の著述以上に進むを得ざりき。

吾人は先づ倫理學の著述を瞥見せん。

此等の著述は皆孔子に於ける註釋疏義に外ならず、彼等は此大哲學者の實驗的教法の式を説明啓發せるものにて、更に其原本的精神及び相貌を改めざるなり。對策及第法は四書五經の研究を基とするものなれば、自然此註釋者の浩大なる文學を出たさしむるの刺戟となれり。孔子が開きたる道を進み來りし主なる哲學者は孟子なり。孟子は紀元前第四世紀今の山東省に生まれ、紀元前三百十四年に死せり。支那人の說に依れば彼の位地は恰も孔子に亞けり。國典を以て孟子を祭ること猶孔子に於けるか如し、而して人民の尊信は常に孔子と相伴へり。孟子は孔子の教に於て一種特別なる改良を加へたり、其芽萌は元來孔子に存するものなれども、彼は合同の中心たる帝室の廢滅か時に必要となるの事情を明示せり、彼は斷定すらく、帝家にして其基本的官能を致す能はざるに至らば除却せられざるへからず、天子にして其位地に附隨する倫理的社會的義務を盡す能はざる時は君主たるの權を失ふものとす、彼が依りて以て支配する所の天の命は彼より撤回せら

るゝなりと。斯の如く孟子に於ては帝權の專横又は不秩序に直接に反對するの精神あり、支那文明の統一維持及び擴張の元素として至要なるには相違なければ、時に社會の中央機官を變更するの必要あり、此必要を孟子は十分に直接に論じたりき。斯の如き精神の如何に遠く神道より生ずる絶對的服従と離隔せるやを見ること容易ならん。孔子の註釋者夥多ある中に特に朱熹を記せざるへからず。朱熹は十三世紀の末宋の世に生まる、其註釋は常に原書と共に刊行せられ、明論卓説頗る多し、蓋し支那註釋家にして其心の老佛に依りて軟弱にならざるものは大抵皆然りとす。四書等の註釋は今日に至るも猶試みるものありて、天子の中にも手を下したるもの少しとせず。孔子は活動と生命とを區別せり、此區別よりして拜物教と科學との中間なる一種の物理學は起れり。朱熹は一種の原子哲學を創立し、物體に於ける活動と生命との分別を説明せり。現象は拜物教に於けるか如く、之を現す所の現體の意志より出づるものならず、彼等は唯此等の

一六八
現體の活動法の種類より出づるなり。彼は斯の如く此等各現體の特別なる活動に依りて種々の現象の生ずるを認めたり、蓋し此特別なる活動の發現は天の至強なる活動に依りて調和せらるゝなり。是れ支那太初の敬天的拜物教を改變せるものにて、他の現象を制する天象に正當の勢力を附與するを以て、此概念の長所とす。彼は進んで誇張する所はあれど、此勢力を社會的現象に及ぼし、社會の進化は天の運動に係ありとせり、蓋し動物植物及人間の存在か、宇宙の法則中最も普通なる天の運動に依りて強く支配せらるゝ事は、何人も疑はざる所なり。』斯の如く此哲學に於ては、現體以外に在りて隨意に現象を生ずる所の神異的物の總念は絶無なり、萬事皆現體其者の自然活動に依りて説明せらる、其概念たるや眞の科學に頗る接近するものにて、其缺く所は唯科學的抽象の組織なりとす。必竟眞の科學的系統とは何より成るものなるや、諸現體の自然活動を認定し、各現體が發表する所に隨ひて其種々の活動に關する形而下的法則を研究するに外ならざるな

り。
支那人は又博物の著述に富めり、即ち種々の現體に關する觀察の編輯に富めり、然れども此等の書は其甚だ詳密なるにも係はらず、主に形而下的にして餘り實用の臭氣を帯へり、故に一として生物學上の法則に及ぶ所なし。氣象學的觀察も亦多く蒐輯せられたり。天文も亦同様にして、其觀察夥多詳明なるものありと雖も、皆純粹に形而下的に屬せり。其不完全なる理論は皆回々教徒及び耶穌教徒より傳來せるものなり。

要するに天文生物の研究は其形而下的觀察に於て非常の發達をなし、夥多貴重なる著述ありと雖も、眞正なる抽象的科學に至りては一も見るべきものなし。

支那文明の避くへからざる結果たる此相貌は、社會的現象に關するも亦同し、支那に於て吾人は嘆美すべき形而下的社會學の著述を見る。

孔子は歴史的講究に注意せり、彼は古典を校訂せるの外魯の歴史即ち

春秋を編纂せり。支那に強烈なる連續の感情も亦歴史上の研究に一層の熱心と附加せり、而して支那學者の著述に特色なる彼の嚴格精密は神異的信仰を有せざる所の眞に實驗的なる精神に因るものにして放浪なる奇話怪談の存するものは多く老佛より出づるものとす、孔子曰はすや、怪力亂神は語らずと。

孔門の記者は耐忍嚴正なる歴史的研究の此道を蹈み行けり、其著述は皆に支那本部を論するのみならず、貿易上又は政治上の關係ある周圍の諸國にも及へり、吾人は支那歴史家の此富饒なる鑛山に於て、韃靼人の地理歴史に關する正確信據すべきの智識を掘採せざるを得ず。余は支那文學の浩大なる著述につき、其摘要すらも茲に述ふる能はず、又述ふるを要せざるなり、余は標本として又前述の論旨を明にせんか爲め、唯二箇の模範を掲載せん。

支那學者中最も著明なる一人は歴史の父又は支那のヘロドタスと呼ばれたる司馬遷なり。彼は紀元前百六十三年河南に生まる、西漢の世

司馬遷

なり、即ち一方には秦始皇の過劇なる政畧の結果を利用し、一方には支那古代の風を追ふて其文明を建設せんとする再造時代なりき。

彼の父は朝廷の史官にて、其子をも歴史記者となさんと欲し、其目的にて彼を教育せり、彼も亦幼より其才學を示し、後來多望なる少年なりき。後兵に將として今雲南及び四川と稱する地方に行きしか、路にて父司馬遷の病篤しと聞き、家に歸りて僅に其遺言を聞くを得たり。

司馬遷は死に臨むも猶其職を忘れざりき、彼は父として又歴史家として子の遠征に興味を抱けり、彼は詳に其委曲を尋ね、聞き了りて其子に遺言せり。司馬遷は父の語を記して曰へり、

太史公は余か手を握り、涙を垂れ且つ曰く、我か祖先は三代の時より常に史家として名を著せり、此名家余に至りて斷ゆへき歟、汝余に繼かは必ず祖先の遺書を讀め、天子余に命して山を祭るの儀に従はしむ、余病んで命を奉する能はず、帝必ず汝に命して父か務を果さしめ玉はん、左れば能く余か言を記せよ、孝は先つ親に事ふるに在り、然る

後君に忠なるに在り、終りは名を顯すに在り、大孝は汝か譽を以て父母の名を顯彰するに若くはなし。

司馬遷は父の遺言に負かさりき、彼は歴史家となり、太史に任せられ、遂に諫官となれり、彼は過去を記し、現在を議するの複務に當れり、諫官の地位頗る困難なれども、能く其職を盡して憚らさりき。彼の著述は浩瀚なる大篇にして精密公平なり、而して嚴正なる批評的斷定を以て著し、實に學問の偉大なる記念碑と云ふべし。史記は全部百三十卷、分ちて五篇とす。第一篇は帝紀にして帝國全體として其關する事跡を記せり、都合十二卷なり。第二卷は都合は十卷にして西洋に多く見る所の歴史上の綱領目表より成れり。第三篇は八卷にして八書と呼び、禮樂、譜、年表、天文、祭祀、水利及び度量に關して二千二百年間の沿革を記せり。第四篇は三十卷にして、周の諸侯より漢の相將に至るまで總へて土地所有者の歴史を載せたり。第五篇は七十卷にして、外國地誌及び文學政事技藝等に有名なる人の傳を掲げたり。

馬廷蘭

支那學者は數多の百科字類を著せり、其中或は農業、蠶繭、製陶等に關するもあり、或は行政制度、倉庫、水路等に關するもあり。就中最も有名なるは馬廷蘭にて、約々第十三世紀の中頃、廣西省に生れ、朱熹の門弟なりき。

宋亡ひ元興るに及びて、彼は身を著述に委ね、全く官途の念を斷ちたり。彼は二十年の日月を費して一の古代考を編纂したり、全部三百四十八卷にして二十四篇に分てり。余は茲に其目次を掲げん。

- 一、土地の分割及び其産出、三卷。
- 二、貨幣、二卷。
- 三、人口及び其増減、二卷。
- 四、行政、二卷。
- 五、租稅調庸等、六卷。
- 六、貿易、二卷。
- 七、地租、一卷。

八、國費、五卷。

九、百官の進退及び位階、十二卷。

十、學事及び對策法、七官。

十一、官職、二十一卷。

十二、祭祀、二十五卷。

十三、宗廟、十五卷。

十四、朝儀、二十二卷。

十五、樂、十五卷。

十六、兵、十六卷。

十七、刑罰拷問、十二卷。

十八、經書其他、七十六卷。支那文學を盡く網羅したるもの。

十九、各朝の年譜、十八卷。

二十、各朝の諸侯附庸等、十八卷。

二十一、天文、十七卷。

二十二、天變地災、二十卷。

二十三、支那地誌及び其沿革、九卷。

二十四、外國地誌及び外國人、二十五卷。

此書の續篇ありて今日に至るまでの事を附記せり。

以上二種の標本は孔子の徒に依りて發達したる支那學問につきて、十分明瞭なる觀念を作るを得ん。

形而下にして周到精密正確なる學問なれども、絶えて真正なる科學を見ず、蓋し科學は現象の形而上的法則の發見より出づるものなればなり。而して支那文明其者の結果たる此特性は、老莊の抽象的形而上學によりても、亦印度人回々教徒若くは耶蘇教徒の抽象的科學に依りても更に殆ど影響せられたることなし、此文明を一新し得んものは、夫れ唯、數理より倫理に至る各抽象的科學の獨斷的統一を基とする實驗的宗教(實驗哲學)に在るか。

支那と西洋の關係

一七六

吾人は、第一に支那文明の神髓たる元素を論じ、次に其歴史上の發達を叙し、終に其主要なる哲學的模範を説き、以て支那文明の測量を終結せり。蓋し支那は從來一種歴史上の不可思議に屬し、之を説明せんと企てたる神學的及び形而上學的理論は、一として其功を奏せざりしを以て、此測量は理論上より甚だ緊要のことなりしなり。勤勉なる博識家の賜として、或は趣味深き或は深遠なる論說の世に出てたるもの少しとせず、然れども全體より論じたる純粹の支那文明説は、二もあらざるなり。アベル・レムサト氏の如く此題目に對して深く心を委ねたる人と雖も、印度哲學に薰染せる所の形而上學者を以て、支那文明の標本なりと誤認せる事實は著明なる證據と云ふべし、實にレムサト氏は巧緻深遠なる論說を著せしに係ばらず、其深く研究せる人民の原本的精神を誤りて、彼等が永き心理的進化の根底なりける敬天の禮を理會し能はざりき。

此大歴史的問題は斯の如く解釋を経ざりき、而して實驗哲學の出現後にあらざれば解釋さるべし、蓋し實驗哲學は斯の如く解釋に依りて其深遠なる真如及び効驗を證明するものなり。然れども此理論の哲理上に緊要なるは如何に大なるも、若し此理論に必然に伴ふべき結果よりして、次第に親密になり行く支那西洋の關係を指導すべき法式的政略の基礎を演繹し、此關係を以て現在の如く兩者に對して不道德の原因たらしめず、能く取長補短の利益を収むるの媒となすを得ば、其效驗たるや更に一層大なるべし。然れば余か今西洋及び支那進化の兩研究よりして演繹し來らんと欲するは、斯の如き政略の原理に在る、之れ吾人が長き開攻の實地的社會的成績ならん。

余は此政略の説明をなすに先きたち、西洋今日の現状及び地球上他の諸國特に支那帝國との關係を簡單に考察せざるべからず。第一、争ふべからざる事實は、西洋の革命的状態なり、即ち標準とすべし。

の教を缺乏し、前例古格を守らず、過去を尊敬せずして、只管未來にのみ熱心し、次第に盛んになり行く睿智上の無政府なりとす。説の統一即ち永存すへき諸社會の基礎たる説の統一は速に消滅しつゝあり。西洋は斯の如く日に益、自ら不安定なる位地を執りつゝあるなり。第二の至要なる事實は工業的活力と冒險的精神の増大にして、此事實は前記説の統一に反動せず、却りて之を甚しからしむ。吾人は此兩事實の結果として世界の他の諸國との關係上如何なる影響を及ぼすやを論ずる前、先づ其歴史的原因を確定せざるべからず。第十四世紀の末なる中古は、族制なき平和的産業的なる不羈自由なる社會的團塊を近世に讓渡せり、其結果たるや科學的技術的及び産業的活力に最も都合好き事情なりき。オーガスト・コムトが希臘文明の自由進化の源なりと證したる境遇は、中古が成し遂げたる奴隸の解放に依りて西歐羅馬の數多の人民に普通となれり。必然に平和的なる社會の活力之より生じたる普及の安樂及び獨立族制及び神道政治の朽

敗に伴へる自由、此三者は前代未開の活力と未曾有の起業的剛氣の源となり、取得したる成績は唯之を強烈ならしむるのみ、中古に隆盛なりける神道的信仰の勢力より受くへき抵抗も、其衰耗すると共に次第に減少すめり。西洋の人民にのみ限りたる此運動は、其先達の連鎖希臘羅馬及び加特力的封建の必然なる成果なりとす。斯の如き現象中に置かれたる心は強ひて四方に其企圖を擴張するや必せり、工業に貿易に最も強き活力を發出するの個人的特質を起すや必せり、而して起したりき。斯く點火せられたる焰は科學的及び産業的精神、軍國的慣習及び神學的信仰(較劣弱なり)の連合衝動によりて、地球上他の諸國と活發なる關係を起すや必せり、而して此關係の甚だ廣濶なるは必然又必須の事なり。余が今分析したる所の境遇、即ち個人的起業及び科學的工業的發達に最も適したる境遇は、何を以て中古の末、特に十五世紀よりして益、大に益、盛なる關係か西洋及び地球上他の諸國間に發達せしやと説明せん。

吾人は當時地球止此處彼處と遠征の無比なる活力を見る、遊星は眞に
 發見せられて十分に探検せられしなり、航海術改良し、之より得たる所
 の地理上の智識は新なる冒險に刺戟を與へたり。吾人は茲に至要の事實を有せり、吾人は之を過去の事實の總結果なり
 と認めざるべからず、其善悪は、兎も角、余が説明したる如く、事實は之に
 他なる能はざるなり、然れども若し此等の關係は避くべからざるもの
 なるにもせよ、又復活せる西洋が構造すべき普通宗教の準備並に創立
 の爲め缺くべからざるものなりき。人間中一層發達せる部分の究竟目的は普通宗教の創立なり。此目的
 を達せんとする大計畫は西洋即ち加特力教に依りてなされたり、而し
 て假令其究竟目的に關しては全く大失敗なりしとはいへ、問題提出の
 爲め又其解釋を進むる爲めにも實に必要なりしなり。普通宗教を創
 立するの天任は、必然西洋に屬せり、何となれば斯の如き天任に必要な
 る條件は、抽象的科學が發生し得る軍國的文明なればなり。種々の現

象に關する普通眞正の法則を發見する所の抽象的科學は、眞に普通と
 なり得る所の教の獨斷的基礎用となり得る唯一の物なり、何となれば
 斯の如き科學は其單個なると集合なるとを問はず、人間の存在を制す
 る所の原來的秩序を宣言すればなり。抽象の此宗全なる發達はオー
 ガスト・コムトが示せる如く、西洋の軍國的人民の特色なり、蓋し軍國的
 活力のみ起業及び個人的獨立の必要なる慣習を播種し得べきを以て、
 其偏強は一定の宗教を創立するに必要なるものなり。要するに普通
 宗教の基礎は唯人間率先の守護兵たる西洋よりのみ出づるを得べく、
 過去の進化の總結果なるオーガスト・コムトの大機軸によりて實は竟
 に提出せられたるなり。左れは西洋と地球上他の諸國との活潑なる
 關係は、第一普通教育の創立の爲め、次に其擴布の爲め必須のものなり
 じなり。地球の知識、管に星學が給與するか如き理論的のもののみならず、活潑
 なる探検が示すか如き實際的のものも、一定の宗教の基礎にとめては、

其統一せんと欲する諸國民の正確なる位地を決定せんか爲め必要な
 斯の如くして吾人は國民的立脚點の狹隘を避けつゝ、又神學的總念の
 任意的孟浪を擲ちつゝ、眞に世界を包括する所の政界の概念を作るを
 得なん。
 科學的信仰は爾來其正確而かも十分普通なる目的の爲め、竟に神異的
 及び經驗的制限を打破して、以て世界の統一を建設せざるべからず、其
 總括する意見の廣袤は更に實在の範圍を超過せず。斯の如く地球
 に関する實際の智識は星學より來るの智識を完成しつゝ、能く其支配
 せんと欲する所の目的を正確に決定し、以て普通宗教の爲めに其基礎
 を供給せり。
 地球の表面に現在する種々の開化に對する眞全の智識は、猶他の點よ
 りして一定の宗教を創立するに必要なりき、何となれば此等千態萬狀
 の社會的進化を観察するとき、人をして絶對的立脚點より事物を望

既成の發達必要

むの慣習を避け、神學が普通宗教を創立するに如何に無力なるやを悟
 らしむべければなり。二箇の大一神教なる加特力教及び回教、即ち
 普通を要求し得べき唯二箇の宗教にありては、其盛大を極めし時と雖
 も、僅に人類の少數に影響するに過ぎざりき。此等種々の開化に關す
 る智識のみ、唯社會學的法則を實證するを得べし、即ち吾人は、時間に於
 て、西洋文明の相貌の齊一なる連鎖の考察に依りて、主として發見せる
 進化の法則を、空間に於て、實證するを得べきなり。
 以上列記せる種々の點よりして、西洋と地球の他の部分とに活潑なる
 交際のおらんこと、一定せる宗教の基礎並に其最後の定立の爲め必要
 なりしなり。世界上各國民の智識は、人間の花たる西洋人の一團に依
 りて推蔽せられたる教を傳播するの概括を工夫するの豫備として必
 要なりしなり。革命期の五世紀間に西洋と世界の他の部分とに成立
 せる關係は、故に必須にもあり又必然にもありしなり。
 然れども此等の關係は其起源と發達とを自釋せる時期の無政府的特